富 山 県 文 化 振 興 財 団
埋蔵文化財発掘調査報告第 80 集

# 下邑遺跡
# 小長沢Ⅱ遺跡　　発掘調査報告
# 小長沢鎌蓋遺跡

―県営農地整備事業小長沢地区に伴う
埋蔵文化財発掘報告―

２０２４年

公益財団法人　富山県文化振興財団
埋　蔵　文　化　財　調　査　課

# 下邑遺跡
# 小長沢Ⅱ遺跡　　発掘調査報告
# 小長沢鎌蓋遺跡

―県営農地整備事業小長沢地区に伴う
埋蔵文化財発掘報告―

２０２４年

公益財団法人　富山県文化振興財団
埋　蔵　文　化　財　調　査　課

# 序

本書は、県営ほ場整備事業に先立ち、令和４（2022）年度に実施した下邑遺跡と小長沢Ⅱ遺跡、令和５（2023）年度に実施した小長沢鎌蓋遺跡の発掘調査の成果をまとめたものです。

これらの遺跡は、富山県を代表する弥生時代終末期から古墳時代前期の墳墓や集落である国指定史跡王塚・千坊山遺跡群のある羽根丘陵と井田川につながる山田川とにはさまれた平野部で、現在は水田地帯となっています。

発掘調査の結果、下邑遺跡では古代から中世までの遺物が出土した自然流路、小長沢Ⅱ遺跡では古代以降の溝群、小長沢鎌蓋遺跡では自然流路がみつかり、自然科学分析によって旧地形や集落周辺での耕作地の様子も明らかになりました。

こうした発掘調査の成果が、文字の記録に現れることのない人々の生活をひもとく一助となり、地域の歴史と文化財の理解に役立てば幸いです。

本書をまとめるにあたり、ご協力とご指導を頂きました関係機関および関係諸氏に厚く感謝申し上げます。

令和６年３月

公益財団法人富山県文化振興財団
埋　蔵　文　化　財　調　査　課

# 例　　言

1　本書は富山県富山市婦中町小長沢に所在する下邑遺跡、小長沢Ⅱ遺跡および小長沢鎌蓋遺跡の発掘調査報告書である。

2　調査は富山県からの委託を受け、公益財団法人富山県文化振興財団が行った。
本遺跡の発掘調査期間と本書刊行までの整理期間は下記のとおりである。

調査期間　　令和４（2022）年 10 月７日～11 月 28 日　……下邑遺跡、小長沢Ⅱ遺跡
　　令和５（2023）年７月 24 日～８月１日　……小長沢鎌蓋遺跡
整理期間　　令和４（2022）年 11 月 29 日～令和５（2023）年３月 27 日
　　令和５（2023）年８月２日～令和６（2024）年３月 22 日

3　調査に関する全ての資料と出土遺物は、本書刊行後、富山県埋蔵文化財センターで保管する。

4　遺跡の略号は、市町村番号（富山市は 01）に遺跡名のアルファベット頭文字を続け、下邑遺跡を「01ＳＭ」、小長沢Ⅱ遺跡を「01ＫＳ２」、小長沢鎌蓋遺跡を「01ＫＳＫ」とし、遺物の注記にはこの略号を用いた。なお、小長沢Ⅱ遺跡については発掘調査時、Ａ地区（01ＫＳ２－Ａ）としていた。

5　本書の執筆および編集は、町田賢一が担当した。なお、下邑遺跡と小長沢Ⅱ遺跡については、調査担当者である島田亮仁の所見をもとに町田が執筆した。また、第Ⅳ章６と第Ⅴ章６の自然科学分析は、文化財調査コンサルタント株式会社に委託し、渡辺正巳が執筆した。

6　本書で使用している遺構の略号は、以下のとおりである。
ＳＤ：溝、ＳＸ：落ち込み、ＮＲ：自然流路

7　遺構番号は、遺構の種類に関わらず、遺跡ごとに連番とした。

8　本書で示す座標は、平面直角座標系第７系（世界測地系）を基準とし、方位は全て真北、標高は海抜高である。

9　挿図の縮尺は下記を基本とし、各図の下に縮尺率を示す。
遺構　溝・落ち込み・自然流路：１／40、１／100
遺物　土器・陶磁器：１／３、１／４　木製品：１／３

10　施釉陶磁器の釉の掛かる範囲は、１点鎖線で示す。

11　土層及び遺構埋土、土器胎土の色については、農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修『新版標準土色帖』および日本規格協会『ＪＩＳ　標準色票－光沢版』を参照した。

12　遺物は、種類に関わらず、遺跡ごとに連番を付す。下邑遺跡１～16、小長沢Ⅱ遺跡 17～31、小長沢鎌蓋遺跡 32～39 とし、本文・挿図・一覧表・写真図版中の遺物番号は全て一致する。

13　本文・挿図で扱った遺構・遺物は、一覧表に掲載している。凡例は以下のとおりである。
①　遺構の埋土に切り合い関係がある場合は、備考欄に新＞古のように記号で示す。
②　遺構規模・土器法量の（　）内は現存長を表す。残存部が少なく、計測不能なものは空欄とした。
③　重量はｇ単位で示す。計測には電子秤（SHIMAZU LIBROR EB-6205）を用いた。

14　発掘調査から本書の作成に至るまで、下記の方々から多大なご教示・ご協力を得た。記して謝意を表します。（敬称略，五十音順）
朝田要、鹿島昌也、小澤信作、富山県埋蔵文化財センター、富山市教育委員会埋蔵文化財センター、納屋内高史、細辻嘉門、堀内大介

# 目　　次


## 第Ⅰ章　調査の経過 …… 1

1　調査に至る経緯 …… 1

2　発掘作業の経過と方法 …… 4

3　整理作業の経過と方法 …… 4

## 第Ⅱ章　位置と環境 …… 5

1　地理的環境 …… 5

2　歴史的環境 …… 8

## 第Ⅲ章　下邑遺跡 …… 12

1　概　　要 …… 12

2　層　　序 …… 12

3　遺　　構 …… 12

4　遺　　物 …… 13

5　小　　括 …… 13

## 第Ⅳ章　小長沢Ⅱ遺跡 …… 20

1　概　　要 …… 20

2　層　　序 …… 20

3　遺　　構 …… 20

4　遺　　物 …… 22

5　小　　括 …… 22

6　自然科学分析 …… 33

## 第Ⅴ章　小長沢鎌蓋遺跡 …… 40

1　概　　要 …… 40

2　層　　序 …… 40

3　遺　　構 …… 40

4　遺　　物 …… 41

5　小　　括 …… 41

6　自然科学分析 …… 45

## 第Ⅵ章　総括 …… 53

## 報告書抄録

# 挿図目次


第１図　下邑遺跡、小長沢Ⅱ遺跡、小長沢鎌蓋遺跡　位置図
第２図　下邑遺跡、小長沢Ⅱ遺跡、小長沢鎌蓋遺跡　位置古図
第３図　下邑遺跡、小長沢Ⅱ遺跡、小長沢鎌蓋遺跡　米軍写真合成図
第４図　周辺の遺跡
第５図　下邑遺跡　遺構全体図
第６・７図　下邑遺跡　遺構平面図
第８図　下邑遺跡　基本層序・遺構断面図
第９図　下邑遺跡　遺物実測図
第10図　小長沢Ⅱ遺跡　遺構全体図
第11～14図　小長沢Ⅱ遺跡　遺構平面図
第15図　小長沢Ⅱ遺跡　遺物出土状況図
第16図　小長沢Ⅱ遺跡　基本層序・遺構断面図
第17・18図　小長沢Ⅱ遺跡　遺物実測図
第19～25図　小長沢Ⅱ遺跡　自然科学分析図
第26図　小長沢鎌蓋遺跡　遺構全体図
第27図　小長沢鎌蓋遺跡　基本層序・遺構断面図
第28図　小長沢鎌蓋遺跡　遺物実測図
第29～35図　小長沢鎌蓋遺跡　自然科学分析図
第 36図　周辺の遺跡における花粉分析結果


# 表目次


第１表　下邑遺跡　既往の調査一覧
第２表　小長沢Ⅱ遺跡、小長沢鎌蓋遺跡　既往の調査一覧
第３表　調査一覧
第４表　調査の経過
第５表　調査・整理体制
第６表　周辺の遺跡一覧
第７表　下邑遺跡　遺構一覧
第８表　下邑遺跡　土器・陶磁器一覧
第９表　下邑遺跡　木製品一覧
第10表　小長沢Ⅱ遺跡　遺構一覧
第11表　小長沢Ⅱ遺跡　土器・陶磁器一覧
第12表　小長沢Ⅱ遺跡　木製品一覧
第13～15表　小長沢Ⅱ遺跡　自然科学分析
第16表　小長沢鎌蓋遺跡　遺構一覧
第17表　小長沢鎌蓋遺跡　遺物一覧
第18～20表　小長沢鎌蓋遺跡　自然科学分析


# 写真図版目次

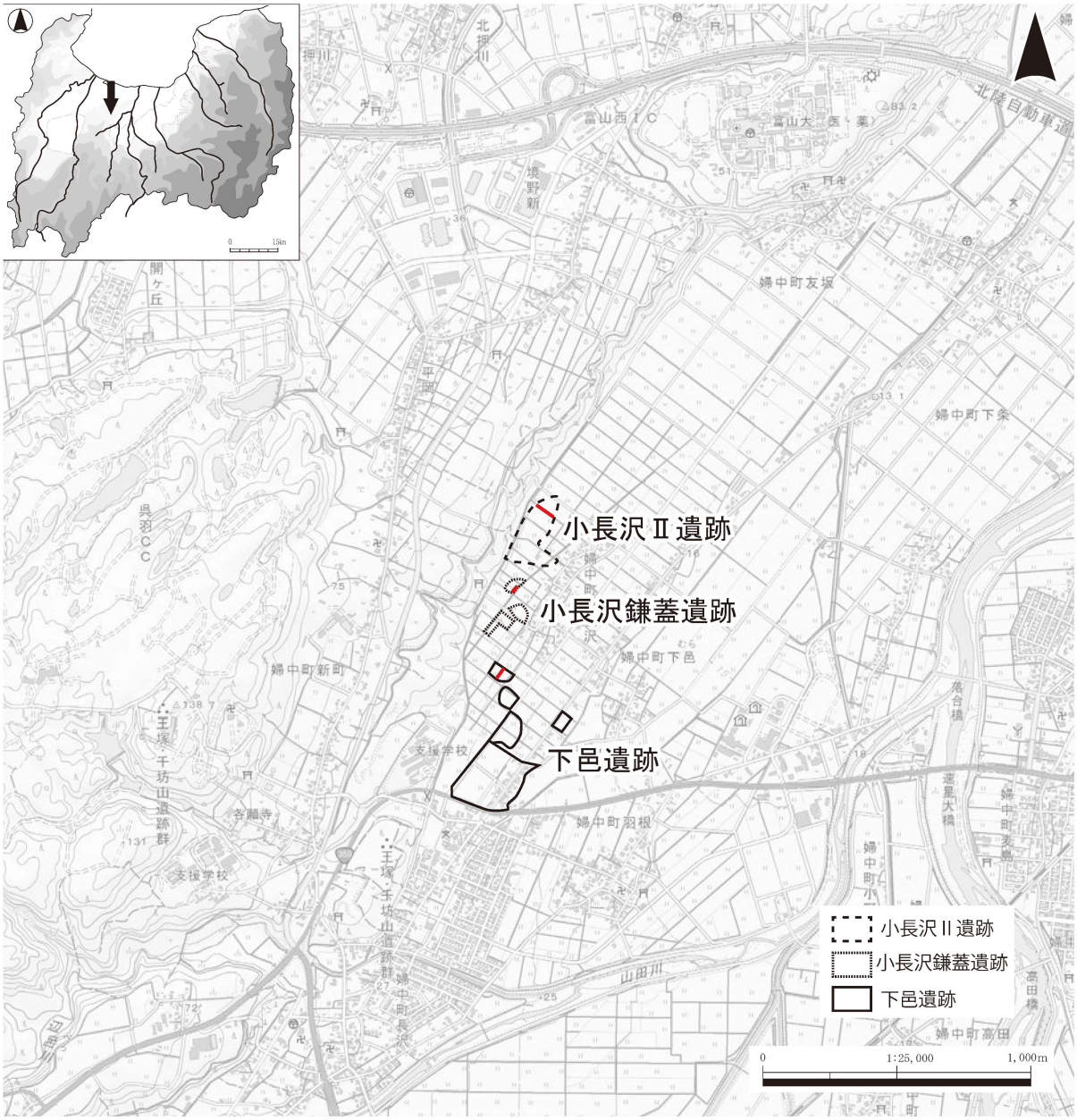

図版１　航空写真（1946・2021 年撮影）
図版２　下邑遺跡　遠景
図版３　下邑遺跡　全景・遺構
図版４　下邑遺跡　土器・陶磁器
図版５　下邑遺跡　木製品
図版６　小長沢Ⅱ遺跡　遠景
図版７　小長沢Ⅱ遺跡　全景・遺構
図版８・９　小長沢Ⅱ遺跡　遺構
図版10　小長沢Ⅱ遺跡　土器・陶磁器
図版11・12　小長沢Ⅱ遺跡　木製品
図版13　小長沢鎌蓋遺跡　遠景
図版14　小長沢鎌蓋遺跡　遺構
図版15　小長沢鎌蓋遺跡　土器・陶磁器

# 第Ⅰ章　調査の経過

## 1　調査に至る経緯

### （1）調査の契機

下邑遺跡、小長沢Ⅱ遺跡、小長沢鎌蓋遺跡は、富山市の西部で旧婦負郡婦中町の小長沢地区に所在する。小長沢地区に所在する土地改良記念碑（1966年建立）によれば、婦中町古里土地改良区によって昭和31（1956）～34（1959）年に近隣の新町地区と下邑地区とあわせて61町歩（約61ha）の土地改良事業区画整理が行われ、広大な水田地帯が広がっている。富山県農林水産部農村整備課では、生産基盤の整備、担い手への農地集積・集約化を進めるため、県内各所でほ場整備事業を行っている。小長沢地区では先の土地改良から60年近くが経ち、大区画のほ場整備が必要とされ、41.1haを対象に平成29（2017）年から令和7（2025）年までの工期で経営体育成型の農地整備事業が計画された。




**第１図　下邑遺跡、小長沢Ⅱ遺跡、小長沢鎌蓋遺跡位置図**（１：25,000）

富山市教育委員会（埋蔵文化財センター）では、この事業を整備するにあたり遺跡への影響が考えられることから、事業地内に存在する下邑遺跡と小長沢Ⅱ遺跡について平成30（2018）年度から令和３（2021）年度まで、遺跡の有無を確認するため大規模な試掘調査を行った。

平成30（2018）年度の試掘調査は、下邑遺跡（39,800㎡）を対象に行われ、縄文時代晩期の土坑、弥生時代後期の土坑、古代の柱穴や溝を検出した。遺物は縄文土器、弥生土器、古代の土師器・須恵器、近世陶磁器が出土している（細辻2019）。

令和元（2019）年度の試掘調査は、下邑遺跡（対象面積23,941㎡）で古代の溝を検出した。遺物は縄文土器、弥生土器、古代の土師器・須恵器、中世土師器、珠洲、越中瀬戸、伊万里が出土している。小長沢Ⅱ遺跡（対象面積14,021㎡）では、弥生時代の溝・ピットを検出した。遺物は弥生土器、古墳時代の土師器、中世土師器、珠洲、碁石が出土している（細辻2020）。

令和２（2020）年度の試掘調査は、下邑遺跡（対象面積31,820㎡）で古代の溝・ピットを検出した。遺物は縄文土器、古代の土師器・須恵器、中世土師器、越中瀬戸、近世陶磁器が出土している。小長沢Ⅱ遺跡（対象面積2,480㎡）では、中世の溝・ピットを検出した。遺物は中世土師器、珠洲、中世の銅銭、越中瀬戸が出土している（細辻2021）。

令和３（2021）年度の試掘調査は、小長沢Ⅱ遺跡（対象面積40,700㎡）で弥生時代・古代・近世の溝を検出した。遺物は弥生土器、古代の土師器・須恵器、珠洲、近世磁器が出土している（細辻2022）。

この試掘調査結果を受けて富山市教育委員会では、令和３（2021）年度に遺跡範囲の変更を行った。これによって小長沢Ⅱ遺跡は遺跡範囲が縮小し、西側は分割されて小字名の鎌蓋から新たに小長沢鎌蓋遺跡と命名された。また、下邑遺跡は遺跡範囲東側がなくなり、縮小となった（富山県2022）。登録時の遺跡種別は、下邑遺跡が縄文・弥生・古代・中世・近世集落、小長沢Ⅱ遺跡が縄文・古代・中世・近世集落、小長沢鎌蓋遺跡が弥生・古代集落である。

公益財団法人富山県文化振興財団埋蔵文化財調査課では、これらの遺跡のうちほ場整備事業による工事で遺跡を棄損する掘削工事が行われる水路部分について、富山県教育委員会を介して富山県農林水産部農村整備課からの依頼を受け、発掘調査（本調査）を実施した。調査面積は令和４（2022）年度の下邑遺跡158㎡と小長沢Ⅱ遺跡281㎡、令和５（2023）年度の小長沢鎌蓋遺跡56㎡である。

**引用文献**

細辻嘉門2019「下邑遺跡」『富山市の遺跡物語』№20　富山市教育委員会埋蔵文化財センター
細辻嘉門2020「下邑遺跡・小長沢Ⅱ遺跡」『富山市の遺跡物語』№21　富山市教育委員会埋蔵文化財センター
細辻嘉門2021「下邑遺跡・小長沢Ⅱ遺跡」『富山市の遺跡物語』№22　富山市教育委員会埋蔵文化財センター
細辻嘉門2022「下邑遺跡・小長沢Ⅱ遺跡」『富山市の遺跡物語』№23　富山市教育委員会埋蔵文化財センター
富山県埋蔵文化財センター2022『富山県埋蔵文化財センター年報－令和３年度－』

## （２）既往の調査

富山県埋蔵文化財センター刊行の『富山県埋蔵文化財センター年報』や富山市教育委員会埋蔵文化財センター刊行の所報『富山市の遺跡物語』をもとに調べてみると、既述の県営ほ場整備事業以外の発掘調査では個人住宅建設や倉庫の建設などに伴う小規模な試掘調査程度しか行われていない。これらの試掘調査では、遺構や遺物はほとんどみつかっておらず、遺跡の具体的な内容をつかむには至っていない。

## 第１表　下邑遺跡　既往の調査一覧

| 調査 | 調査地 | 調査形態 | 調査組織 | 対象面積（㎡） | 調査面積（㎡） | 調査年月日 | 調査原因 | 検出遺構 | 出土遺物 | 文献 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 婦中町小長沢 2-1 | 試掘 | 市教委 | 495 | 8.5 | 20031216 | 農家住宅建設 | なし | なし | 1 |
| 2 | 婦中町小長沢 49-1 | 試掘 | 市教委 | 495 | 30 | 20070511 | 個人住宅建設 | なし | なし | 2 |
| 3 | 婦中町下邑 58-1 | 試掘 | 市教委 | 205 | 11 | 20140114 | 農機具格納庫建設 | なし | なし | 3 |
| 4 | 婦中町小長沢 203-1 | 試掘 | 市教委 | 499 | 15 | 20141225 | 個人住宅建設 | なし | なし | 4 |
| 5 | 婦中町小長沢字前田 2217 | 試掘 | 市教委 | 673 | 33 | 20170612 | 個人住宅建設 | なし | なし | 5 |
| 6 | 婦中町小長沢 151-1 | 試掘 | 市教委 | 540 | 10 | 20180116 | 個人住宅建設 | なし | なし | 5 |
| 7 | 婦中町小長沢地内 | 試掘 | 市教委 | 39,800 | 242 | 20181015～20181112 | 県営ほ場整備 | 縄文土坑（晩期）、弥生土坑（後期）、古代柱穴、古代溝 | 縄文土器、弥生土器、須恵器、土師器、江戸陶磁器 | 6 |
| 8 | 婦中町下邑地内 | 試掘 | 市教委 | 226 | 6 | 20190509 | 個人住宅建設 | なし | なし | 7 |
| 9 | 婦中町小長沢地内 | 試掘 | 市教委 | 23,941 | 163 | 20191105～20191113 | 県営ほ場整備 | 古代溝 | 縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、中世土師器、珠洲、越中瀬戸、伊万里 | 11 |
| 10 | 婦中町小長沢地内 | 試掘 | 市教委 | 31,820 | 163 | 20201014～20201111 | 県営ほ場整備 | 古代溝・ピット | 縄文土器、土師器、須恵器、中世土師器、越中瀬戸、江戸陶磁器 | 8 |

## 第２表　小長沢Ⅱ遺跡、小長沢鎌蓋遺跡　既往の調査一覧

| 調査 | 調査地 | 調査形態 | 調査組織 | 対象面積（㎡） | 調査面積（㎡） | 調査年月日 | 調査原因 | 検出遺構 | 出土遺物 | 文献 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 婦中町小長沢字前田1940-1 外 | 試掘 | 市教委 | 633 | 31 | 20130625 | 個人住宅建設 | なし | 江戸陶器 | 3 |
| 2 | 婦中町小長沢地内 | 試掘 | 市教委 | 14,021 | 85 | 20191023～20191105 | 県営ほ場整備 | 弥生溝・ピット | 弥生土器、土師器、中世土師器、珠洲、碁石 | 11 |
| 3 | 婦中町小長沢地内 | 試掘 | 市教委 | 1,286 | 18 | 20200828 | 個人住宅建設 | なし | 近代磁器 | 8 |
| 4 | 婦中町小長沢地内 | 試掘 | 市教委 | 2,480 | 20 | 20201014～20201111 | 県営ほ場整備 | 中世溝・ピット | 中世土師器、珠洲、古銭、越中瀬戸 | 8 |
| 5 | 婦中町小長沢地内 | 試掘 | 市教委 | 218 | 10 | 20210615 | 個人住宅建設 | なし | 中世土師器 | 9 |
| 6 | 婦中町新町地内 | 試掘 | 市教委 | 40,700 | 204 | 20211005～20211107 | 県営ほ場整備 | 弥生溝、古代溝、近世溝 | 弥生土器、土師器、須恵器、珠洲、江戸磁器 | 9 |
| 7 | 婦中町小長沢地内 | 試掘 | 市教委 | 2,773 | 53 | 20220712 | 穀物乾燥施設倉庫建築 | 弥生溝、古代溝 | 弥生土器、土師器、須恵器 | 10 |

### 引用文献


1　富山県埋蔵文化財センター 2004『富山県埋蔵文化財センター年報－平成15年度－』
2　富山県埋蔵文化財センター 2008『富山県埋蔵文化財センター年報－平成19年度－』
3　富山県埋蔵文化財センター 2014『富山県埋蔵文化財センター年報－平成25年度－』
4　富山県埋蔵文化財センター 2015『富山県埋蔵文化財センター年報－平成26年度－』
5　富山県埋蔵文化財センター 2019『富山県埋蔵文化財センター年報－平成29年度－』
6　富山県埋蔵文化財センター 2020『富山県埋蔵文化財センター年報－平成30年度－』
7　富山県埋蔵文化財センター 2020『富山県埋蔵文化財センター年報－令和元年度－』
8　富山県埋蔵文化財センター 2021『富山県埋蔵文化財センター年報－令和２年度－』
9　富山県埋蔵文化財センター 2022『富山県埋蔵文化財センター年報－令和３年度－』
10　富山県埋蔵文化財センター 2023『富山県埋蔵文化財センター年報－令和４年度－』
11　富山市教育委員会埋蔵文化財センター 2021『富山市の遺跡物語』№22

## 2　発掘作業の経過と方法

下邑遺跡、小長沢Ⅱ遺跡、小長沢鎌蓋遺跡の調査区は、いずれも水田に伴う排水路幅のみの狭小である。隣接する水田は調査後に耕作を再開することから、掘削土と表土が混在しないようにするため、重機による表土除去は調査区よりも広めに行った。重機による表土除去後、水田床土や盛土などは重機でさらに掘削し、表土を除去した調査区隣接地に仮置きした。遺物包含層の掘削、遺構の検出・掘削は人力で行い、掘削土は調査区隣接地に排出した。

記録図面は概略図（１：100 または１：200）、遺構断面図（１：20）、土層断面図（１：20）、遺物出土状況図（１：10）で、すべて調査員が手作業で作成した。記録写真は、土層や遺構断面をコンパクトデジタルカメラ（OLYMPUS　TOUGH　TG-6）で、調査区の全景や遺構のブロック写真を６×７フィルムカメラ（PENTAX 67Ⅱ　カラー・白黒フィルム）とデジタル一眼レフカメラ（Nikon　D 5600）で、調査員が撮影した。遺構平面図は、下邑遺跡と小長沢Ⅱ遺跡については日本海航測株式会社がラジコンヘリコプターによる空中写真測量（FUJIFILM　GFX50S カメラ使用）で作成、小長沢鎌蓋遺跡については北陸航測株式会社がトータルステーション（Trimble SX12）による現地測量で作成した。測量終了後、重機で調査区の埋め戻しを行い、表土を戻し、現地調査は終了した。

**第３表　調査一覧**

| 遺跡 | 調査期間 | 調査面積（㎡） | 担当者 | 検出遺構 | 出土遺物 |
|---|---|---|---|---|---|
| 下邑遺跡 | 20221007～20221031 | 158 | 島田　亮仁<br>髙柳由紀子 | 溝・自然流路 | 土師器、須恵器、中世土師器、珠洲、越中瀬戸、肥前系陶磁器、木製品 |
| 小長沢Ⅱ遺跡 | 20221027～20221128 | 281 | | 溝・落ち込み・小穴 | 縄文土器、弥生土器、土師器、珠洲、青磁、白磁、肥前系陶磁器、木製品 |
| 小長沢鎌蓋遺跡 | 20230724～20230801 | 56 | 田中　道子<br>町田　賢一 | 自然流路 | 土師器、越中瀬戸、肥前系陶磁器 |

**第４表　調査の経過**

| | 下邑遺跡 | 小長沢Ⅱ遺跡 | 小長沢鎌蓋遺跡 |
|---|---|---|---|
| 表土機械掘削 | 20221007 | 20221027 | 20230724 |
| 盛土機械掘削 | 20221011 | 20221028～20221031 | 20230725 |
| 遺構検出・人力掘削 | 20221013～20221020 | 20221102～20221116 | 20230725～20230726 |
| 全景写真撮影 | 20221021 | 20221118 | 20230726 |
| 空中写真・現地測量 | 20221021 | 20221118 | 20230726 |
| 埋め戻し | 20221025～20221031 | 20221125～20221128 | 20230731～20230801 |

## 3　整理作業の経過と方法

記録図面や記録写真の整理は発掘調査終了後、調査員が早急に行い、遺構や写真などの台帳作成も行った。出土遺物は調査員が洗浄、注記、選別を行った。木製品については、調査員が計測とデジタルカメラによる写真撮影後、台帳を作成した。遺物の実測は、調査員が手実測で行った。遺物のトレースは、調査員が Adobe Illustrator CS6 を用いて行った。

**第５表　調査・整理体制**

| | 総括 | 総務 | 担当 |
|---|---|---|---|
| 令和４年度 | 課長　島田美佐子 | 副主幹　越前慎子 | 副主幹　島田亮仁　髙柳由紀子 |
| 令和５年度 | 課長　田中道子 | | 副主幹　町田賢一 |

# 第Ⅱ章　位置と環境

## 1　地理的環境

下邑遺跡、小長沢Ⅱ遺跡、小長沢鎌蓋遺跡は、県庁所在地で富山県中央部にある富山市に所在する。現富山市は「平成の大合併」で、平成17（2005）年４月１日に旧富山市・上新川郡大沢野町・上新川郡大山町・婦負郡八尾町・婦負郡婦中町・婦負郡山田村・婦負郡細入村の１市４町２村が合併したもので、面積1,241.77ｋ㎡と富山県の約１／３を占める県内最大の都市である。下邑遺跡、小長沢Ⅱ遺跡、小長沢鎌蓋遺跡は、富山市の西部にあたる旧婦中町小長沢に位置する。旧婦中町は神通川・井田川流域の扇状地と呉羽丘陵南部や羽根丘陵の丘陵地からなる水田地帯であったが、旧富山市街に近いことからそのベットタウンとして発展し、合併前の旧町村では最も人口の多い地域でもあった。

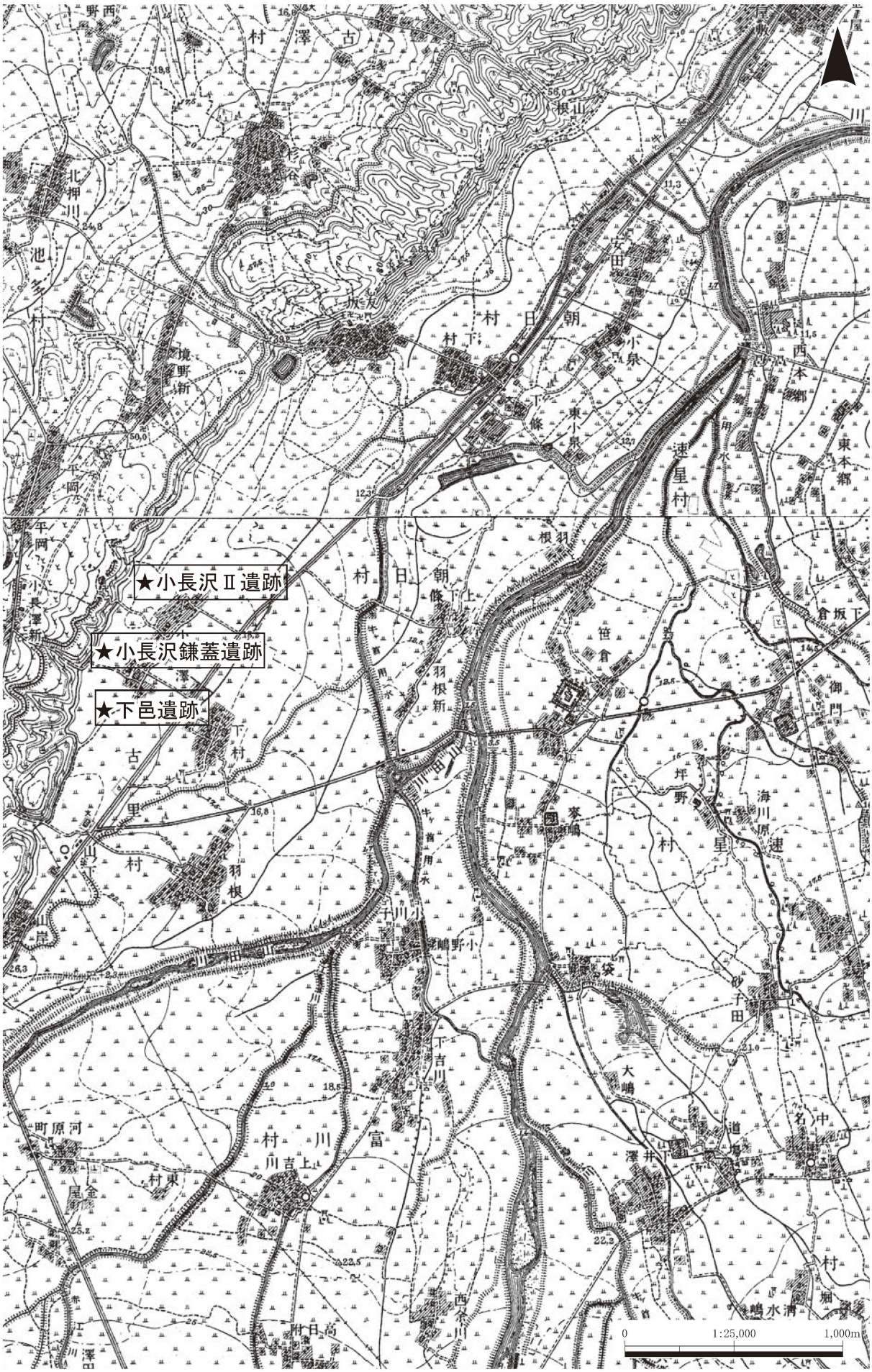
小長沢は元々石田と呼ばれ、長沢川（現、山田川）の小石河原を開拓してその名がついたという。古代では婦負郡小子郷にあったとされる。近世には富山藩領婦負郡長沢郷小長沢村となり、近代には古里村の一部となっている。現在の集落はふるさと農道沿いにまとまってある。また、羽根丘陵中腹部（小字大山）には、村社で仁徳天皇を祭神とする若宮八幡社がある。若宮八幡社は文化２（1805）年に熊野社を合祀し、元治元（1864）年に本殿を造営したとされ、令和４（2022）年に改築された。

下邑遺跡、小長沢Ⅱ遺跡、小長沢鎌蓋遺跡は、富山市と南砺市にまたがる金剛堂山から井田川へと流れ込む山田川と、呉羽丘陵南側の羽根丘陵とにはさまれた沖積平野にある。現況面の標高は、北にある小長沢Ⅱ遺跡で17m前後、小長沢鎌蓋遺跡で18m前後、南にある下邑遺跡で20m前後となっている。『地形分類図　八尾』では低地－新扇状地、『表層地質図　八尾』では未固結堆積物－泥、『土じょう図　八尾』ではグライ台地土壌－滝川統にあたる。現況は、これらの地質を反映した粘土質の土壌を耕作土とし、良質な米が収穫される水田地帯である。

現在、遺跡周辺は平坦な水田が広がるが、明治43（1910）年測図の第２図をみてみると、南西から北東方向に向かって下る同心円状の等高線がある。これはかつてこの一帯が南方の山地から流れる山田川による扇状地であったことを示している。さらに昭和21（1946）年米軍撮影の第３図をみてみると水田の区画が湾曲している部分があり、土地改良前には流路がいくつかあったと考えられる。

写真１　小長沢地区村社　若宮八幡社

写真２　1966年建立土地改良記念碑




**第２図　下邑遺跡、小長沢Ⅱ遺跡、小長沢鎌蓋遺跡　遺跡位置古図**（１：25,000）
※国土地理院（明治 43 年測図・大正７年発行『二万五千分ー地形図　富山・大久保』から作成）

**第３図　下邑遺跡、小長沢Ⅱ遺跡、小長沢鎌蓋遺跡　米軍写真（1946 年撮影）合成図**
（国土地理院　USA-M203-A-123 使用）

## 2　歴史的環境

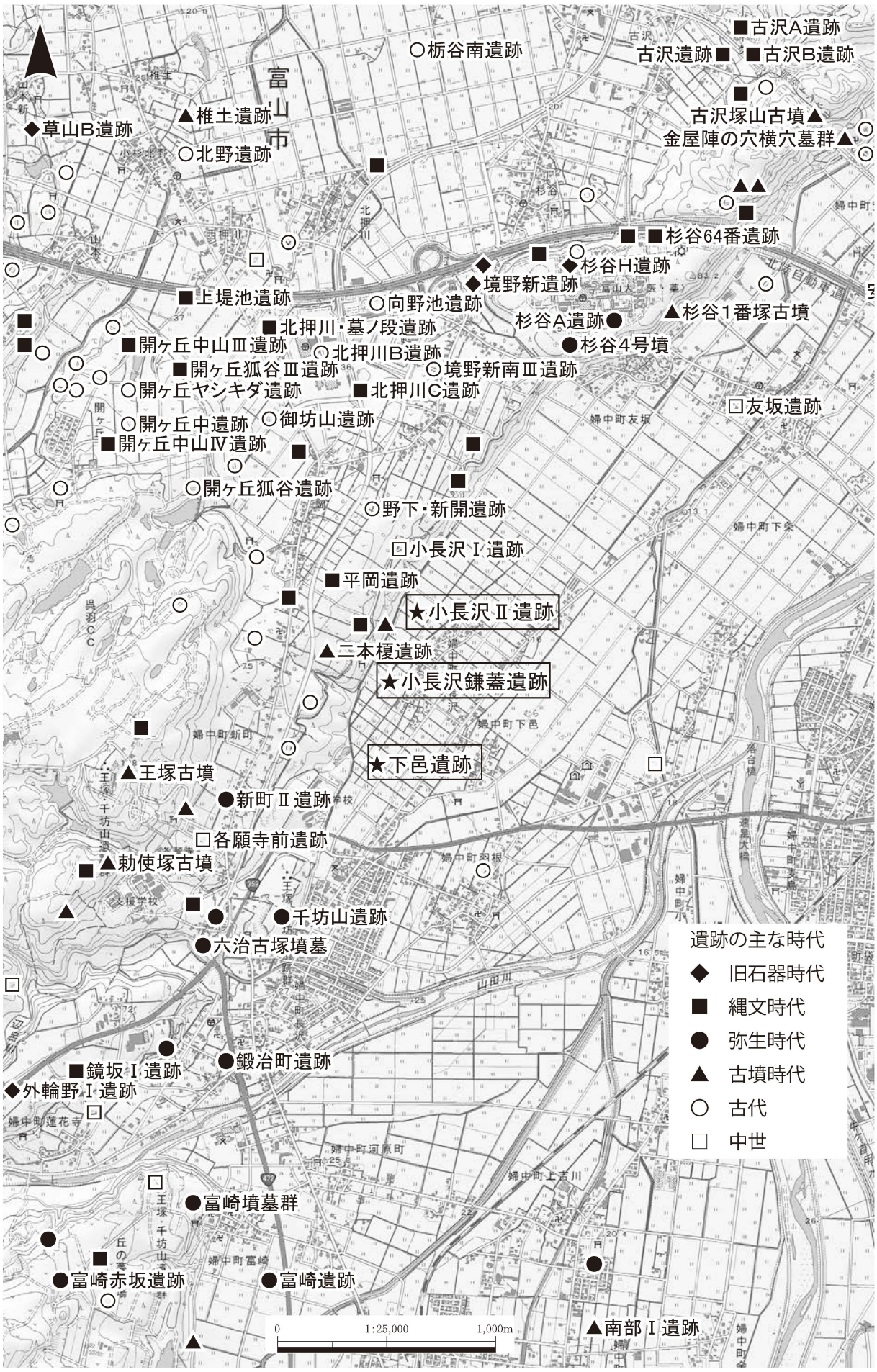
下邑遺跡、小長沢Ⅱ遺跡、小長沢鎌蓋遺跡の周辺では、沖積平野部分には少ないものの、西側の呉羽丘陵・境野新扇状地扇頂部・射水丘陵・羽根丘陵を中心に旧石器時代から近世まで数多くの遺跡がある。発掘調査を行った主な遺跡を時代順に見てみると、旧石器時代では呉羽丘陵の杉谷Ｈ遺跡、扇状地扇頂部の境野新遺跡や北押川・墓ノ段遺跡、羽根丘陵の千坊山遺跡や鏡坂Ⅰ遺跡、射水丘陵の草山Ｂ遺跡や開ヶ丘狐谷Ⅲ遺跡などでナイフ形石器が出土しており、県内では数少ない旧石器が、複数の遺跡でみつかる地域となっている。とくに草山Ｂ遺跡ではユニットが２か所あり、集落の様相を示している（狩野他 1986）。このほかに向野池遺跡では瀬戸内技法による剥片、北押川Ｂ遺跡では東山系や杉久保系のナイフ形石器が出土しており、広域交流がうかがえる資料がみつかっている。

縄文時代では丘陵地を中心に多くの遺跡がある。草創期では土器はみつかっていないが、新町Ⅱ遺跡や千坊山遺跡で槍先形尖頭器が出土している。なお、報告書（折原編 2006）によれば向野池遺跡で草創期から早期の竪穴建物から土器片がまとまって出土しているという。前期になると平岡遺跡や北押川Ｃ遺跡で土器から時期比定ができる竪穴建物がみつかるようになる。とくに平岡遺跡では環状に配置された竪穴建物群（居住域）、環状内に掘立柱建物・土坑墓・埋設土器（墓域）がみつかり、県内では最も古い“環状集落”が形成されている。中期では鏡坂Ⅰ遺跡、上堤池遺跡、開ヶ丘中山Ⅲ遺跡、開ヶ丘狐谷Ⅲ遺跡など複数の遺跡で竪穴建物がみつかっている。なかでも開ヶ丘狐谷Ⅲ遺跡はほぼ全域を発掘調査し、北側に中期前葉、南側に中期中葉と二つの“環状集落”を確認した県内でも随一の縄文集落である（平岡編 2009）。晩期では古沢Ａ遺跡や北野遺跡で住居もしくは祭祀施設とされる大型の柱穴列が検出されている。このほかに古沢遺跡で貯蔵穴、古沢Ｂ遺跡で赤彩装身具などを入れた単独の土坑墓がみつかっているなど呉羽丘陵南部と射水丘陵北部に遺跡がみられる。

弥生時代になると居住域は鍛冶町遺跡や富崎遺跡などの沖積平野、墓域は杉谷Ａ遺跡・杉谷４号墳や六治古塚墳墓などの丘陵部というように分化することが多い。ただし、羽根丘陵の千坊山遺跡、さらには富崎赤坂遺跡など高所からも竪穴建物がみつかっており多様なあり方もある。これらは古墳時代に続く王塚・千坊山遺跡群の一つであり、勅使塚古墳など大型の古墳を造営するような勢力の存在を示しているのだろう。また、呉羽丘陵南部にも杉谷１番塚古墳や古沢塚山古墳などの古墳があり、この地域は弥生時代終末期から古墳時代前期にかけての遺跡が集中するのも特徴的である。古墳時代後期になると二本榎遺跡で県内では珍しい横穴式石室をもつ円墳がみつかっている（藤田 2012）。

古代では沖積平野の鍛冶町遺跡、呉羽丘陵の古沢遺跡、扇状地扇頂部の北押川Ｂ遺跡、羽根丘陵の各願寺前遺跡、射水丘陵の開ヶ丘中遺跡などで竪穴建物や掘立柱建物からなる集落が複数みつかっている。なお、北押川Ｂ遺跡や開ヶ丘中遺跡では製鉄炉や土師器焼成遺構など生産域もあり、居住域だけでなく多様な側面をもっている。さらにこれまで遺跡はないとみられていた扇央部に瓦陶兼業窯を２基もつ栃谷南遺跡がみつかり、当地域において８世紀以降に大きな開発が行われたことが想像される（鹿島編 2002）。また、境野新南Ⅲ遺跡や野下・新開遺跡など扇頂部や丘陵部にある遺跡の多くで焼壁土坑が検出されるのも当地域の特色である（島田 2016）。

中世になると沖積平野では友坂遺跡、丘陵部では千坊山遺跡などで堀を巡らす居館が出現する。とくに友坂遺跡は 12 世紀から 16 世紀と長期間遺跡が存続する拠点である（常深編 2020）。山田川と井田川の合流点に近く、交通の要所であり、丘陵の裾部から続く安定した平地であり、居館を築くにはこの上ない選地だったのだろう。




**第４図　周辺の遺跡**（１：25,000）

## 第６表　周辺の遺跡一覧

| | 立地 | 遺跡名 | 旧石器 | 縄文 | 弥生 | 古墳 | 古代 | 中世 | 近世 | 文献 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 井田川左岸沖積地 | 友坂遺跡 | | ○ | ○ | ○ | ● | ● | ○ | 狩野他 1984、岡本他 1993、片岡他 1997、細辻 2014、常深編 2020 |
| 2 | | **小長沢Ⅱ遺跡** | | ○ | ○ | ○ | ● | ● | ● | **本書** |
| 3 | | **小長沢鎌蓋遺跡** | | | ○ | | ● | ● | ● | **本書** |
| 4 | | **下邑遺跡** | | ○ | | | ● | ● | ● | **本書** |
| 5 | | 鍛冶町遺跡 | | | ● | ● | ● | ● | ○ | 細辻編 2003、細辻他 2007 |
| 6 | | 富崎遺跡 | | | ● | ○ | ○ | ● | ○ | 岡田編 2008、鍋谷編 2008 |
| 7 | | 南部Ⅰ遺跡 | | | ● | ● | ● | ● | ○ | 堀内 1998・2000、大野 2003、堀内編 2014 |
| 8 | 呉羽丘陵 | 古沢遺跡 | ○ | ● | | | ● | | | 藤田 1975、小島 1977、藤田編 1985 |
| 9 | | 古沢Ａ遺跡 | ○ | ● | ○ | ● | ○ | | | 藤田 1982、藤田他 1983 |
| 10 | | 古沢Ｂ遺跡 | | ● | | | | | | 藤田 1982、藤田他 1983 |
| 11 | | 古沢塚山古墳 | | | | ● | | | | 藤田 1976 |
| 12 | | 金屋陣の穴横穴墓群 | | | | ● | | | | 藤田 1976 |
| 13 | | 杉谷 64 番遺跡 | | ● | | | | | | 藤田 1973 |
| 14 | | 杉谷Ａ遺跡 | | | ● | ● | ○ | | | 藤田 1975 |
| 15 | | 杉谷Ｈ遺跡 | ○ | ○ | | | ● | | | 藤田 1975 |
| 16 | | 杉谷１番塚古墳 | | | ○ | ● | | | | 藤田 1974、高橋編 2020・2021 |
| 17 | | 杉谷４号墳 | | | ● | ○ | | | | 藤田 1974、高橋編 2014～2017・2019 |
| 18 | 境野新扇状地扇央部 | 栃谷南遺跡 | | ○ | | | ● | | ○ | 鹿島編 1999・2002 |
| 19 | 境野新扇状地扇頂部 | 境野新遺跡 | ○ | ○ | | ● | ○ | | ○ | 藤田編 1974、鹿島 2000 |
| 20 | | 向野池遺跡 | ● | ● | ● | | ● | ○ | ○ | 鹿島 2000、近藤 2000・2001、原田編 2002、折原編 2006 |
| 21 | | 境野新南Ⅲ遺跡 | | ○ | | | ● | | | 野垣 2017 |
| 22 | | 北押川・墓ノ段遺跡 | ○ | ● | | | ● | ○ | | 藤田 1973、古川 2013・2014 |
| 23 | | 北押川Ｂ遺跡 | ○ | ○ | | | ● | ○ | ○ | 新宅編 2008、日聖編 2009 |
| 24 | | 北押川Ｃ遺跡 | | ● | | | ● | | | 福山編 2003、吉田編 2008、日聖編 2009 |
| 25 | | 御坊山遺跡 | | ○ | | | ● | | ○ | 古川 2000・2002、吉田編 2008 |
| 26 | 羽根丘陵 | 野下・新開遺跡 | ○ | ○ | | | ● | | | 古川 1985、田上他 1985、島田 2016 |
| 27 | | 平岡遺跡 | ○ | ● | | | ● | | | 金三津編 2015 |
| 28 | | 二本榎遺跡 | | ○ | | ● | ○ | | | 藤田編 2012・2015 |
| 29 | | 小長沢Ⅰ遺跡 | | ○ | | | ○ | ● | | 堀内 1997 |
| 30 | | 新町Ⅱ遺跡 | | ○ | | | ● | ● | ○ | 田上他 1985、岸本編 1986 |
| 31 | | 各願寺前遺跡 | | ○ | | | ● | ● | ○ | 片岡編 1994、細辻編 2004 |
| 32 | | 勅使塚古墳 | | | | ● | | | | 中川 2003 |
| 33 | | 千坊山遺跡 | ○ | ○ | ● | | ○ | ● | ○ | 片岡 1995・1996・1998 |
| 34 | | 六治古塚墳墓 | | | ● | | ○ | ○ | ○ | 大野 2002 |
| 35 | | 鏡坂Ⅰ遺跡 | ○ | ● | | | ○ | ○ | | 有山他 2000 |
| 36 | | 外輪野Ⅰ遺跡 | ○ | ○ | | | ○ | ● | ○ | 片岡他 1997、有山他 2000 |
| 37 | | 富崎墳墓群 | | ○ | ● | | ○ | ○ | ○ | 大野 2002 |
| 38 | | 富崎赤坂遺跡 | | | ● | | | | | 大野 2002 |
| 39 | 射水丘陵 | 草山Ｂ遺跡 | ● | | | | ○ | | | 狩野他 1986 |
| 40 | | 椎土遺跡 | ○ | ○ | | | ● | | | 関他 1987、池野他 1988 |
| 41 | | 北野遺跡 | ○ | ● | | ● | ○ | | | 関他 1987 |
| 42 | | 上堤池遺跡 | | ● | | | ○ | ○ | ○ | 藤田 1973 |
| 43 | | 開ヶ丘中山Ⅲ遺跡 | | ● | | | ○ | | | 近藤他 2002、小黒他 2003 |
| 44 | | 開ヶ丘狐谷Ⅲ遺跡 | ○ | ● | | | ○ | | | 小黒他 2003、小野・坂野編 2003、近藤他 2003・2004、平岡編 2004 |
| 45 | | 開ヶ丘ヤシキダ遺跡 | | ○ | | | ● | | | 小黒他 2003 |
| 46 | | 開ヶ丘中遺跡 | ○ | ○ | | | ● | | | 近藤他 2003、近藤他 2002 |
| 47 | | 開ヶ丘中山Ⅳ遺跡 | ○ | ○ | | | ● | | | 近藤他 2001・2002、小野・坂野編 2003 |
| 48 | | 開ヶ丘狐谷遺跡 | | ○ | | | ● | | | 古川 1986、近藤他 2002 |

**周辺の遺跡　引用文献**


有山径世・小村正之 2000『外輪野Ⅰ遺跡・鏡坂Ⅰ遺跡　発掘調査報告』婦中町教育委員会
池野正男・宮田進一・原田義範 1988『椎土遺跡・塚越貝坪遺跡発掘調査概要』小杉町教育委員会
大野英子 2002『千坊山遺跡試掘調査報告書』婦中町教育委員会
大野英子 2003『南部Ⅰ遺跡発掘調査報告Ⅲ』婦中町教育委員会
岡田一広編 2008『富山市富崎遺跡発掘調査報告書　一般国道 472 号道路改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書（１）』富山市教育委員会
岡田一広編 2008『富山市富崎遺跡発掘調査報告書　一般国道 472 号道路改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書（２）』富山市教育委員会
岡本淳一郎・伊佐智法 1993『友坂遺跡発掘調査報告Ⅱ』婦中町教育委員会
小黒智久・原田幸子・山崎美和・近藤顕子 2003『富山市開ヶ丘中山Ⅲ遺跡・開ヶ丘狐谷Ⅲ遺跡・開ヶ丘ヤシキダ遺跡　発掘調査報告書』富山市教育委員会
小野真美・坂野晋鏡編 2003『富山市開ヶ丘狐谷Ⅲ遺跡・開ヶ丘中山Ⅰ遺跡・開ヶ丘中山Ⅳ遺跡・開ヶ丘狐谷Ⅳ遺跡　発掘調査報告書』富山市教育委員会
折原洋一編 2006『富山市向野池遺跡発掘調査報告書』富山市教育委員会
鹿島昌也編 1999『富山市内遺跡発掘調査概要Ⅲ　栃谷南遺跡』富山市教育委員会
鹿島昌也 2000『境野新遺跡・向野池遺跡』富山市教育委員会
鹿島昌也編 2002『富山市栃谷南遺跡発掘調査報告書Ⅱ』富山市教育委員会
鹿島昌也編 2002『富山市栃谷南遺跡発掘調査報告書Ⅲ』富山市教育委員会
片岡英子編 1994『各願寺前遺跡発掘調査報告』婦中町教育委員会
片岡英子 1995『千坊山遺跡（１）』婦中町教育委員会
片岡英子 1996『千坊山遺跡（２）』婦中町教育委員会
片岡英子・堀内大介 1997『外輪野Ⅰ遺跡発掘調査報告』婦中町教育委員会
片岡英子・堀内大介 1997『友坂遺跡発掘調査報告Ⅲ』婦中町教育委員会
片岡英子 1998『千坊山遺跡（３）』婦中町教育委員会
金三津道子編 2015『平岡遺跡発掘調査報告』公益財団法人富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所
狩野睦・橋本正春・松島吉信・田上浩幸 1984『友坂遺跡調査報告書』婦中町教育委員会
狩野睦・酒井重洋・宮田進一・松島吉信 1986『草山Ｂ遺跡　発掘調査概要』小杉町教育委員会
小島幸雄 1977『富山市古沢遺跡概要調査報告書』富山市教育委員会
近藤顕子 2000『富山市向野池遺跡』富山市教育委員会
近藤顕子 2001『富山市向野池遺跡発掘調査報告書』富山市教育委員会
近藤顕子・原田幸子 2001『富山市開ヶ丘中山Ⅳ遺跡　発掘調査報告書』富山市教育委員会
近藤顕子・土生朗治・福山俊彰・武部喜充 2002『富山市開ヶ丘中山Ⅰ遺跡・開ヶ丘中山Ⅳ遺跡・開ヶ丘中遺跡・開ヶ丘狐谷遺跡　発掘調査報告書』富山市教育委員会
近藤顕子・山崎美和・古川知明 2002『富山市開ヶ丘中山Ⅲ遺跡・開ヶ丘中山Ⅳ遺跡・開ヶ丘中山Ⅴ遺跡・開ヶ丘狐谷遺跡　発掘調査報告書』富山市教育委員会
近藤顕子・桐谷優・武部喜充・土生朗治・湯原勝美 2003『富山市開ヶ丘中遺跡・開ヶ丘狐谷Ⅲ遺跡　発掘調査報告書』富山市教育委員会
近藤顕子・野垣好史・山崎美和・福澤佳典 2004『富山市開ヶ丘狐谷Ⅲ遺跡・開ヶ丘狐谷Ⅱ遺跡　発掘調査報告書』富山市教育委員会
島田亮仁 2016『野下・新開遺跡発掘調査報告』公益財団法人富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所
新宅輝久編 2008『富山市北押川Ｂ遺跡発掘調査報告書』富山市教育委員会
関清・山本正敏・酒井重洋・島田修一・北川美佐子 1987『北野遺跡・椎土遺跡　緊急発掘調査概要』小杉町教育委員会
高橋浩二編 2014『杉谷４号墳－第１次発掘調査報告書－』富山大学人文学部考古学研究室
高橋浩二編 2015『杉谷４号墳－第２次発掘調査報告書－』富山大学人文学部考古学研究室
高橋浩二編 2015『杉谷４号墳－第３次発掘調査報告書－』富山大学人文学部考古学研究室
高橋浩二編 2016『杉谷４号墳－第４次発掘調査報告書－』富山大学人文学部考古学研究室
高橋浩二編 2017『杉谷４号墳－第５次発掘調査報告書－』富山大学人文学部考古学研究室
高橋浩二編 2019『杉谷４号墳－第６次発掘調査報告書－』富山大学人文学部考古学研究室
高橋浩二編 2020『杉谷１番塚古墳－第１次調査報告書－』富山大学人文学部考古学研究室
高橋浩二編 2021『杉谷１番塚古墳－第２次調査報告書－』富山大学人文学部考古学研究室
田上浩幸・宮田進一 1985『新開遺跡　新町Ⅱ遺跡　発掘調査概報』婦中町教育委員会
常深尚編 2020『富山市友坂遺跡発掘調査報告書』富山市教育委員会
中川道子 2003「勅使塚古墳」『勅使塚古墳・永代遺跡・安居窯跡群・中山中遺跡発掘調査報告』財団法人富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所
鍋谷仁美・堀内大介・鹿島昌也 2008『富山市遺跡発掘調査概要Ⅲ　若竹町遺跡・富崎遺跡』富山市教育委員会
野垣好史 2017『富山市内遺跡発掘調査概要ⅩⅧ　境野新南Ⅲ遺跡』富山市教育委員会
原田幸子編 2002『富山市向野池遺跡発掘調査報告書』富山市教育委員会
日聖祐輔 2009『富山市北押川Ｂ遺跡　北押川Ｃ遺跡　池多東遺跡発掘調査報告書』富山市教育委員会
平岡和夫編 2004『富山市開ヶ丘狐谷Ⅲ遺跡　発掘調査報告書』富山市教育委員会
福山俊彰 2003『富山市北押川Ｃ遺跡発掘調査報告書』富山市教育委員会
藤田慎一 2012『富山市二本榎遺跡確認調査報告書』富山市教育委員会
藤田富士夫 1973『高速自動車国道北陸自動車道関係埋蔵文化財予備調査報告書』富山県教育委員会・富山市教育委員会
藤田富士夫 1973『富山市杉谷（67・81・64 番）遺跡』富山市教育委員会
藤田富士夫 1973『富山市北押川遺跡』富山文化研究会
藤田富士夫 1973『北陸自動車道関係埋蔵文化財調査報告書　富山市上堤池遺跡』富山市教育委員会
藤田富士夫 1974『富山市杉谷地区埋蔵文化財予備調査報告書』富山市教育委員会
藤田富士夫編 1974『富山市境野新遺跡発掘調査報告書　古墳時代住居跡』富山文化研究会
藤田富士夫 1975『富山市杉谷（Ａ・Ｇ・Ｈ）遺跡発掘調査報告書』富山文化研究会
藤田富士夫 1975『一般地方道有沢～西二俣線関係　富山市古沢遺跡発掘調査報告書』富山市教育委員会
藤田富士夫 1976『富山市古沢・金屋地内古墳概要調査報告書』富山文化研究会
藤田富士夫 1982『富山市古沢・西金屋地内遺跡試掘調査概要』富山市教育委員会
藤田富士夫・高橋修宏・古川知明 1983『古沢Ａ遺跡発掘調査概要』富山市教育委員会
藤田富士夫編 1985『富山市古沢遺跡発掘調査概報』富山市教育委員会
古川知明 1985『富山市野下遺跡発掘調査概要』富山市教育委員会
古川知明 1986『開ヶ丘狐谷遺跡　発掘調査概要報告書』富山市教育委員会
古川知明 2000『富山市内遺跡発掘調査概要Ⅳ　御坊山遺跡』富山市教育委員会
古川知明 2002『富山市御坊山遺跡発掘調査報告書』富山市教育委員会
古川知明 2013『富山市内遺跡発掘調査概要Ⅸ　北押川・墓ノ段遺跡』富山市教育委員会
古川知明 2014『富山市内遺跡発掘調査概要ⅩⅢ』富山市教育委員会
細辻嘉門編 2003『鍛冶町遺跡発掘調査報告』婦中町教育委員会
細辻嘉門編 2004『各願寺前遺跡発掘調査報告Ⅱ』婦中町教育委員会
細辻嘉門・久保浩一郎 2007『富山市内遺跡発掘調査概要Ⅱ　水橋専光寺遺跡・宮町遺跡・鍛冶町遺跡』富山市教育委員会
細辻嘉門 2014「友坂遺跡」『富山市内遺跡発掘調査概要ⅩⅠ』富山市教育委員会
堀内大介 1997『小長沢Ⅰ遺跡発掘調査報告』婦中町教育委員会
堀内大介 1998『南部Ⅰ遺跡発掘調査報告』婦中町教育委員会
堀内大介 2000『南部Ⅰ遺跡発掘調査報告Ⅱ』婦中町教育委員会
堀内大介 2007『富山市開ヶ丘中遺跡発掘調査報告書　附編　開ヶ丘中山Ⅲ遺跡・御坊山遺跡の立会調査』富山市教育委員会
堀内大介編 2014『富山市内遺跡発掘調査概要Ⅹ　南部Ⅰ遺跡・願海寺城跡・今市遺跡・西二俣遺跡・花ノ木Ｃ遺跡・砂川カタダ遺跡・東老田Ⅰ遺跡』富山市教育委員会
吉田寿 2008『富山市北押川Ｃ遺跡　御坊山遺跡発掘調査報告書』富山市教育委員会

# 第Ⅲ章　下邑遺跡

## 1　概要　（第５図、図版１・２）

下邑遺跡は、富山市教育委員会によって平成 30（2018）年度から令和３（2021）年度まで行われたほ場整備事業に伴う試掘調査の結果、それまでの一つの広大な遺跡範囲から遺構・遺物がみつかった部分のみに縮小された。新たな遺跡範囲は、婦中町小長沢地内に４か所、婦中町下邑地内に１か所の計５か所からなる。遺跡の時期は、縄文時代、古代、中世、近世である。

令和４（2022）年度の調査地は、５か所に分割された遺跡範囲のなかで一番北西（小長沢字鎌蓋）にあたる。その中央で、南西から北東に走るＭ－５号排水路部分にあたる。調査区は排水路部分のため、幅約 3.2m、長さ約 46m、面積 158㎡と細長くなっている。遺跡の現況は水田で、転作でムギを植栽している。標高は19mである。検出した遺構は、自然流路と溝。出土遺物は土師器11、須恵器７、中世土師器１、珠洲３、越中瀬戸３、肥前系陶磁器１の計26点（551.84ｇ）と木製品１点である。

## 2　層序　（第８図）

基本層序はⅠ層とⅡ層の大きく２層に分けられる。Ⅰ層は表土で、黒褐色～にぶい黄褐色シルト質粘土である。遺物包含層は確認されず、Ⅱ層は灰色粘土で地山となる。遺構検出はⅡ層直上で実施し、自然流路（ＮＲ１）と溝（ＳＤ２）を確認した。小長沢Ⅱ遺跡と同様に、調査区の壁面や検出面からは水が湧き出るような低湿地環境である。

## 3　遺構　（第６～９図、図版３・４、第７表）

検出した遺構は、自然流路（ＮＲ１）と溝（ＳＤ２）のそれぞれ一つずつである。

### （1）自然流路

**1号自然流路**（ＮＲ１、第５・７～９図、図版３・４）

調査区の南側で検出した。北側（左岸）の肩部は確認したが、南側（右岸）は調査区外となるため、自然流路の幅は不明である。深さは検出面（Ⅲ層）から約 0.5mで、南側へ緩やかに傾斜している。周辺地形から羽根丘陵に沿うように流れていたと考えられる。埋土は上位に暗オリーブ灰色礫砂が堆積し、下位はシルト質粘土に未分解の植物遺体が含まれる。遺物はピート層からの出土は確認されなかったが、砂礫～礫砂層からは摩耗した須恵器や珠洲が出土している。自然流路の埋没時期は上位の砂礫～礫砂で少なくとも中世以降と考えられ、古代から中世には流れていたのだろう。

埋土の２層と３層から須恵器、珠洲が出土している。特に２層の下位と５層の上位から出土している。５層の砂礫は、調査後重機で下層確認に深掘りし、底辺を確認している。堆積物や層位などから、比較的大きな自然流路で、時代によって流路が移動したり、堆積と浸食を繰り返している可能性がある。調査区外は更に深いと思われる。なお、５層の底辺は地山の灰色粘土であったので、５層より深くなることはない。南側の７層はピート層と砂層の互層であり、流路の埋土の可能性があるものの、

重機で田面から約1.5mの深度で崩落の危険があったため、それ以上は安全上、掘削は不可能であり、地山は確認できなかった。

出土遺物には古代の土師器11、古代の須恵器６、中世土師器１、珠洲３点がある。１は土師器の杯。摩滅が激しく、調整はわからない。２～６は須恵器。２は壺の胴部か。外面に自然釉がかかる。３・４は甕の胴部とみられ、外面に平行タタキ、内面に同心円状の当て具痕が残る。４の外面のタタキはナナメの後ヨコ。５・６は坏の口縁部。５は口縁端部を欠損し、復元している。６は摩滅が激しい。７は中世土師器皿。摩滅が激しく、調整はわからない。８～10は珠洲。いずれも甕とみられ、外面にタタキ、内面に当て具痕が残る。９は一辺を意図的に打ち欠いたような剥離がみえる。10は口縁部を欠くが、復元すると口径52cmになる。吉岡編年でⅣ期か。以上のように遺物の時期は、古代から中世まであるものの、いずれも小破片で摩滅が激しいものが多く、原位置を保っていない可能性が高い。

### （２）溝

**２号溝**（ＳＤ２、第５・６・８・９図、図版３・４）

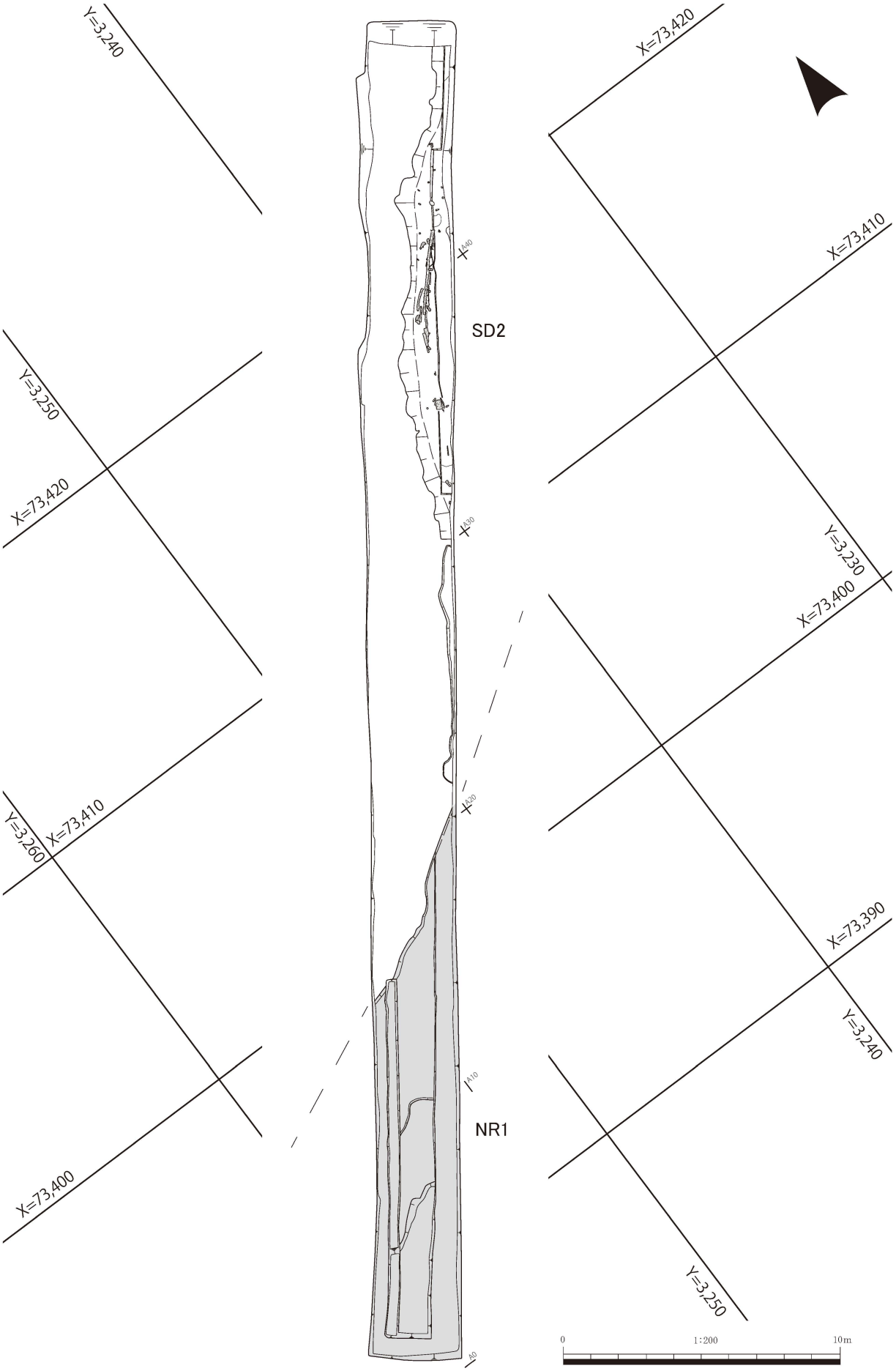
昭和31（1956）～34（1959）年の土地改良事業区画整理前の水路と思われる。丸木の杭や壁面保護の板材や木材（未加工）などが出土している。現代の遺物は出土していないが、杭の先端の加工は近・現代風であった。狭小な調査区のため、安全上の理由から完掘はしておらず、断面で深さを確認し、その後は全体を10～20cm程度掘削して、範囲を明確にして調査終了とした。近代以降の所産か。出土遺物には須恵器１、越中瀬戸１、肥前系陶磁器１がある。11は須恵器の杯蓋。生焼けで外面は褐色を呈する。12は越中瀬戸で火入れか。内外面錆釉。13は肥前系陶磁器で伊万里の猪口か。外面に染付がある。

## ４　遺物　（第９図、図版４、第８・９表）

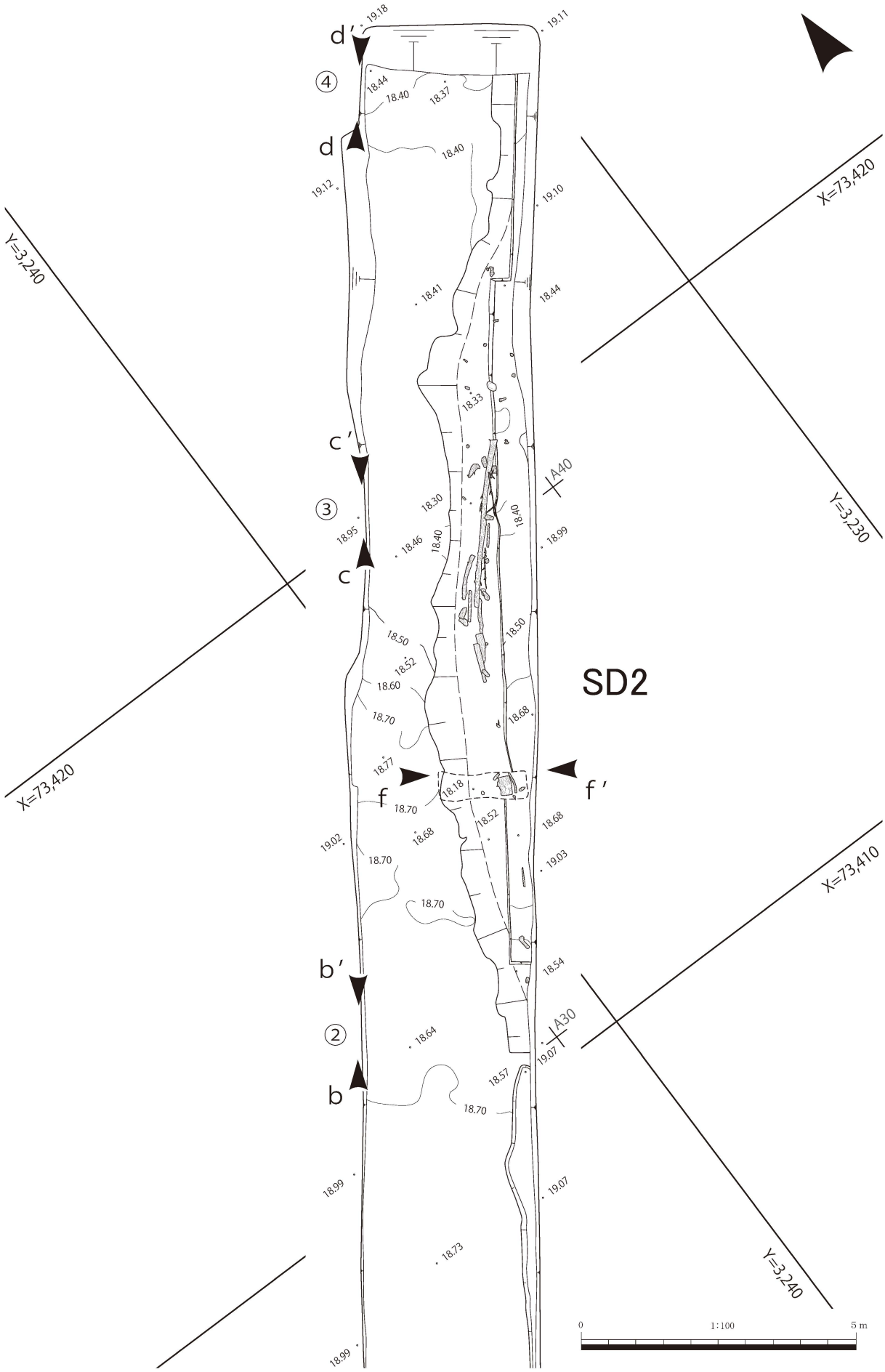
遺構外からは、越中瀬戸２点と木製品１点が出土している。14・15は越中瀬戸。14は火入れ。口縁部を欠損し、復元した。内外面に鉄釉をかける。15は皿の底部。見込みを除き鉄釉がかかる。底面を欠損。16は木製品で曲物の側板とみられる。上下に分割しているが、縦方向にケビキとみられる４本の沈線が入る。

## ５　小括

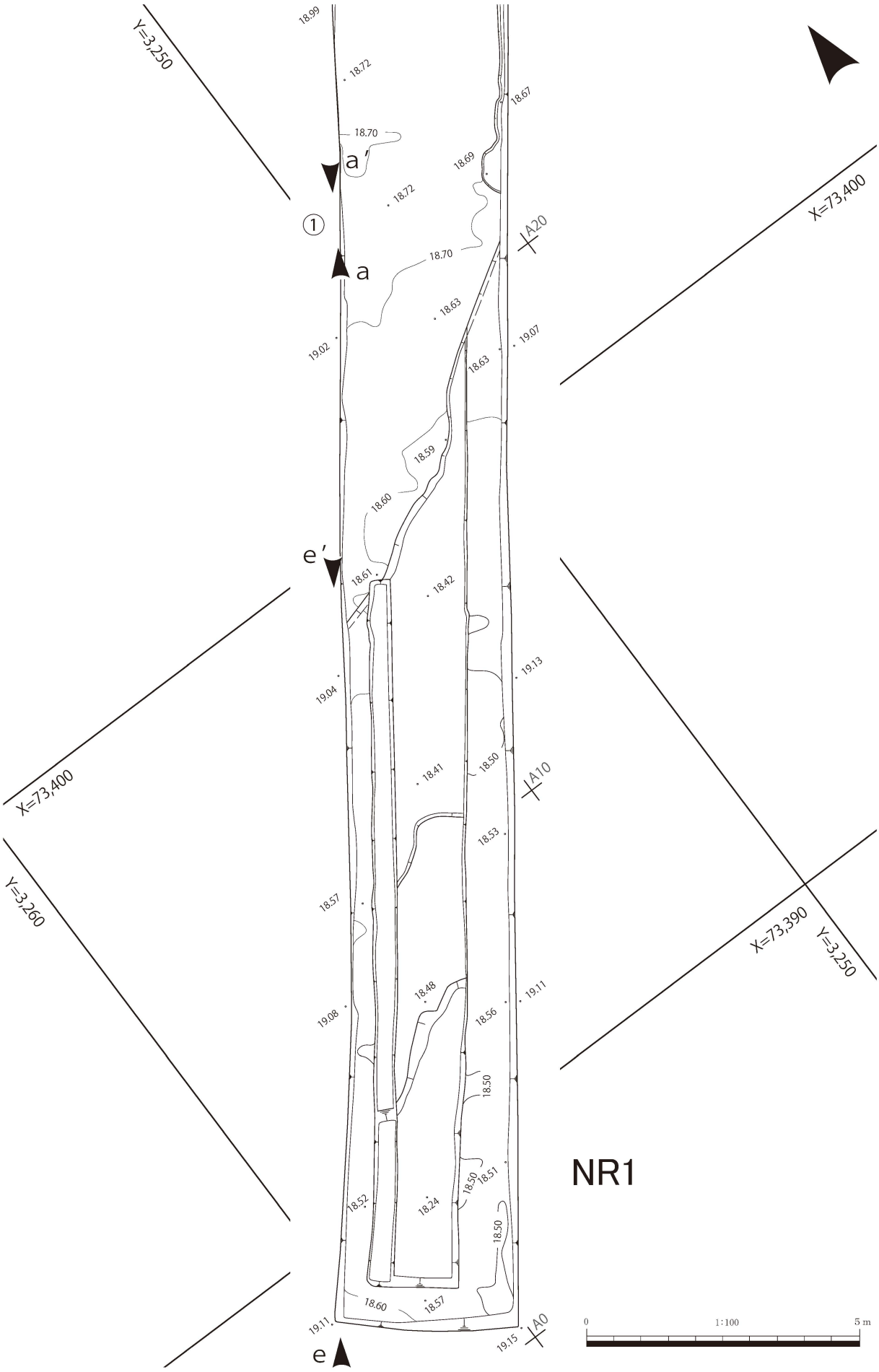
遺構は古代以降の自然流路と近代以降の溝のみで、出土遺物は摩耗が激しく、良好なものはない。小長沢Ⅱ遺跡（第Ⅳ章６）と小長沢鎌蓋遺跡（第Ⅴ章６）の自然科学分析の結果とあわせると湿地環境が想定され、ＮＲ１は山田川の支流であった可能性が高い。ＳＤ２は水田に伴う水路であったのであろう。今回の調査結果と遺跡範囲が５か所に分割されていることなどから、南方にある山田川によって形成された扇状地で、流路を変えて島状に残った部分に遺跡が残存していることを示すのだろう。




**第５図　下邑遺跡　遺構全体図**（１：200）

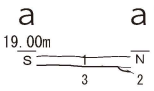



第６図　下邑遺跡　遺構平面図１（１：100）



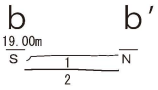

**第７図　下邑遺跡　遺構平面図２**（１：100）

## 基本層序①



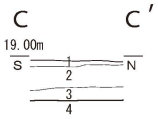

1．10YR2/3 黒褐色シルト質粘土　中～粗砂混じる
　ブロック状に地山粘土が混じる　……Ⅰ層：盛土
2．1 層に 3 層が混じる　……Ⅰ層：盛土
3．7.5Y4/1 灰色粘土　粘性あり　しまりややなし
　……Ⅱ層：遺構検出面、地山

## 基本層序②



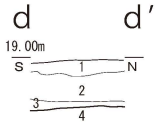

1．10YR2/3 黒褐色シルト質粘土中～粗砂混じる
　ブロック状に地山粘土が混じる　……Ⅰ層：盛土
2．7.5Y4/1 灰色粘土　粘性あり　しまりややなし
　……Ⅱ層：遺構検出面、地山

## 基本層序③



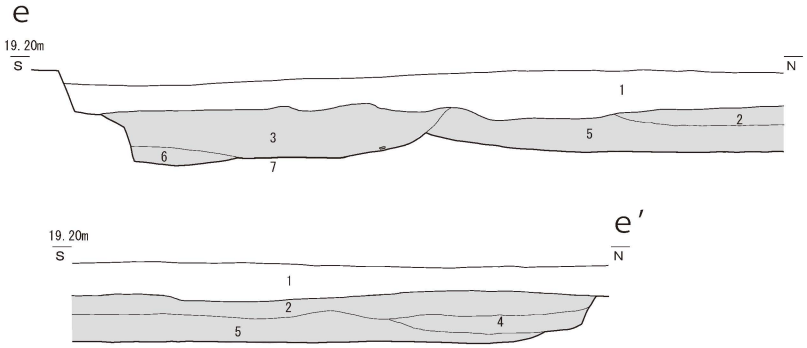

1．10YR3/2 黒褐色シルト質粘土　細～中砂混じる
　しまりあり　粘性ややあり　……Ⅰ層：盛土
2．10YR5/3 にぶい黄褐色シルト質細～中砂
　径 300 ～ 500 ㎜のマーブル状に 1 層が入る　……Ⅰ層：盛土
3．2.5Y4/1 黄灰色シルト質粘土　細～中砂混じる
　Ⅱ層ブロック径 5 ～ 10 ㎜　1 ～ 2%混じる
　しまりなし　粘性普通　……一段下がった落込状の堆積物：近代か
4．7.5Y4/1 灰色粘土　粘性あり　しまりややなし
　……Ⅱ層：遺構検出面、地山

## 基本層序④



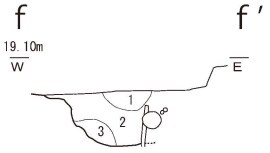

1．10YR3/2 黒褐色シルト質粘土　細～中砂混じる　しまりあ
　粘性ややあり　……Ⅰ層：盛土
2．10YR5/3 にぶい黄褐色シルト質細～中砂　径 300 ～ 500 ㎜
　マーブル状に 1 層が入る　……Ⅰ層：盛土
3．2.5Y4/1 黄灰色シルト質粘土　細～中砂混じる
　Ⅱ層ブロック径 5 ～ 10 ㎜　1 ～ 2%混じる　しまりなし
　粘性普通　……落込状の堆積物：近代か
4．7.5Y4/1 灰色粘土　粘性あり　しまりややなし
　……Ⅱ層：遺構検出面、地山

## ＮＲ１



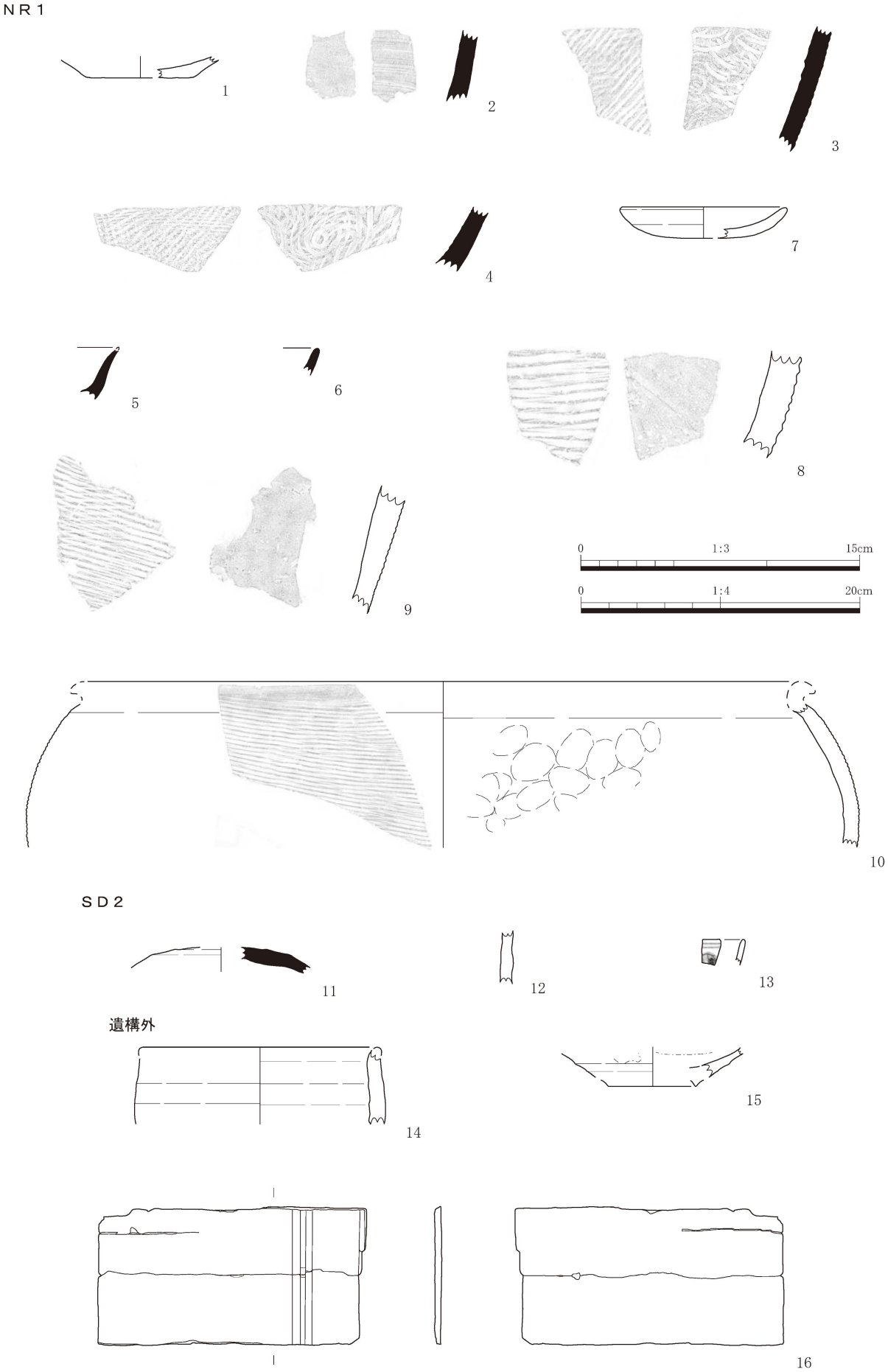

1．10YR2/3 黒褐色シルト質粘土　中～粗砂混じる　ブロック状にⅡ層粘土が混じる　……Ⅰ層：盛土
2．7.5Y4/1 灰色　細～中砂　径 2 ～ 5 ㎜の円礫混じる（5 層由来か）地山ブロック混じる　しまりあり　粘性ややなし　……ＮＲ１埋土
3．5Y2/1 黒色シルト質粘土　砂礫混じる　やや有機質　木質やや多い　しまりなし　粘性あり　……ＮＲ１埋土
4．2.5GY4/1 暗オリーブ灰色砂礫　砂は極粗～粗砂　礫は径 2 ～ 5 ㎜　淘汰良好　やや 2 層が上位ほど入る　……ＮＲ１埋土
5．2.5GY4/1 暗オリーブ灰色礫砂　礫は径 2 ～ 10 ㎜が中心　径 30 ～ 50 ㎜の円礫混じる　砂は極粗～粗砂　淘汰良好　……ＮＲ１埋土
6．4 層に似るがやや粘性あり　……ＮＲ１埋土
7．2.5Y3/2 黒褐色シルト質粘土　有機質層（やや未分解）と細～中砂質シルトとの互層　……ＮＲ１埋土

## ＳＤ２




1．10YR5/3 にぶい黄褐色シルト質細～中砂　径 300 ～ 500 ㎜のマーブル状に 1 層が入る　……Ⅰ層：盛土
2．2.5Y4/1 黄灰色シルト質粘土　細～中砂混じる　Ⅱ層ブロック径 5 ～ 10 ㎜　1 ～ 2%混じる
　しまりなし　粘性普通　……ＳＤ２埋土
3．2 層とⅡ層（7.5Y4/1 灰色粘土）が混じる　……ＳＤ２埋土

**第８図　下邑遺跡　基本層序・遺構断面図**（１：40）
基本層序　ＮＲ１　ＳＤ２




**第９図　下邑遺跡　遺物実測図**（１～９・11～16　１：３、10　１：４）
ＮＲ１（１～10）　ＳＤ２（11～13）　遺構外（14～16）

## 第７表　下邑遺跡　遺構一覧

| 遺構番号 | 種類 | 規模（cm） | | | 時期 | 遺物 | 備考 | 挿図 | 写真 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | 長さ | 幅 | 深さ | | | | | |
| ＮＲ１ | 自然流路 | (1776) | (1280) | (75) | 古墳時代～中世 | 土師器、須恵器、中世土師器、珠洲 | | 5、7～9 | 3、４ |
| ＳＤ２ | 溝 | (566) | (170) | (60) | 近代？ | 須恵器、越中瀬戸、肥前系陶磁器 | | 5、6、8 | |

## 第８表　下邑遺跡　土器・陶磁器一覧

| 挿図 | 遺物番号 | 写真 | 出土地点 | | | 種類 | 器種 | | 法量（cm） | | | | 重さ（g） | 時期 | | 調整 | | 色調 | | 胎土 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | グリッド | 遺構 | 層位 | | | | 口径 | 器高 | 底径 | 厚さ | | | | 外面 | 内面 | 外面 | 内面 | | |
| 9 | 1 | 4 | A10 | ＮＲ１ | | 土師器 | 坏 | 底部 | - | (1.1) | 6.0 | 0.5 | 7.19 | 古代 | 9～10ｃ | ロクロナデ、底部回転糸切り→摩耗 | ナデ→摩耗 | 7.5YR8/3 浅黄橙色 | | 白色粒、石英 | |
| | 2 | | Ａ５～10 | | | 須恵器 | 壺 | 胴部 | - | (3.8) | - | 0.9 | 15.59 | | | ロクロナデ | ナデ | N7/0灰白色 | | 赤色粒 | |
| | 3 | | | | | | 甕 | | - | (6.7) | - | 0.9 | 35.78 | | | 平行タタキ→摩耗 | 同心円状当て具痕→摩耗 | 2.5GY6/1 オリーブ灰色 | | 長石、黒色粒 | |
| | 4 | | Ａ０～２ | | | | | | - | (3.5) | - | 1.0 | 39.08 | | | 平行タタキ | 同心円状当て具痕 | N6/0灰色 | N7/0灰白色 | 白色粒 | |
| | 5 | | | | | | 杯 | 口縁部 | - | (2.7) | - | 0.6 | 4.92 | | ８ｃ | ロクロナデ | | N7/0灰白色 | N6/0灰色 | 白色粒 | |
| | 6 | | | | | | | | - | (1.5) | - | 0.4 | 1.73 | | | ヨコナデ | | 10YR8/1 灰白色 | | 石英 | |
| | 7 | | | | | 中世土師器 | 皿 | 口～底部 | 9.0 | 1.7 | 4.6 | 0.5 | 11.47 | 中世 | | ヨコナデ、指頭圧痕→摩耗 | ヨコナデ→摩耗 | 5YR7/3 にぶい橙色 | | 石英、長石、輝石 | |
| | 8 | | Ａ０～２ | | | 珠洲 | 甕 | 胴部 | - | (5.4) | - | 1.8 | 75.68 | | | 平行タタキ | 当て具痕 | N6/0灰色 | | 砂粒 | |
| | 9 | | | | | | | | - | (6.9) | - | 1.3 | 74.98 | | | 平行タタキ→摩耗 | 当て具痕→摩耗 | 2.5Y7/1 灰白色 | N6/0灰色 | 白色粒、黒色粒、海綿骨針 | |
| | 10 | | Ａ３ | | | | | 口縁部 | (51.8) | (10.2) | - | 1.1 | 206.35 | | 珠洲Ⅳ期 | 平行タタキ | 当て具痕 | N5/0灰色 | | 白色粒、海綿骨針 | |
| | 11 | | A43 | ＳＤ２ | | 須恵器 | 杯 | 蓋 | - | (1.3) | - | 0.8 | 11.81 | 古墳 | | 回転ヘラケズリ、ロクロナデ | ロクロナデ | 10YR6/2 灰黄褐色 | N6/0灰色 | 黒色粒 | |
| | 12 | | | | | 越中瀬戸 | 火入れ | 胴部 | - | (2.9) | - | 0.7 | 6.92 | 近世 | | ロクロナデ→錆釉 | | 5YR5/1 灰白色 | | 砂粒 | |
| | 13 | | A26 | | | 伊万里 | 猪口 | 口縁部 | - | (1.4) | - | 0.4 | 0.66 | | | 染付（草花文？）→透明釉 | 透明釉 | 5B3/1 暗青灰色 | N8/0灰白色 | | |
| | 14 | | A0～10 | 遺構外 | | 越中瀬戸 | 火入れ | | 12.6 | (4.0) | - | 0.8 | 14.90 | | | ロクロナデ→鉄釉 | | 7.5YR4/3 褐色 | | | |
| | 15 | | | | | | 皿 | 底部 | - | (1.6) | - | 0.5 | 4.53 | | | ロクロナデ→鉄釉、一部露胎 | | 7.5YR4/3 褐色 | | | |

## 第９表　下邑遺跡　木製品一覧

| 遺物番号 | 出土地点 | | | 種類 | 器種 | | 法量（cm） | | | 時期 | | 備考 | 挿図 | 写真 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 報告書 | グリッド | 遺構 | 層位 | | | | 長さ | 幅 | 厚さ | | | | | |
| 16 | Ａ０～５ | | | 木製品 | 曲物 | 側板 | 14.5 | 7.5 | 0.3 | 中世 | | ケビキ線４条 | 9 | 5 |

# 第Ⅳ章　小長沢Ⅱ遺跡

## 1　概要　（第 10 図、図版１・６）

小長沢Ⅱ遺跡は、富山市教育委員会によって令和元（2019）年度から令和３（2021）年度まで行われたほ場整備事業に伴う試掘調査の結果、それまでの一つの広大な遺跡範囲から遺構・遺物がみつかった部分を遺跡範囲とし、さらに南西側を小長沢鎌蓋遺跡として分割している。遺跡の時期は、縄文時代、古代、中世、近世である。

令和４（2022）年度調査は新たな遺跡範囲の北東部で、北東－南西方向のＭ－３号排水路建設部分にあたり、小長沢字狭間。排水路部分の調査のため、幅約 3.6m、長さ約 83mとトレンチ状の細長い調査区である。調査面積は 281㎡。標高は約 18～19mで、調査前の現況は農道である。調査区の隣接地は水田であり、壁面や検出面、暗渠からは水が湧き出るような低湿地環境である。試掘調査では検出面の多くが、現耕作土もしくは客土直下である。出土遺物には縄文土器１、弥生土器２、土師器51、珠洲１、青磁１、白磁１、肥前系陶磁器１の計 58 点（791.23ｇ）と木製品４点がある。

## 2　層序　（第 16 図）

基本層序はⅠ層からⅢ層の大きく３層に分けられる。Ⅰ層は灰黄褐色粘土質砂で、盛土もしくは客土である。Ⅱ層は粘性の高い黒褐色粘土質砂で、遺物包含層とみられる層である。遺構の埋土の多くもⅡ層に近似した堆積物である。Ⅲ層は灰色粘土で地山であり、粘性が著しく高い。

## 3　遺構　（第 10～16 図、図版７～９、第 10 表）

遺構検出は地山であるⅢ層の直上で実施し、溝７、落ち込み６、小穴を確認した。遺構は主に西側に展開しており、東側はほとんど確認されなかった。明確な溝は７条あり、調査区を南西－北東方向に走るものが多い。

### （1）溝

**２号溝**（ＳＤ２、第 10・11・16・18 図、図版７・12）

底辺には溝状の幅の狭い（0.8m前後）落ち込みが３条併走している。特に真ん中と南東端の２条は明瞭である。作り替えや、掘り直しを想定したが、切り合いや明確な埋土の違いは確認されなかった。全般に埋土が砂主体なので、一定の流水があったと推定される。埋土４層から曲物底板（28）が出土している。28 は曲物底板で半分を欠損する。この他に図化していないが土師器４点（23.78ｇ）が出土している。出土遺物から古代以降の溝と考えられる。

**３号溝**（ＳＤ３、第 10・11・16 図、図版８）

ＳＤ２の東隣に走る浅い溝。出土遺物はない。所属時期は不明。

**４号溝**（ＳＤ４、第 10・11・16・17 図、図版８・10）

ＳＤ５の西隣に並走する、比較的深みのある溝。出土遺物には弥生土器１、土師器７の計８点（40.01ｇ）がある。遺構の時期は不明である。17 は弥生土器壺の底部。摩滅が激しく、調整はわからないが、黒斑が残る。

**５号溝**（ＳＤ５、第 10・12・16 図、図版８）

ＳＤ４の東隣に並走する溝。ＳＤ４と比較して浅い。出土遺物はない。遺構の時期は不明である。

**６号溝**（ＳＤ６、第 10・12・15～18 図、図版８～12）

ＳＤ５の東隣に位置する溝。ＳＤ４やＳＤ５と比較して規模が大きい溝。埋土５・６層は有機物を含む黒色粘土が主体であるが、３層は砂が主体で、流水があった可能性が高い。植物遺体が含まれており、断面にはオーバーハングしていることが確認される。なお、遺物の時期が複数あることから埋土土壌のＡＭＳ年代測定と花粉分析を行った。結果、古代からの堆積とみられる。

出土遺物には土師器８、肥前系陶磁器１の計９点（103.88ｇ）と木製品２点がある。肥前系で唐津の擂鉢（19）は埋土上位から出土しており、混入の可能性がある。18 は土師器の甕。古墳時代のくの字状口縁か。内外面ハケメ調整。19 は唐津の擂鉢。口縁部のみで鉄釉がかかる。復元すると口径 28 ㎝となる。29・30 は木製品。29 は曲物底板で完形。側板をとめるための木釘穴が６か所あり、５か所で木釘が出っ張って残る。30 は断面長方形の棒状。上部に抉りのような切込みがある。上下端を欠損。

**７号溝**（ＳＤ７、第 10・12・16・17 図、図版９・10）

ＳＤ５の東隣に位置する溝。ＳＸ11 を切る。掘方は比較的明瞭であるが、埋土は砂が主体で、10～20㎝の礫が全体に混じり込む。出土遺物には青磁１点（3.66ｇ）がある。遺構の時期は埋土が他のＳＤ２やＳＤ６とは明らかに異なることからより新しい（近世以降？）と考えられる。20 は中国製青磁の皿。口縁部のみ。同安窯系とみられ、12 世紀か。

**８号溝**（ＳＤ８、第 10・12・16 図、図版９）

溝としたが、ＳＸ11 と同一で、新しい可能性（近現代）もある。出土遺物には、図示していないが土師器８点（22.58ｇ）がある。

## （２）落ち込み

**１号落ち込み**（ＳＸ１、第 10・11 図、図版７）

いわゆる漸移層的な埋土（オリーブ黒色砂）。遺物はなく、ヨシやアシなどの単子葉類の茎などが混じる。遺物は出土していない。

**９号落ち込み**（ＳＸ９、第 10・11・17 図、図版９・10）

著しく浅い。埋土は一様ではなく、Ⅱ層がマーブル状に入る。出土遺物には弥生土器１点（21.54ｇ）がある。21 は弥生土器。摩滅が激しいが、外面タテハケ、内面ヨコハケ。

**10号落ち込み**（ＳＸ10、第 10～12 図）

著しく浅い。埋土は一様ではなく、Ⅱ層がマーブル状に入る。出土遺物には、図示していないが土師器１点（5.19ｇ）がある。

**11号落ち込み**（ＳＸ11、第 10・12・15・17・18 図、図版 10・12）

著しく浅い。他のＳＸ10 やＳＸ12 と比較して、埋土が異なる。砂粒を含むことから、比較的新しいと思われる。Ⅱ層がマーブル状に入る。出土遺物には土師器５点（72.93ｇ）と木製品１点がある。22 は土師器椀。摩滅が激しいが、底面回転糸切りののち高台を貼り付ける。内面は渦巻き状のロクロナデ。31 は木製品。断面不整円形で、上下を欠損。中央を下方から抉りこむ。欠損部にも同様な抉り込みを連続でしていた可能性もある。

**12号落ち込み**（ＳＸ12、第 10・13 図）

著しく浅い。埋土は一様ではなく、Ⅱ層がマーブル状に入る。平面図ではＳＸ13 に切られているが、ほとんど違いはない。出土遺物には、図示していないが土師器片３点（22.07ｇ）がある。

**13号落ち込み**（ＳＸ13、第 10・13 図、図版９）

著しく浅い。埋土は一様ではなく、Ⅱ層がマーブル状に入る。平面図ではＳＸ12 を切っているが、ほとんど違いはない。出土遺物には、図示していないが土師器５点（100.14ｇ）がある。

### （３）小穴

**小穴群**（第 12 図）

小型で埋土にしまりのない穴。遺構番号はつけていない。深さは 10㎝程度で不整形。ＳＤ４～ＳＤ５の間にまとまってみられる。柱穴の可能性もあるが、規則性はない。ＳＤ４とＳＤ５の時期から古代以降か。遺物は出土していない。

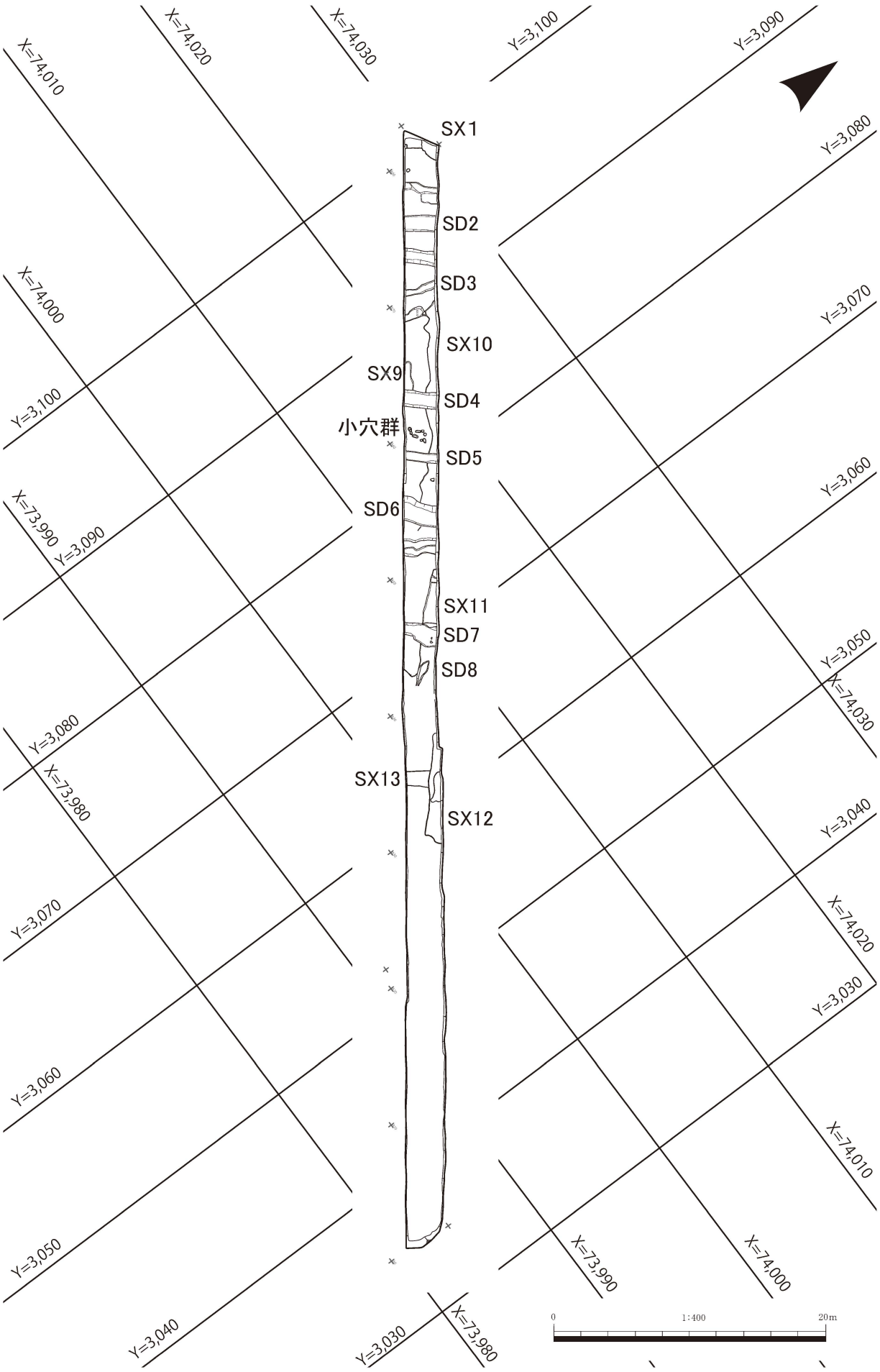
## ４　遺物　（第 17 図、図版 10～12、第 11・12 表）

遺構外からは縄文土器１、土師器 15、珠洲１、白磁１の計 18 点（322.92ｇ）が出土している。23 は縄文土器の口縁部。摩滅が激しく、斜行縄文とみられるが詳細は不明。24・25 は古墳時代の土師器。24 は土師器甕の口縁部。摩滅が激しく、調整不明瞭。くの字状口縁か。25 は高杯もしくは器台の脚部。外面タテハケか。26 は白磁碗。口縁部を欠損。復元すると玉縁状の口縁部をもつ太宰府分類のⅣ類か。27 は珠洲の擂鉢。内面に 10 本程度を１単位とする卸目が入る。外面はヨコナデで指紋が残る。底面は糸切痕が残る。

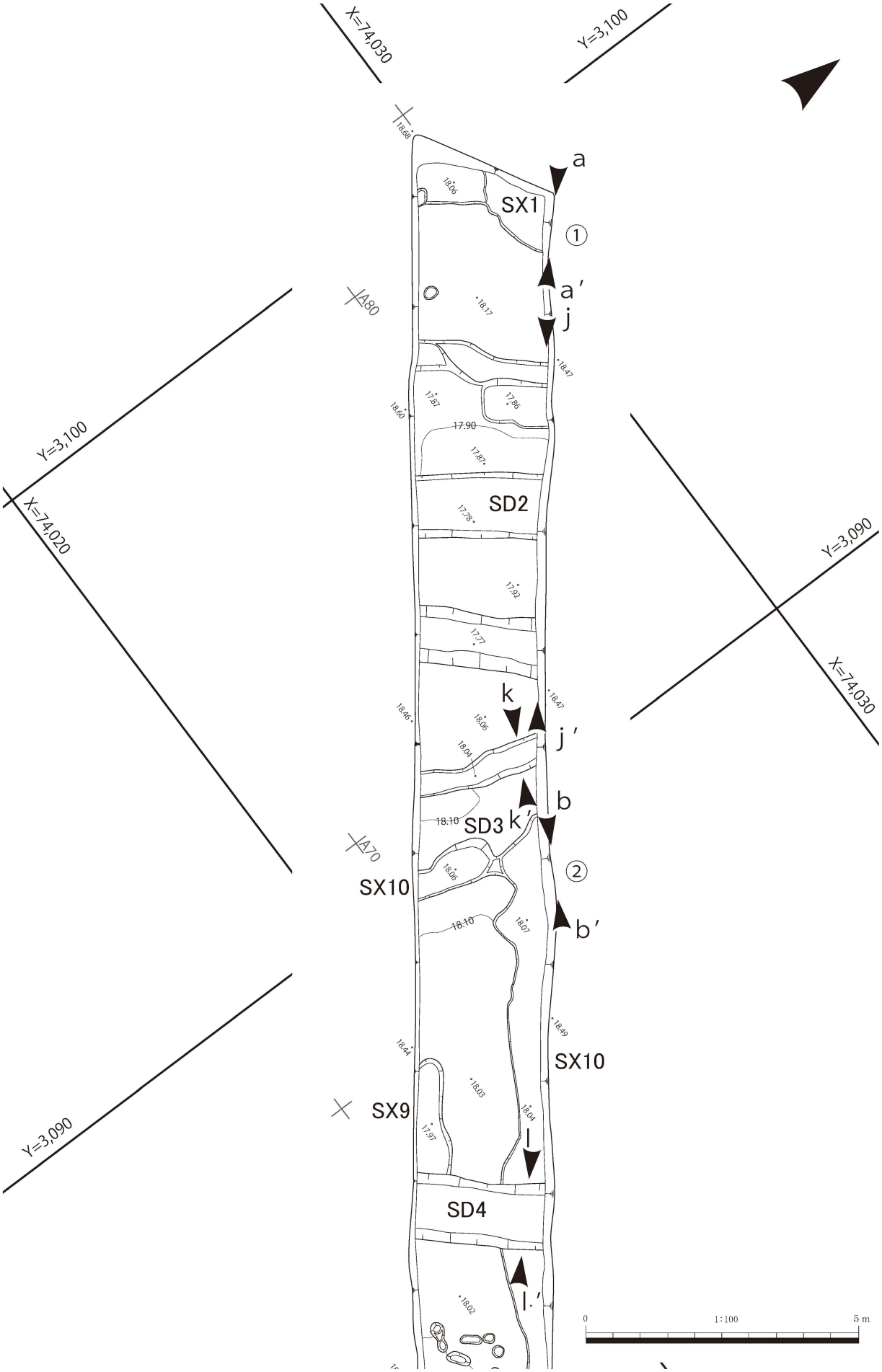
## ５　小括

調査区全体で遺構がみつかった。遺構の多くは南西－北東方向の溝で建物などの居住痕跡が見られず、出土遺物も少ないことから集落域からは離れているか、その端にあたると考えられる。ＳＤ６の埋土土壌花粉分析からは湿地性堆積が想定され、ＳＸ１の植物が混じる埋土と合致する。また、ＳＤ６の埋土ＡＭＳ測定からは弥生時代後期から古墳時代前期の年代値が得られた。しかし、小長沢鎌蓋遺跡の花粉分析結果とあわせて考えると、その年代は古代である可能性が高い。つまり、今回の調査区においては古代までは湿地堆積で、中世以降は水田がつくられ、ＳＤ７などはそれに関わる水路と考えられる。このように山田川による氾濫原で島状に残った一部で集落が作られ、今回の調査区はその端にあたると考えられる。

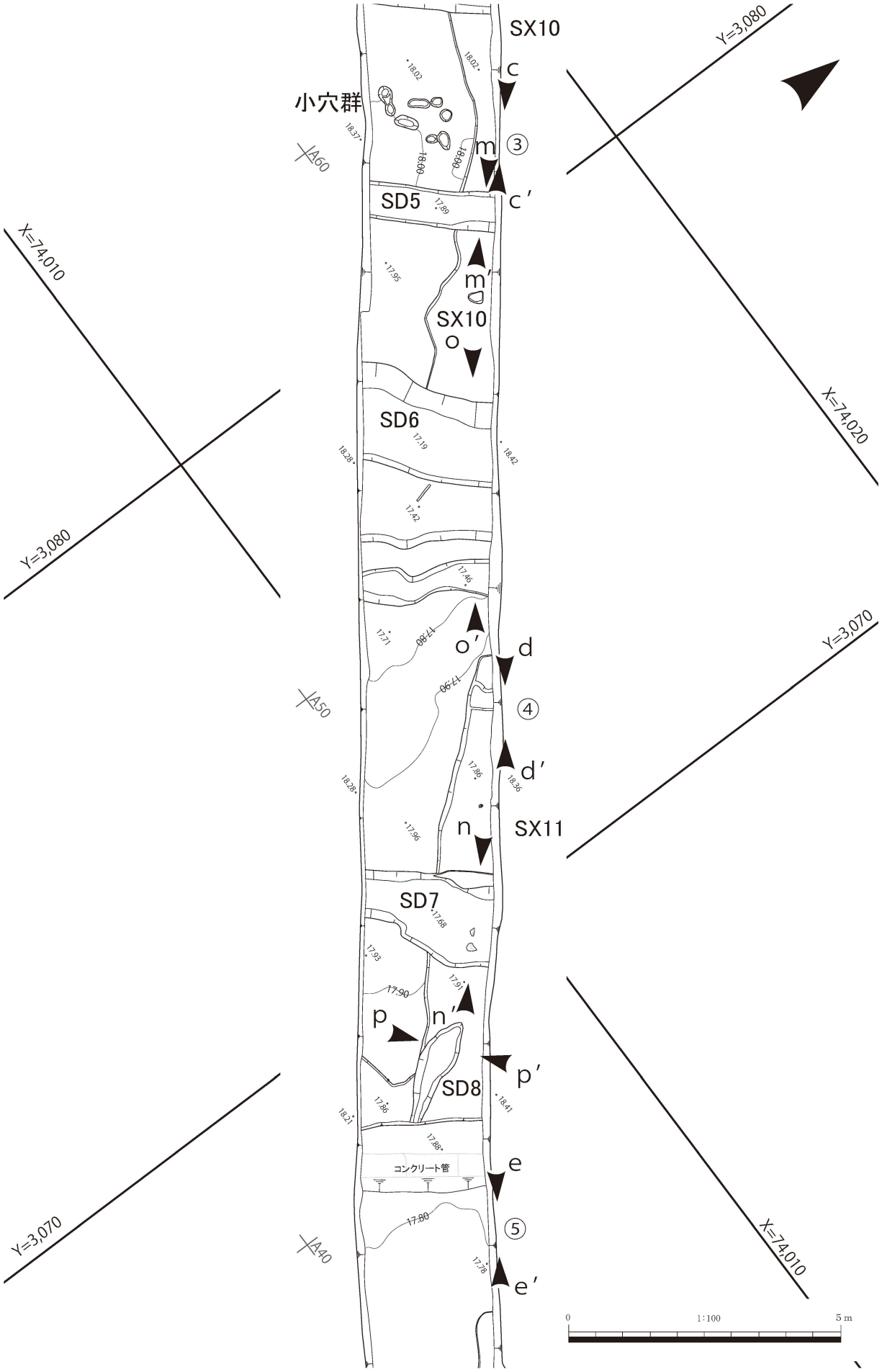
（町田賢一）



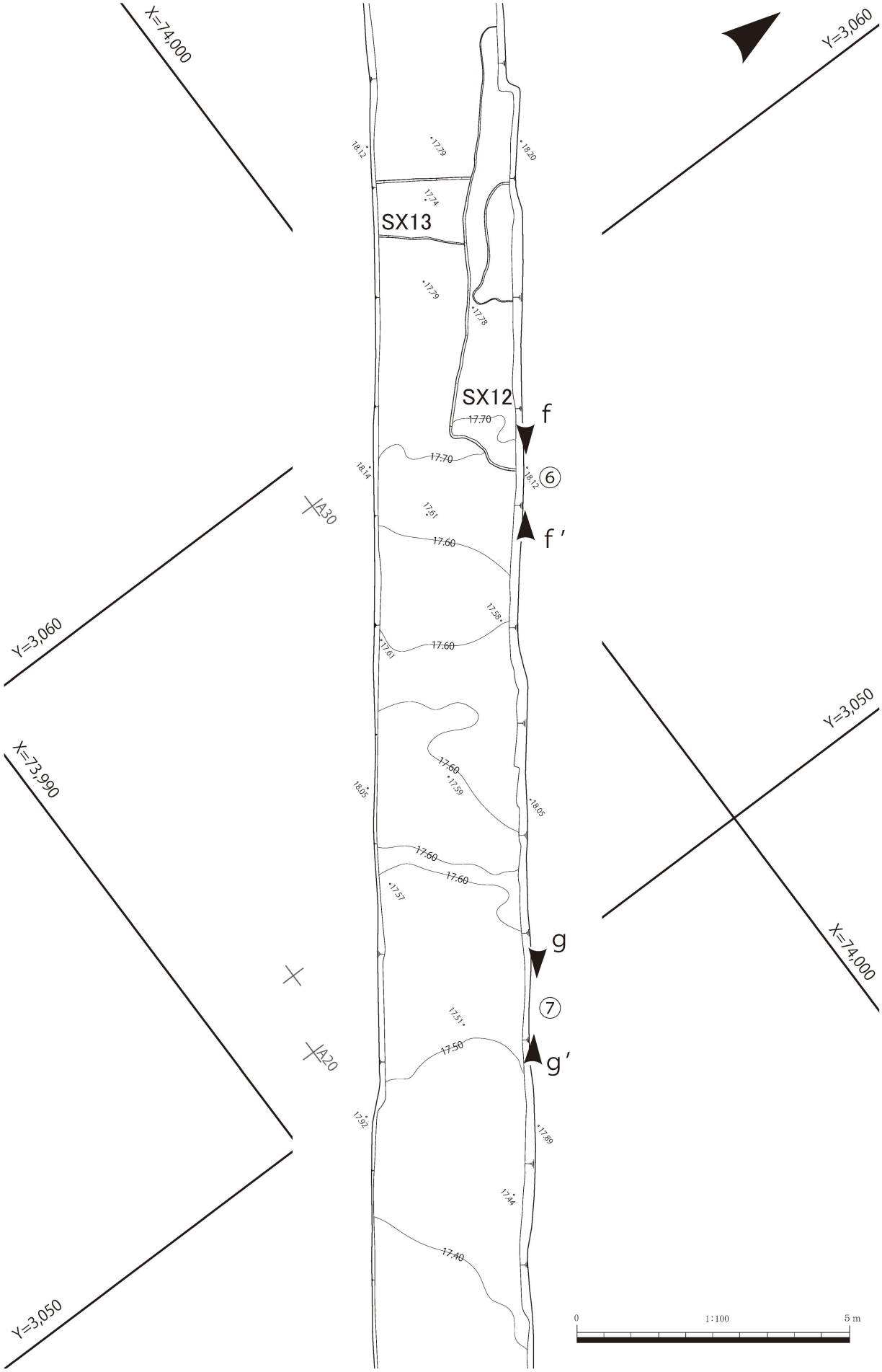

**第 10 図　小長沢Ⅱ遺跡　遺構全体図**（1：400）



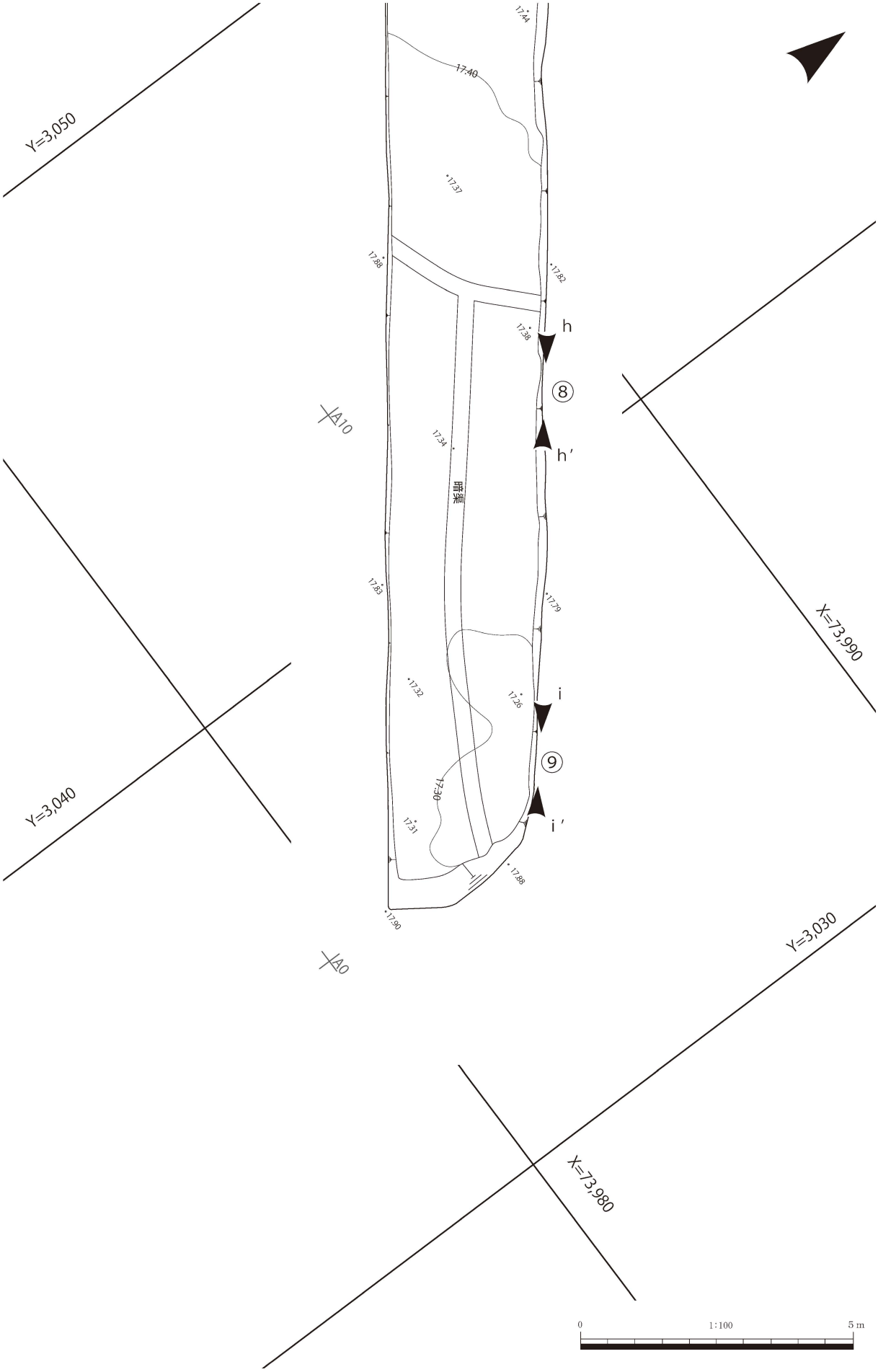

**第 11 図　小長沢Ⅱ遺跡　遺構平面図１**（１：100）



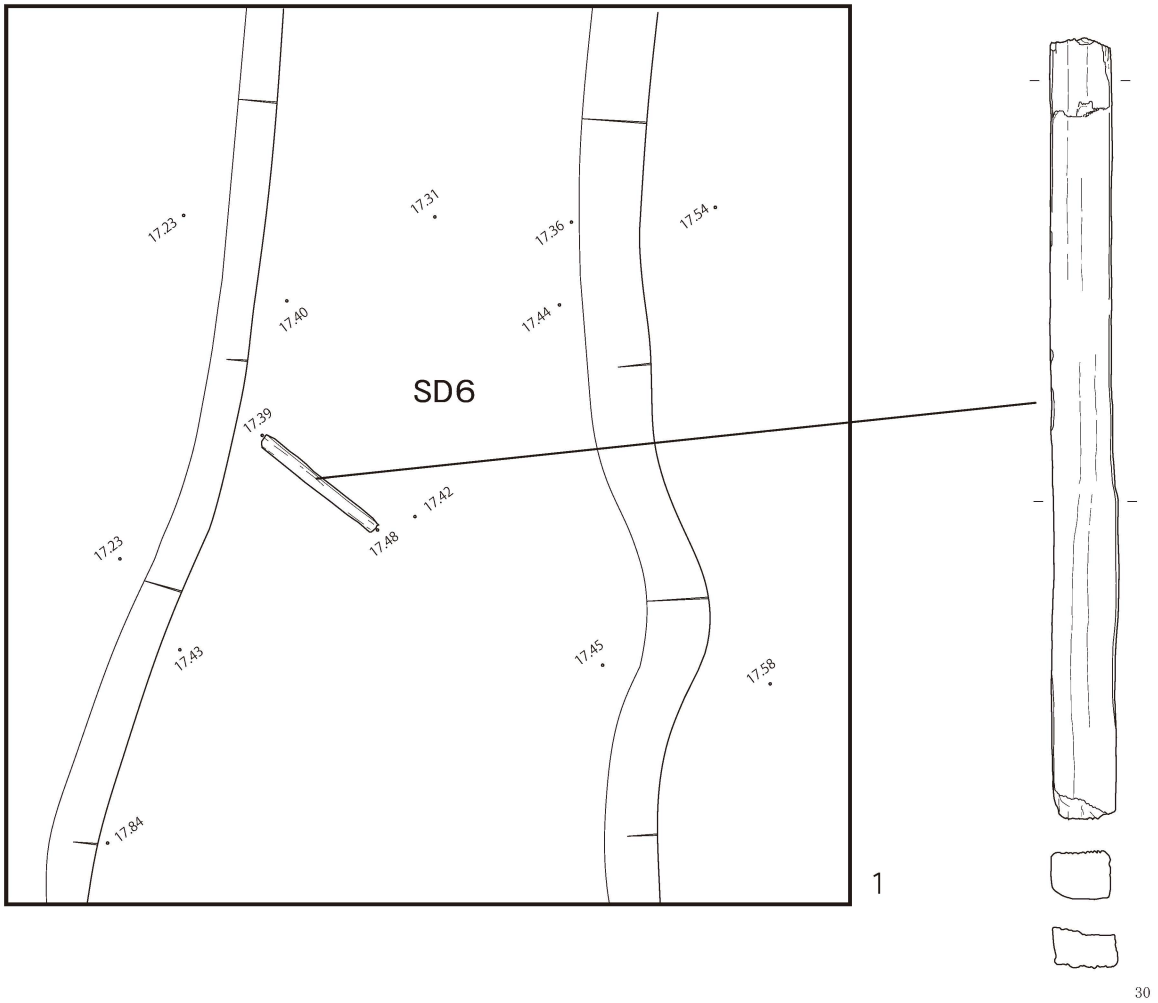

**第 12 図　小長沢Ⅱ遺跡　遺構平面図２**（１：100）

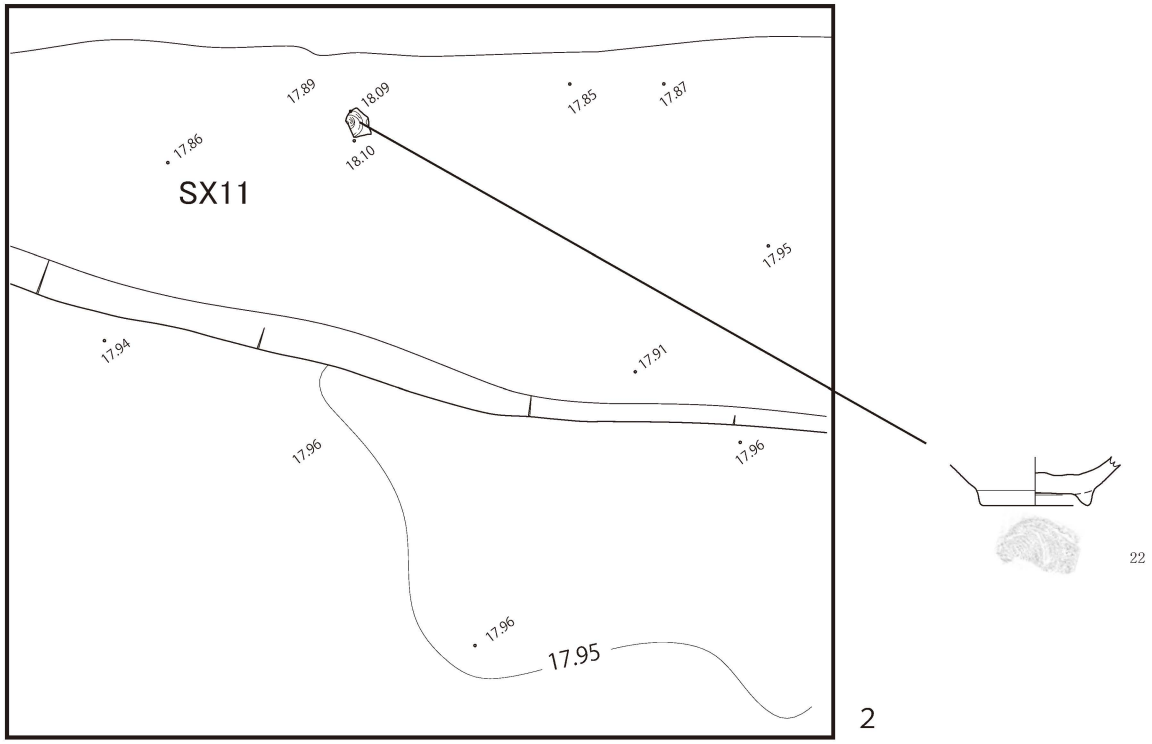



**第 13 図　小長沢Ⅱ遺跡　遺構平面図３**（1：100）

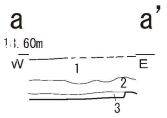



**第 14 図　小長沢Ⅱ遺跡　遺構平面図４**（１：100）



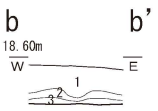




**第 15 図　小長沢Ⅱ遺跡　遺物出土状況図**（遺構　1：20、遺物　1：4）
1.ＳＤ６　2.ＳＸ11



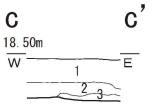

## 基本層序①

1．10YR4/2 灰黄褐色　粘土質細～中砂　……Ⅰ層：盛土
2．2.5Y3/1 黒褐色　粘土質極細～細砂　粘性あり
　しまりなし　……Ⅱ層：包含層？
3．5Y3/2 オリーブ黒色細～中砂　草本（単子葉類か）
　由来の有機物に 7.5Y3/1 オリーブ黒色粘土が
　径 100 ㎜で混じる　……ＳＸ１埋土



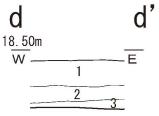

## 基本層序②

1．10YR4/2 灰黄褐色　粘土質細～中砂　……Ⅰ層：盛土
2．2.5Y3/1 黒褐色　粘土質極細～細砂　粘性あり
　しまりなし　……Ⅱ層：包含層？
3．2.5Y3/1 黒褐色　粘土質極細～細砂　粘性あり
　しまりなし　Ⅱ層がⅢ層にブロック状に入る（荷重痕）



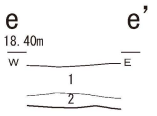

## 基本層序③

1．10YR4/2 灰黄褐色　粘土質細～中砂　……Ⅰ層：盛土
2．2.5Y3/1 黒褐色　粘土質極細～細砂　粘性あり
　しまりなし　……Ⅱ層：包含層？
3．2.5Y3/1 黒褐色　粘土質極細～細砂　粘性あり
　しまりなし　Ⅱ層がⅢ層にブロック状に入る（荷重痕）



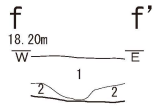

## 基本層序④

1．10YR4/2 灰黄褐色　粘土質細～中砂　…Ⅰ層：盛土
2．2.5Y3/1 黒褐色　粘土質極細～細砂　粘性あり
　しまりなし　…Ⅱ層：包含層？
3．2.5Y3/1 黒褐色　粘土質極細～細砂　粘性あり
　しまりなし　Ⅱ層に径 2 ～ 5 ㎜の礫が混じる
　Ⅲ層がブロック状にやや入る（荷重痕）…ＳＸ11 の埋土



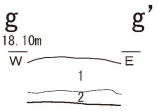

## 基本層序⑤

1．10YR4/2 灰黄褐色　粘土質細～中砂　…Ⅰ層：盛土
2．2.5Y3/1 黒褐色　粘土質極細～細砂　粘性あり
　しまりなし（Ⅱ層）がⅢ層ブロックが入る
　やや乱れている　土器含む



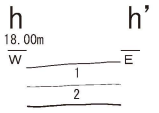

## 基本層序⑥

1．10YR4/2 灰黄褐色　粘土質細～中砂　…Ⅰ層：盛土
2．2.5Y3/1 黒褐色　粘土質極細～細砂　粘性あり
　しまりなし　……Ⅱ層：包含層？



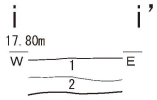

## 基本層序⑦

1．10YR4/2 灰黄褐色　粘土質細～中砂　…Ⅰ層：盛土
2．2.5Y4/1 黄灰色粘土　粘性あり　しまりややあり



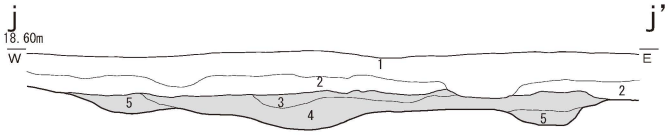

## 基本層序⑧

1．10YR4/2 灰黄褐色　粘土質細～中砂　…Ⅰ層：盛土
2．2.5Y3/2 黒褐色粘土にⅢ層ブロックが入る
　やや乱れている　粘性あり　しまりややあり



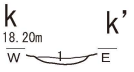

## 基本層序⑨

1．10YR4/2 灰黄褐色　粘土質細～中砂　…Ⅰ層：盛土
2．2.5Y3/2 黒褐色粘土にⅢ層ブロックが入る
　やや乱れている　粘性あり　しまりややあり



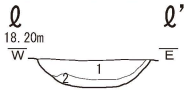

## ＳＤ２

1．10YR4/2 灰黄褐色　粘土質細～中砂　……Ⅰ層：盛土
2．2.5Y3/1 黒褐色　粘土質極細～細砂　粘性あり　しまりなし　……Ⅱ層：包含層？
3．7.5Y3/1 オリーブ黒色　粘土質極細～細砂　Ⅲ層ブロック（径 50 ～ 100 ㎜）含む　有機物含む　しまりなし
　粘性ややあり　全体として撹乱気味である　……ＳＤ２埋土
4．5Y3/1 オリーブ黒色　シルト質細～中砂　有機物少量含む　しまりなし　粘性ややなし　淘汰やや良好
　……ＳＤ２埋土
5．2.5Y3/3 暗オリーブ褐色　細～中砂　有機物（草木）含む　しまりなし　粘性なし　……ＳＤ２埋土



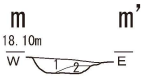

## ＳＤ３

1．2.5Y3/2 黒褐色　細～中砂質粘土
　しまりややなし　粘性ややなし



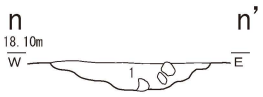

## ＳＤ４

1．5Y4/1 オリーブ黒色　極細～細砂質粘土
　径 2 ～ 5 ㎜の礫混じる
2．2.5Y3/1 オリーブ黒色　極細～細砂質シルト
　しまりなし　淘汰良好



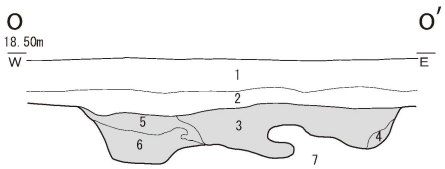

## ＳＤ５

1．2.5Y3/1 黒褐色　極細～細砂
　粘性あり　しまりなし
2．1 層とⅢ層粘土（埋土）が混じる
　粘性なし　しまりなし



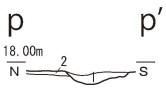

## ＳＤ７

1．2.5Y3/1 黒褐色粘土質極細～細砂　径 2 ～ 5 ㎜の礫
　（中には径 100 ～ 200 ㎜の礫）が混じる
　Ⅲ層ブロック（5Y4/1 灰色シルト質粘土　淘汰良好）が
　径 10 ～ 50 ㎜で混じる




## ＳＤ６

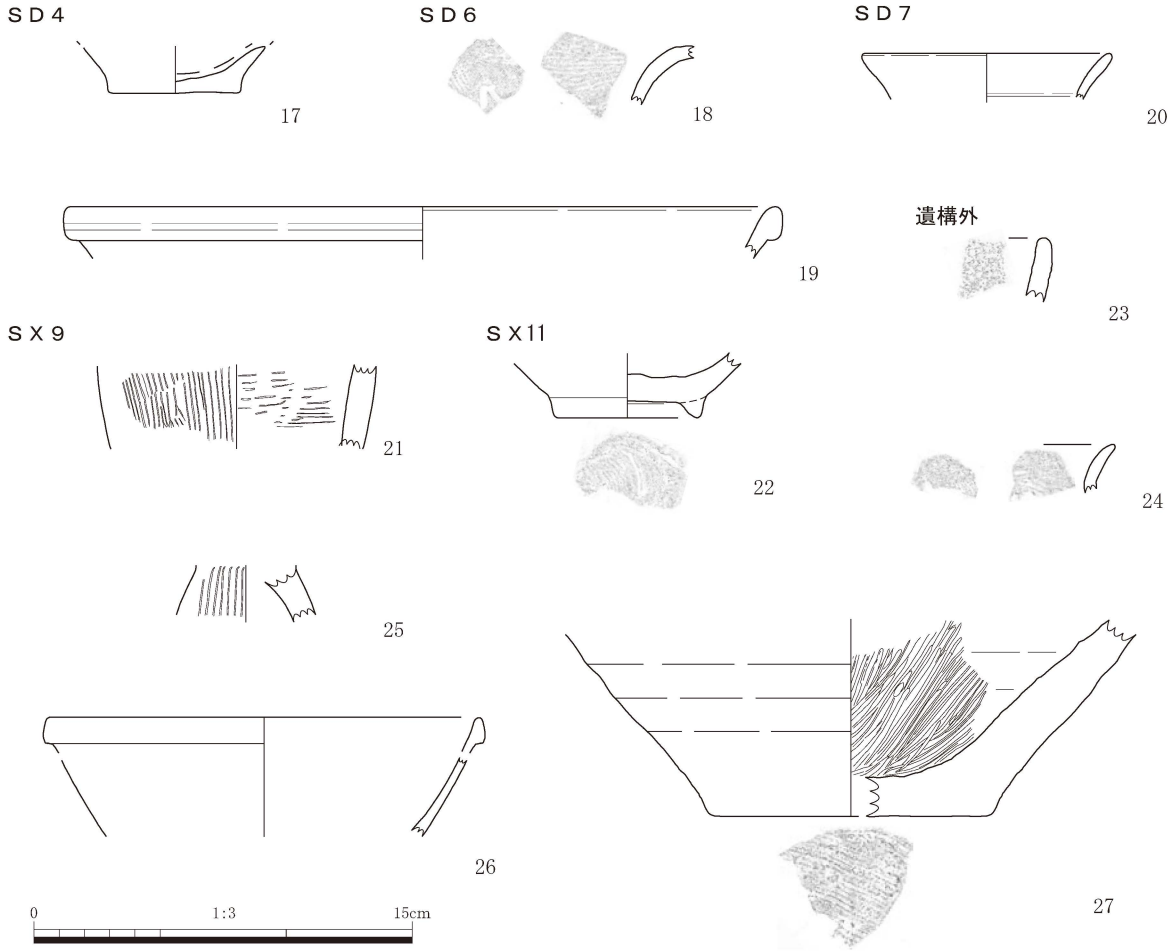
1．10YR4/2 灰黄褐色　粘土質細～中砂　……Ⅰ層：（盛土）
2．2.5Y3/1 黒褐色　粘土質極細～細砂　粘性あり　しまりなし　……Ⅱ層：包含層？
3．5Y3/1 オリーブ黒色　シルト質細～中砂　有機物含む　炭 1%混じる　部分的に粘性ややあり
　しまりなし　淘汰やや良好だがラミナが乱れている
4．3 層に地山ブロック径 20 ～ 30 ㎜が入る　粘性あり　しまりなし
5．5Y2/1 黒色　細～中砂質粘土　有機物が分解されたような堆積物　粘性あり　しまりなし
6．2.5Y3/1 黒褐色　細～中砂質粘土　未分解の有機物層（草本主体）
7．5Y4/1 灰色　中～粗砂　シルト質と極細～細砂の互層（ラミナ）　草木・木片などの有機物含む




## ＳＤ８

1．5Y3/2 オリーブ黒色粘土質砂礫
　（砂は極粗～粗砂　礫は径 2 ～ 5 ㎜）しまりなし　粘性なし
2．5Y3/2 オリーブ黒色極細～細砂質粘土
　径 2 ～ 5 ㎜礫混じる　（1%以下）粘性あり　しまりなし

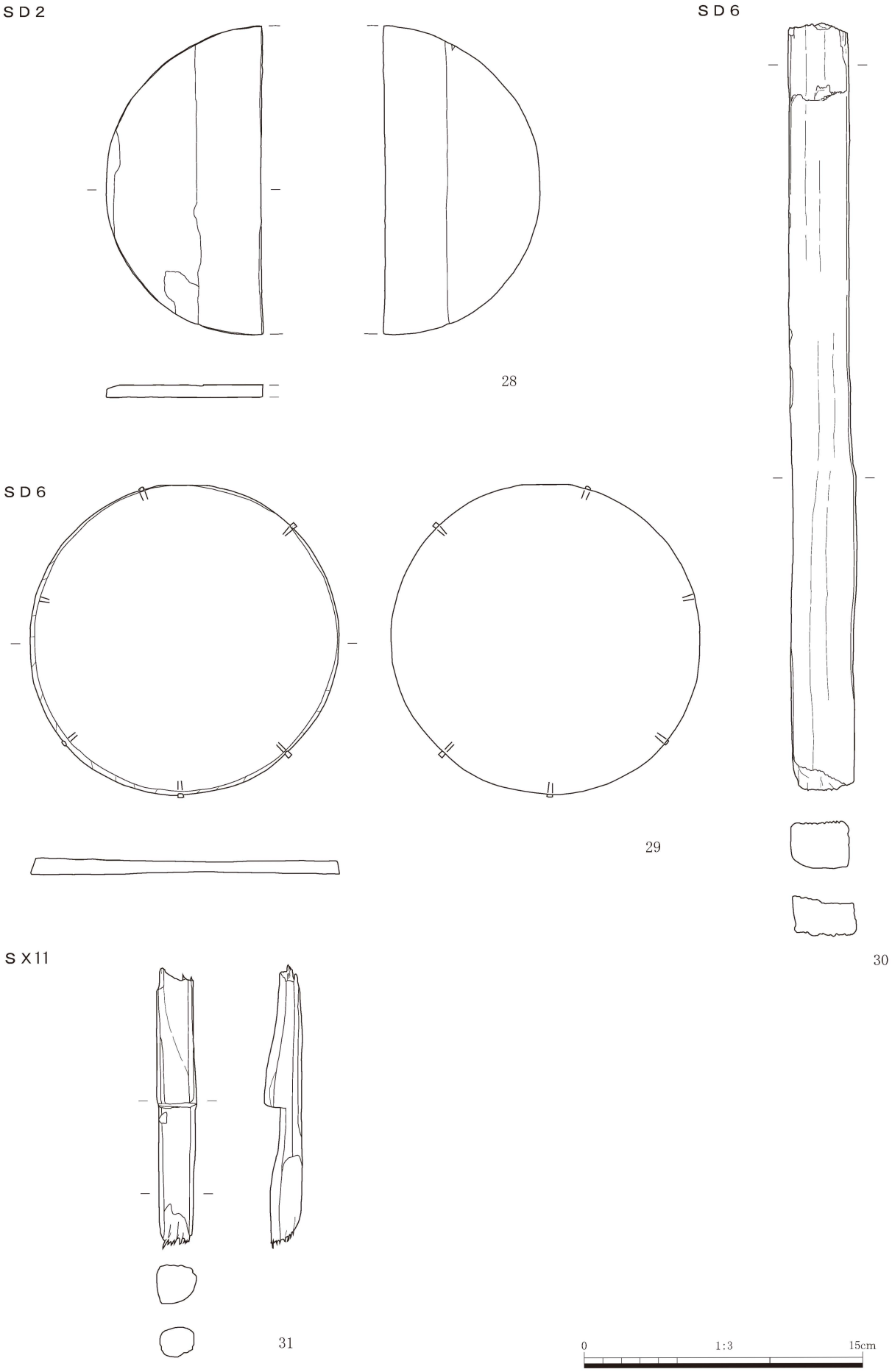
**第 16 図　小長沢Ⅱ遺跡　基本層序・遺構断面図**（１：40）
基本層序　ＳＤ２　ＳＤ３　ＳＤ４　ＳＤ５　ＳＤ６　ＳＤ７　ＳＤ８




**第 17 図　小長沢Ⅱ遺跡　遺物実測図１**（１：３）
ＳＤ４（17）　ＳＤ６（18・19）　ＳＤ７（20）　ＳＸ９（21）　ＳＸ11（22）
遺構外（23～27）

**第 10 表　小長沢Ⅱ遺跡　遺構一覧**

| 遺構番号 | 種類 | 規模（cm） | | | 時期 | 遺物 | 備考 | 挿図 | 写真 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | 長さ | 幅 | 深さ | | | | | |
| ＳＤ２ | 溝 | (228) | 580 | 40 | 古代以降 | 土師器、曲物底板 | | 10、11、16、18 | 7、12 |
| ＳＤ３ | | (222) | 55 | 6 | 古代以降 | - | | 10、11、16 | 8 |
| ＳＤ４ | | (234) | 120 | 28 | 古代以降 | 弥生土器、土師器 | | 10、11、16、17 | 8、10 |
| ＳＤ５ | | (250) | 63 | 15 | 古代以降 | - | | 10、12、16 | 8 |
| ＳＤ６ | | (234) | 345 | 51 | 古代以降 | 土師器、肥前系、曲物底板、棒状木製品 | | 10、12、15～18 | 8～12 |
| ＳＤ７ | | (236) | 169 | 29 | 近世以降 | 青磁 | | 10、12、16、17 | 9、10 |
| ＳＤ８ | | 202 | 68 | 12 | 近世以降 | 土師器 | | 10、12、16 | 9 |
| ＳＸ１ | 落ち込み | (250) | (101) | 13 | 古代以降 | - | | 10、11 | 7 |
| ＳＸ９ | | 210 | 66 | 5 | 古代以降 | 弥生土器 | | 10、11、17 | 9、10 |
| ＳＸ１０ | | (1508) | 120 | 8 | 古代以降 | 土師器 | | 10～12 | |
| ＳＸ１１ | | 850 | (110) | 9 | 近世以降 | 土師器、棒状木製品 | | 10、12、15、17、18 | 10、12 |
| ＳＸ１２ | | 818 | (110) | 4 | 古代以降 | 土師器 | | 10、13 | |
| ＳＸ１３ | | 174 | 126 | 5 | 古代以降 | 土師器 | | 10、13 | 9 |




**第 18 図　小長沢Ⅱ遺跡　遺物実測図２**（１：３）
ＳＤ２（28）　ＳＤ６（29・30）　ＳＸ11（31）

## 第 11 表　小長沢Ⅱ遺跡　土器・陶磁器一覧

| 挿図 | 遺物番号 | 写真 | 出土地点 | | | 種類 | 器種 | | 法量（cm） | | | | 重さ（g） | 時期 | | 調整 | | 色調 | | 胎土 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | グリッド | 遺構 | 層位 | | | | 口径 | 器高 | 底径 | 厚さ | | | | 外面 | 内面 | 外面 | 内面 | | |
| 17 | 17 | 10 | | ＳＤ４ | | 弥生土器 | 壺 | 底部 | - | (1.9) | 5.0 | 0.5 | 16.23 | 弥生 | 中～後期 | ミガキ？、黒斑→摩耗 | 剥離 | 7.5YR7/4 にぶい橙色 | | 赤色粒、白色粒、海綿骨針 | |
| | 18 | | | ＳＤ６ | | 土師器 | 甕 | 胴部 | - | (2.4) | - | 0.6 | 0.43 | 古墳 | | ナナメハケ | ヨコハケ | 10YR7/2 にぶい黄橙色 | | 砂粒 | |
| | 19 | | | | | 唐津 | 擂鉢 | 口縁部 | 28.0 | (2.0) | - | 0.5 | 13.73 | 近世 | | ロクロナデ→鉄釉 | | 5YR3/3 暗赤褐色 | | 砂粒 | |
| | 20 | | | ＳＤ７ | | 青磁 | 皿 | | (10.0) | (1.8) | - | 0.4 | 3.66 | 中世 | Ⅰ類？ | 青磁釉 | | 5Y6/2 灰オリーブ色 | | | 同安窯系 |
| | 21 | | Ａ64 | ＳＸ９ | | 弥生土器 | 甕 | 胴部 | - | (3.4) | - | 1.0 | 21.54 | 弥生 | 中～後期 | タテハケ | ヨコハケ、一部コゲ | 10YR7/2 にぶい黄橙色 | | 白色粒、砂粒 | |
| | 22 | | | ＳＸ11 | | 土師器 | 椀 | 底部 | - | (2.5) | 5.6 | 0.7 | 44.92 | 古代 | ９～10ｃ | 底部回転糸切り、ロクロナデ→摩耗 | ロクロナデ→摩耗 | 2.5Y7/2 灰黄色 | | 白色粒、赤色粒、黒色粒 | |
| | 23 | | | 遺構外 | Ⅰ層 | 縄文土器 | 深鉢 | 口縁部 | - | (2.6) | - | 0.8 | 4.91 | 縄文 | 中～後期 | 縄文→摩耗 | ヨコナデ→摩耗 | 7.5YR6/4 にぶい橙色 | | 赤色粒、白色粒 | |
| | 24 | | Ａ68 | | | 土師器 | 甕 | | - | (1.9) | - | 0.5 | 2.80 | 古墳 | | 摩耗 | | 7.5YR7/3 にぶい橙色 | | | |
| | 25 | | Ａ70 | | | | 高杯？ | 脚部 | - | (2.3) | - | 0.9 | 13.35 | | | タテハケ→摩耗 | ケズリ？→摩耗 | 2.5Y7/4 にぶい橙色 | 10YR7/2 にぶい橙色 | 赤色粒、白色粒、石英、輝石 | |
| | 26 | | Ａ40 | | | 白磁 | 碗 | 胴部 | - | (3.1) | - | 0.4 | 5.24 | 中世 | Ⅳ類 | 白磁釉 | | 10Y8/1 灰白色 | | | |
| | 27 | | Ａ85 | | | 珠洲 | 擂鉢 | 底部 | - | (7.7) | 11.0 | 1.7 | 248.29 | | Ⅴ～Ⅵ期 | 底部糸切り、ナデ | 卸目 | N6/0 灰色 | N7/0 灰白色 | 海綿骨針 | |

## 第 12 表　小長沢Ⅱ遺跡　木製品一覧

| 挿図 | 遺物番号 | 写真 | 出土地点 | | | 種類 | 器種 | | 法量（cm） | | | 時期 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | グリッド | 遺構 | 層位 | | | | 長さ | 幅 | 厚さ | | |
| 18 | 28 | 12 | | ＳＤ２ | | 木製品 | 曲物 | 底板 | 16.8 | 16.5 | 0.7 | 古代以降 | 半分欠損 |
| | 29 | 11 | | ＳＤ６ | | | | | 16.3 | 8.3 | 0.6 | | 木釘残る |
| | 30 | 12 | | | №1 | | 棒状 | | (41.0) | 3.2 | 2.2 | | 上下欠損 |
| | 31 | | | ＳＸ11 | | | | | (5.7) | 1.8 | 1.9 | | 上下欠損 |

# 6　自然科学分析

## はじめに

小長沢Ⅱ遺跡は富山市西部（旧婦負郡婦中町小長沢地区）に位置し、井田川流域平野（深井 1979）西部の自然堤防上及び後背湿地上に立地する。

公益財団法人富山県文化振興財団（以下、財団と略称）が小長沢Ⅱ遺跡の発掘調査で検出した溝（ＳＤ６）を対象に、ＳＤ６の機能していた時期を明らかにし、当時の遺跡内及び周辺地域での古植生の変遷を明らかにする目的で委託し、文化財調査コンサルタント株式会社が受託・実施した。

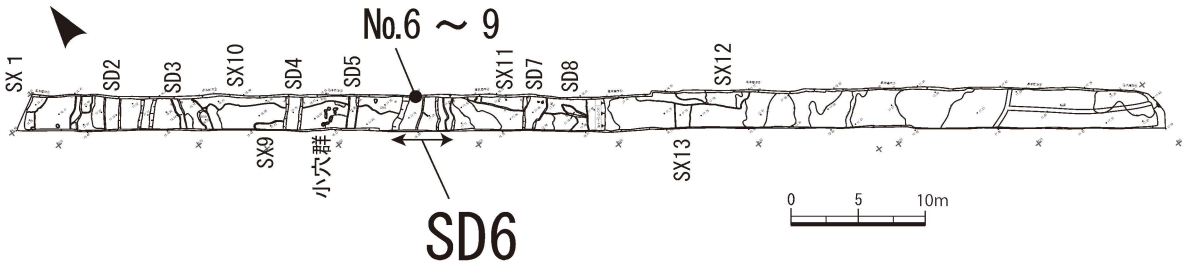
## （1）分析試料について

調査区平面図（第 19 図）中にＳＤ６での試料採取地点を、北ＳＤ６断面図（第 20 図）中に各試料の採取層準を示す。図中の⑥～⑨がおおよその試料採取位置で、⑥～⑨で花粉分析試料、⑥、⑧、⑨で年代測定試料が採取されていた。

第 13 表に年代測定試料一覧を、第 21 図に試料の状況写真を示す（試料一覧には、年代測定前処理法、年代測定結果も併記した）。

## （2）分析方法

### A　微化石概査方法

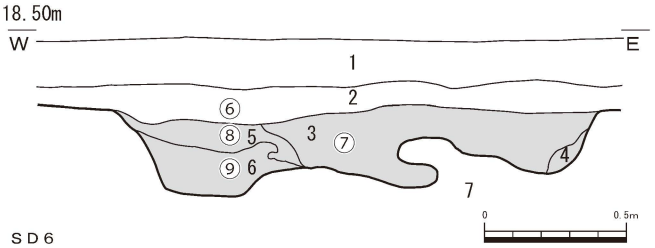



**第 19 図　試料採取地点**（ＳＤ６）

花粉分析用プレパラート、及び珪藻分析用プレパラートを観察し、花粉（胞子）、植物片、炭片、珪藻、火山ガラス、植物珪酸体の含有状況を概観し、５段階で示した。

### B　花粉分析方法

渡辺（2010）に従って実施した。花粉化石の観察・同定は、光学顕微鏡により通常 400 倍で、必要に応じ 600 倍あるいは 1000 倍を用いて実施した。原則的に木本花粉総数が 200 粒以上になるまで同定を行い、同




ＳＤ６
1．10YR4/2 灰黄褐色　粘土質細～中砂　……Ⅰ層：（盛土）
2．2.5Y3/1 黒褐色　粘土質極細～細砂　粘性あり　しまりなし　……Ⅱ層：包含層？
3．5Y3/1 オリーブ黒色　シルト質細～中砂　有機物含む　炭 1%混じる　部分的に粘性ややあり　しまりなし　淘汰やや良好だがラミナが乱れている
4．3 層に地山ブロック径 20 ～ 30 ㎜が入る　粘性あり　しまりなし
5．5Y2/1 黒色　細～中砂質粘土　有機物が分解されたような堆積物　粘性あり　しまりなし
6．2.5Y3/1 黒褐色　細～中砂質粘土　未分解の有機物層（草本主体）
7．5Y4/1 灰色　中～粗砂　シルト質と極細～細砂の互層（ラミナ）　草木・木片などの有機物含む

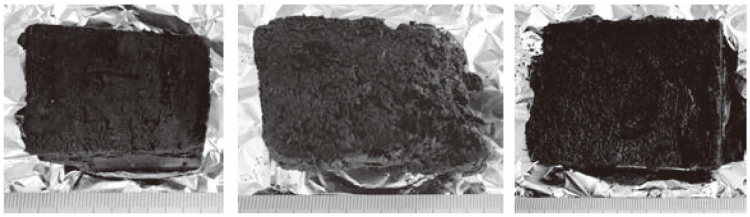
**第 20 図　試料採取位置**（ＳＤ６）

**第 13 表　年代測定試料一覧**

| 試料 | | | | | | 前処理 | 測定番号 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 試料No. | 遺跡名 | 出土位置<br>(遺構ほか) | 状況 | 重量(g) | 推定時期 | | |
| 6 | 小長沢Ⅱ | SD6<br>2 層 | 泥炭 | 78.519 | - | 湿式篩分：106 μm 以下<br>酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸:1.2mol/L,<br>水酸化ナトリウム:1.0mol/L,塩酸:1.2mol/L) | PLD-50590 |
| 8 | 小長沢Ⅱ | SD6<br>5 層 | 泥炭 | 65.854 | - | 湿式篩分：106 μm 以下<br>酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸:1.2mol/L,<br>水酸化ナトリウム:1.0mol/L,塩酸:1.2mol/L) | PLD-50591 |
| 9 | 小長沢Ⅱ | SD6<br>6 層 | 泥炭 | 91.492 | - | 湿式篩分：106 μm 以下<br>酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸:1.2mol/L,<br>水酸化ナトリウム:1.0mol/L,塩酸:1.2mol/L) | PLD-50592 |

| 試料No. | $\delta^{13}C$<br>(‰) | $\delta^{13}C$ 補正無年代<br>(yrBP±1σ) | 暦年較正用年代<br>(yrBP±1σ) | $^{14}C$ 年代<br>(yrBP±1σ) | $^{14}C$ 年代を暦年代に較正した年代範囲 | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | | | 1σ 暦年代範囲 | 2σ 暦年代範囲 |
| 6 | -22.94±0.20 | 1745±21 | 1779±20 | 1780±20 | 242- 255 cal AD (16.6%)<br>286- 325 cal AD (51.7%) | 232- 261 cal AD (26.8%)<br>277- 339 cal AD (68.7%) |
| 8 | -24.89±0.19 | 1748±21 | 1749±20 | 1750±20 | 250- 263 cal AD (12.8%)<br>275- 295 cal AD (19.9%)<br>311- 346 cal AD (35.5%) | 243- 365 cal AD (94.4%)<br>370- 375 cal AD ( 1.1%) |
| 9 | -26.54±0.18 | 1846±21 | 1820±21 | 1820±20 | 210- 248 cal AD (66.0%)<br>300- 303 cal AD ( 2.3%) | 132- 141 cal AD ( 1.2%)<br>158- 192 cal AD ( 5.7%)<br>200- 255 cal AD (72.6%)<br>286- 324 cal AD (15.9%) |

時に検出される草本・胞子化石の同定も行った。また中村（1974）に従ってイネ科花粉を、イネを含む可能性が高い大型のイネ科（40ミクロン以上）とイネを含む可能性が低い小型のイネ科（40ミクロン未満）に細分した。



**第 21 図　年代測定試料**

### C　ＡＭＳ年代測定方法

塩酸による酸洗浄の後に水酸化ナトリウムによるアルカリ処理、更に再度酸洗浄を行った。この後、二酸化炭素を生成・精製し、グラファイトに調整した。$^{14}$C濃度の測定にはタンデム型イオン加速器を用い、半減期：5,568 年で年代計算を行った。暦年代較正には OxCal ver. 4.4（Bronk Ramsey, 2009） を利用し、INTCAL20（ Reymer et al., 2020 ）を用いた。

## （3）分析結果

### A　微化石概査結果

花粉分析用プレパラート及び花粉分析処理残渣を用いた微化石の概査結果は、第 14 表のとおりである（植物片、微粒炭は花粉分析用プレパラートを観察した。珪藻、植物珪酸体、火山ガラスは、花粉分析処理の残渣を観察した）。

**第 14 表　微化石概査結果**

| 試料 No. | 遺跡 | 遺構 | 地層 | 花粉 | 微粒炭 | 植物片 | 珪藻 | 植物珪酸体 | 火山ガラス |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 6 | 小長沢Ⅱ | SD6 | 2 層 | ◎ | ○ | △ | △×片 | △ | △ |
| 7 | | | 3 層 | ◎ | ◎ | △× | × | △× | △ |
| 8 | | | 5 層 | ○ | ◎ | △× | △片 | △ | △ |
| 9 | | | 6 層 | ◎ | ○ | ○ | △片 | ○ | ○ |

凡例 ◎　：十分な数量が検出できる　○　：少ないが検出できる　△　：非常に少ない
　　△×　：極めてまれに検出できる　×　：検出できない

全ての試料から統計処理に十分な量が検出され、微粒炭の検出量も多かったが、植物片はやや少なかった。植物珪酸体は全体にやや少なく、珪藻は破片が僅かに検出された。また、火山ガラスはやや少なかった。

## B　花粉分析結果

分析結果を第 22 図の花粉ダイアグラム及び、第 15 表の花粉化石組成表に示す。

花粉粒数ダイアグラムでは、分類ごとに百分率（百分率の算出には、木本花粉総数を基数にしている）を、分類群ごとに異なるハッチのスペクトルで表している。このほか、[総合ダイアグラム]として分類群ごとの割合を示したほか、[含有量ダイアグラム]として分類群ごとに含有量（湿潤試料 1 g 中の粒数）の変化を示している。また中村（1974）に従ってイネ科花粉を、イネを含む可能性が高い大型のイネ科（40 ミクロン以上）とイネを含む可能性が低い小型のイネ科（40 ミクロン未満）に細分した。

得られた花粉・胞子群集の特徴は、下記の通りであった。

木本花粉ではスギ属が高率を占め、更に増加傾向を示す。これに対し、コナラ亜属は下部では 10 %を超えスギ属に次ぐが、減少傾向を示し、最上部では 3.7%まで減少する。

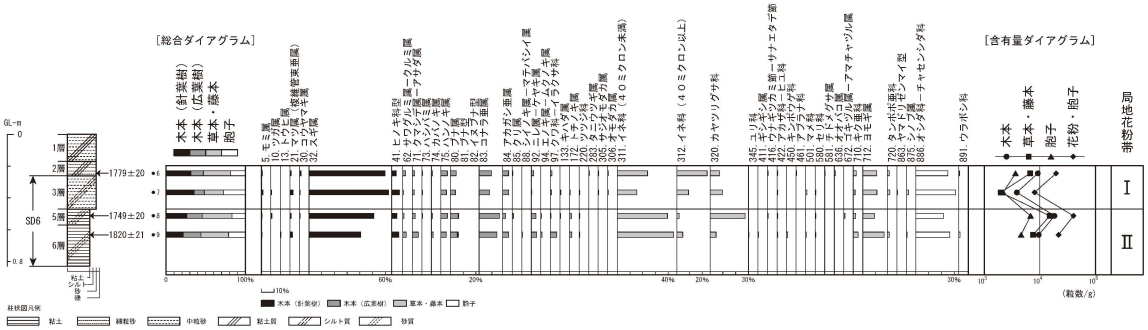
草本花粉はバラツキが多いが、イネ科（40 ミクロン未満）が高率を示す。また、最上部ではイネ科（40 ミクロン以上）が急増している。

## C　ＡＭＳ年代測定結果

年代測定結果を第 13 表に示す。また、OxCal ver. 4.4（Ramsey, 2009）による各試料の暦年較正図を第 23 図に示す。

第 13 表には、$\delta^{13}$C 値と 4 種類の年代を示している。

$\delta^{13}$C 補正無年代は、従来は実年代として用いられてきた値である。$^{14}$C 濃度が環境、時代にかかわらず常に一定であるという仮定の下に、リビーの半減期（5,568 年）を用いて計算した値で、




**第 22 図　ＳＤ６の花粉ダイアグラム**

西暦1950年からさかのぼった年代値で示してある（δ$^{13}$C補正を行っていない値であり、通常算出値を５年単位で丸めて示される。ここでは算出値をそのまま示す。）。

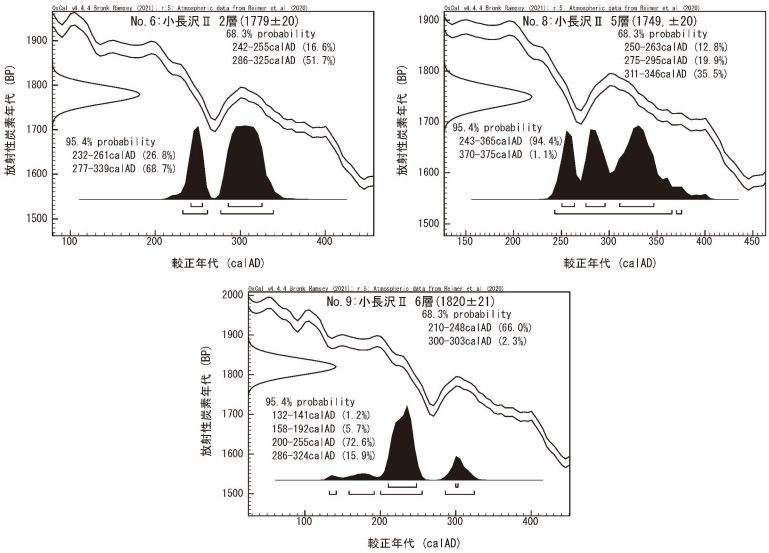
$^{14}$C年代は、$^{14}$C濃度が環境により変動することからδ$^{13}$Cを測定し、δ$^{13}$C＝-25‰に規格化した$^{14}$C濃度を求め、リビーの半減期（5,568年）を用いて年代値を算出したもの（暦年較正用年代）を５年単位で丸めた値で西暦1950年からさかのぼった年代値で示してある。

一方暦年較正年代は、時代（時間）とともにランダムに変化している大気中二酸化炭素の$^{14}$C濃度を、樹木の年輪や海底堆積物のしま状粘土、サンゴの年輪から明らかにして得られた暦年代較正データIntCal20 (Reimer et al., 2020)を用いて較正したものである。較正にはOxCal ver. 4.4 (Ramsey, 2009)を用いている。また、OxCalでの較正計算には、暦年較正用年代を用いている。

**第15表　花粉化石組成表**

| | 遺跡 | | 小長沢Ⅱ遺跡 | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | 遺構 | | SD6 | | | | | | | |
| | 地層 | | 2層 | | 3層 | | 5層 | | 6層 | |
| | | 試料No. | 6 | | 7 | | 8 | | 9 | |
| 5 | *Abies* | モミ属 | 2 | 0.9% | 3 | 1.4% | 1 | 0.5% | 1 | 0.5% |
| 10 | *Tsuga* | ツガ属 | | | 1 | 0.5% | 2 | 0.9% | | |
| 13 | *Picea* | トウヒ属 | | | | | | | 1 | 0.5% |
| 21 | *Pinus (Diploxylon)* | マツ属（複維管束亜属） | 2 | 0.9% | 5 | 2.4% | 2 | 0.9% | 4 | 1.9% |
| 30 | *Sciadopitys* | コウヤマキ属 | 3 | 1.4% | 1 | 0.5% | 1 | 0.5% | | |
| 32 | *Cryptomeria* | スギ属 | 131 | 59.8% | 130 | 62.5% | 111 | 50.9% | 87 | 40.7% |
| 41 | Cupressaceae type | ヒノキ科型 | 8 | 3.7% | 13 | 6.3% | 9 | 4.1% | 12 | 5.6% |
| 62 | *Pterocarya-Juglans* | サワグルミ属－クルミ属 | 5 | 2.3% | 1 | 0.5% | 2 | 0.9% | 6 | 2.8% |
| 71 | *Carpinus-Ostrya* | クマシデ属－アサダ属 | 4 | 1.8% | 3 | 1.4% | 5 | 2.3% | 10 | 4.7% |
| 73 | *Corylus* | ハシバミ属 | 1 | 0.5% | 1 | 0.5% | 1 | 0.5% | | |
| 74 | *Betula* | カバノキ属 | 2 | 0.9% | | | 2 | 0.9% | 3 | 1.4% |
| 75 | *Alnus* | ハンノキ属 | 11 | 5.0% | 9 | 4.3% | 11 | 5.0% | 9 | 4.2% |
| 80 | *Fagus* | ブナ属 | 10 | 4.6% | 8 | 3.8% | 13 | 6.0% | 11 | 5.1% |
| 81 | *Fagus crenata* type | ブナ型 | | | | | | | 1 | 0.5% |
| 82 | *Fagus japonica* type | イヌブナ型 | | | | | 1 | 0.5% | 1 | 0.5% |
| 83 | *Quercus* | コナラ亜属 | 21 | 9.6% | 17 | 8.2% | 35 | 16.1% | 30 | 14.0% |
| 84 | *Cyclobalanopsis* | アカガシ亜属 | 10 | 4.6% | 10 | 4.8% | 5 | 2.3% | 10 | 4.7% |
| 85 | *Castanea* | クリ属 | 1 | 0.5% | | | 2 | 0.9% | | |
| 88 | *Castanopsis-Pasania* | シイノキ属－マテバシイ属 | | | | | | | 1 | 0.5% |
| 92 | *Ulmus-Zelkova* | ニレ属－ケヤキ属 | 4 | 1.8% | 1 | 0.5% | 8 | 3.7% | 9 | 4.2% |
| 94 | *Celtis-Aphananthe* | エノキ属－ムクノキ属 | | | | | 1 | 0.5% | 2 | 0.9% |
| 97 | *Moraceae-Urticaceae* | クワ科－イラクサ科 | 3 | 1.4% | 2 | 1.0% | 1 | 0.5% | 11 | 5.1% |
| 133 | *Phellodendron* | キハダ属 | | | 1 | 0.5% | 1 | 0.5% | | |
| 172 | *Aesculus* | トチノキ属 | | | 1 | 0.5% | 3 | 1.4% | 4 | 1.9% |
| 220 | *Ericaceae* | ツツジ科 | | | 1 | 0.5% | 1 | 0.5% | 1 | 0.5% |
| 283 | *Weigela* | タニウツギ属 | 1 | 0.5% | | | | | | |
| 305 | *Alisma* | サジオモダカ属 | 1 | 0.5% | 1 | 0.5% | | | | |
| 306 | *Sagittaria* | オモダカ属 | 1 | 0.5% | 1 | 0.5% | | | | |
| 311 | Gramineae(<40) | イネ科（40ミクロン未満） | 52 | 23.7% | 32 | 15.4% | 86 | 39.4% | 95 | 44.4% |
| 312 | Gramineae(>40) | イネ科（40ミクロン以上） | 52 | 23.7% | 19 | 9.1% | 4 | 1.8% | 10 | 4.7% |
| 320 | Cyperaceae | カヤツリグサ科 | 16 | 7.3% | 20 | 9.6% | 60 | 27.5% | 10 | 4.7% |
| 345 | Liliaceae | ユリ科 | | | | | | | 1 | 0.5% |
| 411 | *Rumex* | ギシギシ属 | | | | | | | 1 | 0.5% |
| 416 | *Echinocaulon-Persicaria* | ウナギツカミ節－サナエタデ節 | 1 | 0.5% | | | 1 | 0.5% | | |
| 422 | Chenopodiaceae-Amaranthaceae | アカザ科－ヒユ科 | 1 | 0.5% | 1 | 0.5% | 1 | 0.5% | 1 | 0.5% |
| 450 | Ranunculaceae | キンポウゲ科 | | | | | | | 2 | 0.9% |
| 461 | Cruciferae | アブラナ科 | 1 | 0.5% | | | | | | |
| 501 | Leguminosae | マメ科 | | | 2 | 1.0% | | | 1 | 0.5% |
| 580 | Umbelliferae | セリ科 | | | 1 | 0.5% | 1 | 0.5% | 1 | 0.5% |
| 581 | *Hydrocotyle* | チドメグサ属 | 1 | 0.5% | | | | | | |
| 636 | *Plantago* | オオバコ属 | 2 | 0.9% | | | | | | |
| 672 | *Actinostemma-Gynostemma* | ゴキヅル属－アマチャヅル属 | | | | | 2 | 0.9% | | |
| 710 | Carduoideae | キク亜科 | 5 | 2.3% | 3 | 1.4% | 4 | 1.8% | 8 | 3.7% |
| 712 | Artemisia | ヨモギ属 | 24 | 11.0% | 23 | 11.1% | 20 | 9.2% | 36 | 16.8% |
| 720 | Cichorioideae | タンポポ亜科 | 3 | 1.4% | 4 | 1.9% | | | 3 | 1.4% |
| 863 | *Osmunda Cinnamome a* type | ヤマドリゼンマイ型 | | | 1 | 0.5% | | | | |
| 875 | *Davallia* | シノブ属 | | | 3 | 1.4% | | | 1 | 0.5% |
| 886 | Aspid.-Asple. | オシダ科－チャセンシダ科 | 55 | 25.1% | 65 | 31.3% | 47 | 21.6% | 57 | 26.6% |
| 891 | Polypodiaceae | ウラボシ科 | 1 | 0.5% | | | | | 2 | 0.9% |
| 898 | MONOLATE-TYPE-SPORE | 単条溝胞子 | 11 | 5.0% | 23 | 11.1% | 21 | 9.6% | 14 | 6.5% |
| 899 | TRILATE-TYPE-SPORE | 三条溝胞子 | 20 | 9.1% | 26 | 12.5% | 13 | 6.0% | 29 | 13.6% |
| 木本（針葉樹） | | | 146 | 31.3% | 153 | 35.3% | 126 | 26.4% | 105 | 21.6% |
| 木本（広葉樹） | | | 73 | 15.7% | 55 | 12.7% | 92 | 19.2% | 109 | 22.4% |
| 草本・藤本 | | | 160 | 34.3% | 107 | 24.7% | 179 | 37.4% | 169 | 34.8% |
| 胞子 | | | 87 | 18.7% | 118 | 27.3% | 81 | 16.9% | 103 | 21.2% |
| 総数 | | | 466 | | 433 | | 478 | | 486 | |
| 含有量(粒数/g) | | | 19,505 | | 8,030 | | 40,117 | | 21,675 | |

左よりカウント粒数、百分率



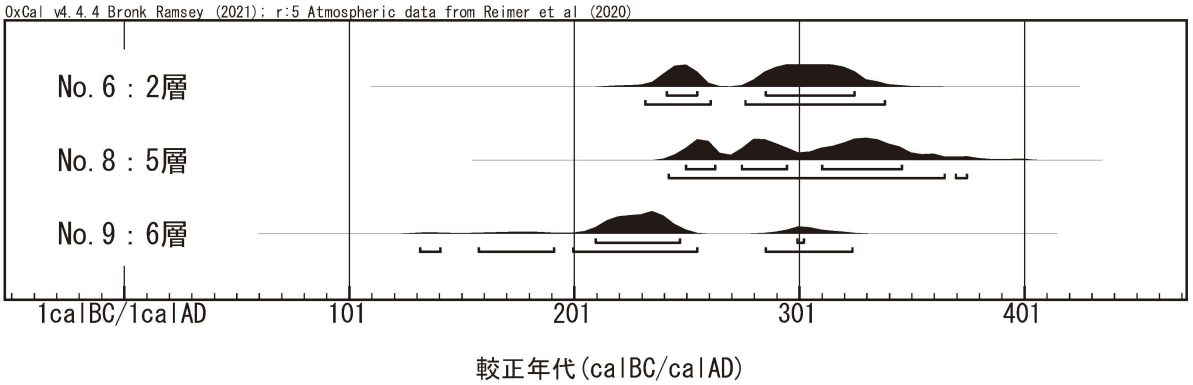

**第23図　暦年較正結果**

## （４）局地花粉帯の設定

花粉分析結果を基に、Ⅰ、Ⅱ帯の局地花粉帯を設定した。以下に各花粉帯の特徴を下位から示す。

**Ⅱ帯（試料№.９～８）**

木本花粉の割合が45％程度と高く、草本・藤本花粉が35％程度、胞子が20％程度の割合を示す。木本花粉ではスギ属が40～50％程度と高率で増加傾向を示す。




**第 24 図　暦年較正年代一覧**

次いでコナラ亜属が 15%程度を示す。草本・藤本花粉では、イネ科（40 ミクロン未満）が 40%程度を示すほか、カヤツリグサ科が試料により 28%と高率を示す。このほか、ヨモギ属が 10%程度の出現率を示している。

**Ⅰ帯（試料№７、６）**

木本花粉は引き続き 45%程度と高い。試料№７で胞子が 27%、草本・藤本花粉が 25%へと変化するが、試料№６ではⅡ帯と同レベルになる。木本花粉では引き続きスギ属が高率を示し、60%程度まで増加する。草本・藤本花粉ではイネ科（40 ミクロン以上）が増加する。

## （５）年代測定結果と局地花粉帯、既知の花粉分析結果との関係

第 24 図に、年代測定結果をまとめた。この図から明らかなように、２層（試料№６）と５層（試料№８）で年代値の僅かな逆転が認められるが、誤差の範囲に収まることから、ほぼ同時期（弥生時代後期～古墳時代前期）を示すと考えられる。また、最下位の６層（試料№９）は、やや古い年代値（弥生時代後期）であった。一方、ＳＤ６は、出土遺物から中世以降に埋まったと考えられていた。年代測定を行った３試料はいずれも「泥炭」であり、生物擾乱などのため実年代より古い年代値が得られることがある。このことから、二次堆積や生物擾乱のために実際より古い年代値が得られた可能性がある。

小長沢Ⅱ遺跡近隣の小長沢鎌蓋遺跡でも花粉分析が行われた（第Ⅴ章６）。小長沢鎌蓋遺跡ではⅡ帯（ｂ、ａ亜帯）、Ⅰ帯の花粉化石群集の変遷を示しており、Ⅱ帯～Ⅰ帯を通してスギ属の高率での出現と増加傾向が認められた。今回得られた局地花粉帯Ⅱ、Ⅰ帯は、スギ属の出現率の変化とコナラ亜属、ブナ属の出現率の変化、Ⅰ帯でのイネ科（40 ミクロン以上）の急増などから小長沢鎌蓋遺跡でのⅡ帯ａ亜帯、Ⅰ帯に対比できる。一方、小長沢鎌蓋遺跡では奈良～平安時代の年代測定結果が得られている。

このことから、小長沢Ⅱ遺跡での年代値が古い値を示しており、ＳＤ６が奈良～平安時代頃に堆積した可能性も指摘できる。一方、スギは調査地近辺の山地斜面の谷沿いや遺跡の立地する氾濫原の内部に生育していたと考えられる。その分布規模が分からないことから、局所的に生育していたスギの影響で、偶然にも類似した花粉化石群集が得られた可能性も否定できない。

したがって、ＳＤ６の埋没時期（局地花粉帯Ⅱ帯、Ⅰ帯の示す時期）は得られた年代値通りの弥生時代後期～古墳時代前期、あるいは奈良～平安時代のいずれかと考えられる。

## （6）植生復元

花粉分析結果を基に局地花粉帯ごとに植生復元を行う。

**Ⅱ帯（試料№.９～７）**

遺跡近辺には湿地が広がり、アシやマコモなどのイネ科草本やハリイ類、ホタルイ類などのカヤツリグサ科、セリ類などが生育していたと考えられる。また、やや乾燥した場所にはヨモギ類などのキク類も生育していたと考えられる。

また、高率で出現するスギ属は、遺跡近辺に生育していたものと考えられ、射水丘陵性山地斜面の谷沿いや遺跡の立地する氾濫原の内部にまでスギ林が広がっていた可能性が指摘できる。また、射水丘陵性山地から南に続く山地の低所では照葉樹林が広がる一方、山地高所にはブナ林が分布し、更に高所にはトウヒやコメツガなどが亜高山帯林を成していたものと考えられる。

**Ⅰ帯（試料№.６）**

イネ科（40 ミクロン以上）が急増することから、周辺地域の開墾が始まり稲作が行われたと考えられる。一方スギ属は、Ⅱ帯から更に増加する。引き続き遺跡近辺に生育していたものと考えられ、Ⅱ帯同様に射水丘陵性山地斜面の谷沿いや遺跡の立地する氾濫原の内部にまでスギ林が広がっていた可能性が指摘できる。

## まとめ

令和４（2022）年度に行った小長沢Ⅱ遺跡の発掘調査において、ＳＤ６内部から採取された試料の花粉分析及びＡＭＳ年代測定を行った結果、以下の事柄が明らかになった。

①　ＡＭＳ年代測定値として、６層（試料№.９）から1,820±20yrBP（暦年較正年代：132～324 calAD：2σ　弥生時代後期～古墳時代前期）、５層（試料№.８）から 1,750±20yrBP（暦年較正年代：243～375 calAD：2σ　古墳時代前期）、２層（試料№.６）から 1,780±20yrBP（暦年較正年代：232～339 calAD：2σ　古墳時代前期）の年代値を得た。年代値に僅かな逆転現象が認められたが、誤差の範囲に収まることから、妥当な値と考えられる。

②　隣接する小長沢鎌蓋遺跡ＮＲ１内堆積物の花粉分析結果では、ＳＤ６内で得られた花粉化石群集と極めて類似した花粉化石群集が得られていた。また、小長沢鎌蓋遺跡で得られた年代値は奈良時代～平安時代を示すものであった。花粉化石群集の対比を尊重すると、小長沢Ⅱ遺跡で得られた年代値は、二次堆積や生物擾乱のために実際より古い年代値が得られた可能性も指摘できる。

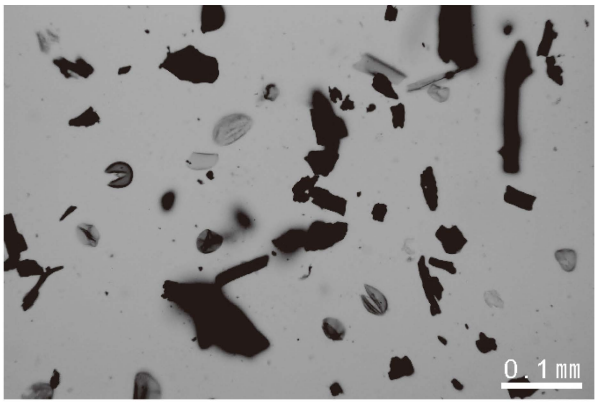
③　花粉分析結果を基に、Ⅰ、Ⅱ帯の局地花粉帯を設定した。更にⅡ帯をａ、ｂ亜帯に細分した。

④　花粉分析を基に、遺跡近辺から周辺の山地での古植生を推定した。特筆すべき事柄を、以下に示す。

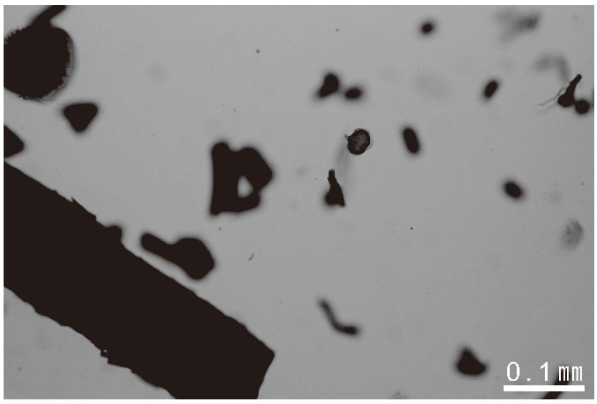
・Ⅱ帯の時期（弥生時代後期～古墳時代前期、あるいは奈良～平安時代）には、湿地環境であったが、Ⅰ帯の時期には開墾が進み稲作が行われた。

・Ⅱ帯の時期以降、山地斜面の谷沿いや遺跡の立地する氾濫原の内部にまでスギ林が広がっていたと考えられる。

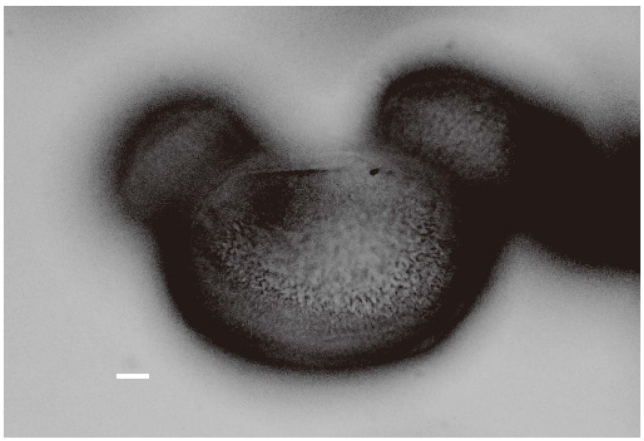
（文化財調査コンサルタント株式会社　渡辺正巳）



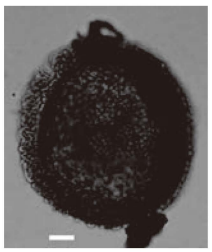

検出状況：No.6（ＳＤ６　２層）



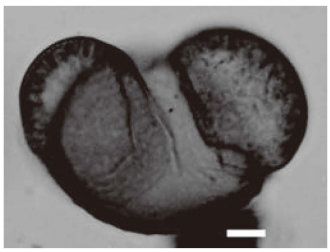

検出状況：No.7（ＳＤ６　３層）



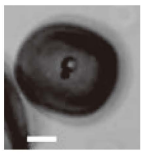
モミ属



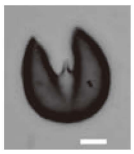
ツガ属



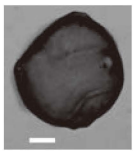
マツ属（複維管束亜属）



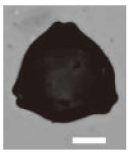
スギ属（極観）



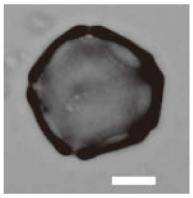
スギ属



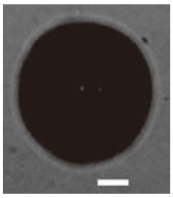
クマシデ属－アサダ属



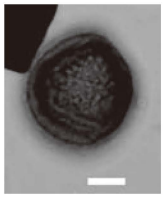
カバノキ属



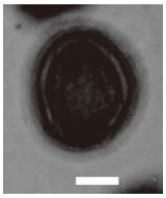
ハンノキ属



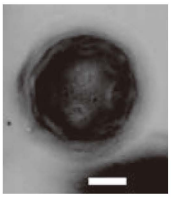
ブナ型



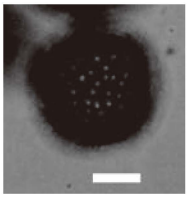
コナラ亜属



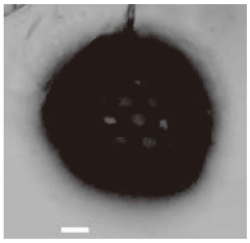
アカガシ亜属



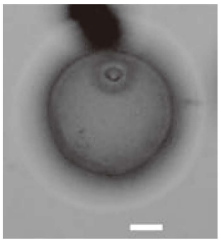
サジオモダカ属



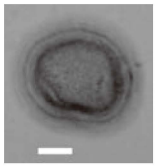
オモダカ属



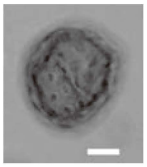
ウナギツカミ節
サナエタデ節



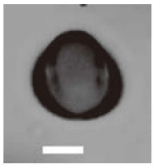
イネ科
（40ﾐｸﾛﾝ以上）



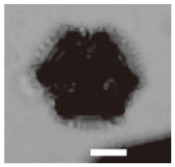
イネ科
（40ﾐｸﾛﾝ未満）



アカザ科
－ヒユ科



ヨモギ属



タンポポ亜科

**第 25 図　花粉分析写真**

記述のあるもの以外、スケールバーは 0.01㎜

# 第Ⅴ章　小長沢鎌蓋遺跡

## 1　概要　（第 26 図、図版１・13）

小長沢鎌蓋遺跡は、富山市教育委員会によって平成 30（2018）年度から令和３（2021）年度まで行われた県営ほ場整備事業に伴う試掘調査の結果、それまで小長沢Ⅱ遺跡の遺跡範囲にあった南側が切り離され、さらに３か所に分割されて令和３（2021）年度に新規登録となった遺跡である。登録時の遺跡種別は、弥生時代と古代の集落である。

令和４（2022）年度の調査地は、３か所に分割された遺跡範囲のなかで一番北にあたり、小長沢字鎌蓋。その西端で、南西から北東に走る宮下排水路の付け替え部分にあたる。調査区は排水路部分のため、幅約 2.4m、長さ約 22.8m、面積 56㎡と細長くなっている。遺跡の現況は水田で、西側は宮下排水路の土手状となっている。なお、土手状部分は、昭和 31（1956）～34（1959）年の宮下排水路建設時に攪乱が及んでいる。標高は、18mである。検出した遺構は、自然流路。出土遺物は土師器２、越中瀬戸１、肥前系陶磁器５点の計８点（66.70ｇ）である。

## 2　層序　（第 27 図、図版 14）

基本層序は、Ⅰ層からⅤ層の大きく５層に分けられる。Ⅰ層は現表土で、稲株の入る灰黄褐色シルト。Ⅱ層は水田の床土などの盛土で、オリーブ黒色シルト。Ⅲ層は地山で、遺構検出面となり、灰色砂質シルト。Ⅳ層も地山で、灰色粘質土。Ⅴ層も地山で、遺構検出面となり、オリーブ灰色粘質土。遺物包含層はなかった。地山のⅢ・Ⅳ層は調査区の南側のみにあり、それより北はⅡ層下にⅤ層となっている。遺構は、Ⅴ層直上で自然流路（ＮＲ１）を確認した。遺物はすべて表土からの出土であり、遺構からの出土はない。

## 3　遺構　（第 26・27 図、図版 14、第 16 表）

検出した遺構は、自然流路（ＮＲ１）である。

### （1）自然流路

**１号自然流路**（ＮＲ１、第 26・27 図、図版 14）

自然流路は、調査区の北側で検出した。南側の肩部は確認されたが、北側は調査区外となるため、川幅は不明である。深さは、検出面から最も深いところで１ｍに達する。なお、東に隣接する現況の宮下排水路の底面より深くなったため、崩落の危険性があり、西側の壁面沿いに入れたトレンチのみで底面まで掘削を行った。南側の肩部の方向からみると北西から南東方向で、おそらく南側の山田川から北側の平野部へ丘陵裾部を蛇行しながら流れていたものと考えられる。埋土は上位に６・７層（黒褐色シルト）が堆積し、そのあいだには青灰色の細かい砂を見ることができ、流水がうかがえる。中位は植物遺体（ピート）を多く含む８層（灰オリーブ色シルト）が堆積し、湿地状の堆積がうかがえる。下位は南側に植物遺体（ピート）を多く含む９層（暗褐色シルト）・10 層（オリーブ黒色シ

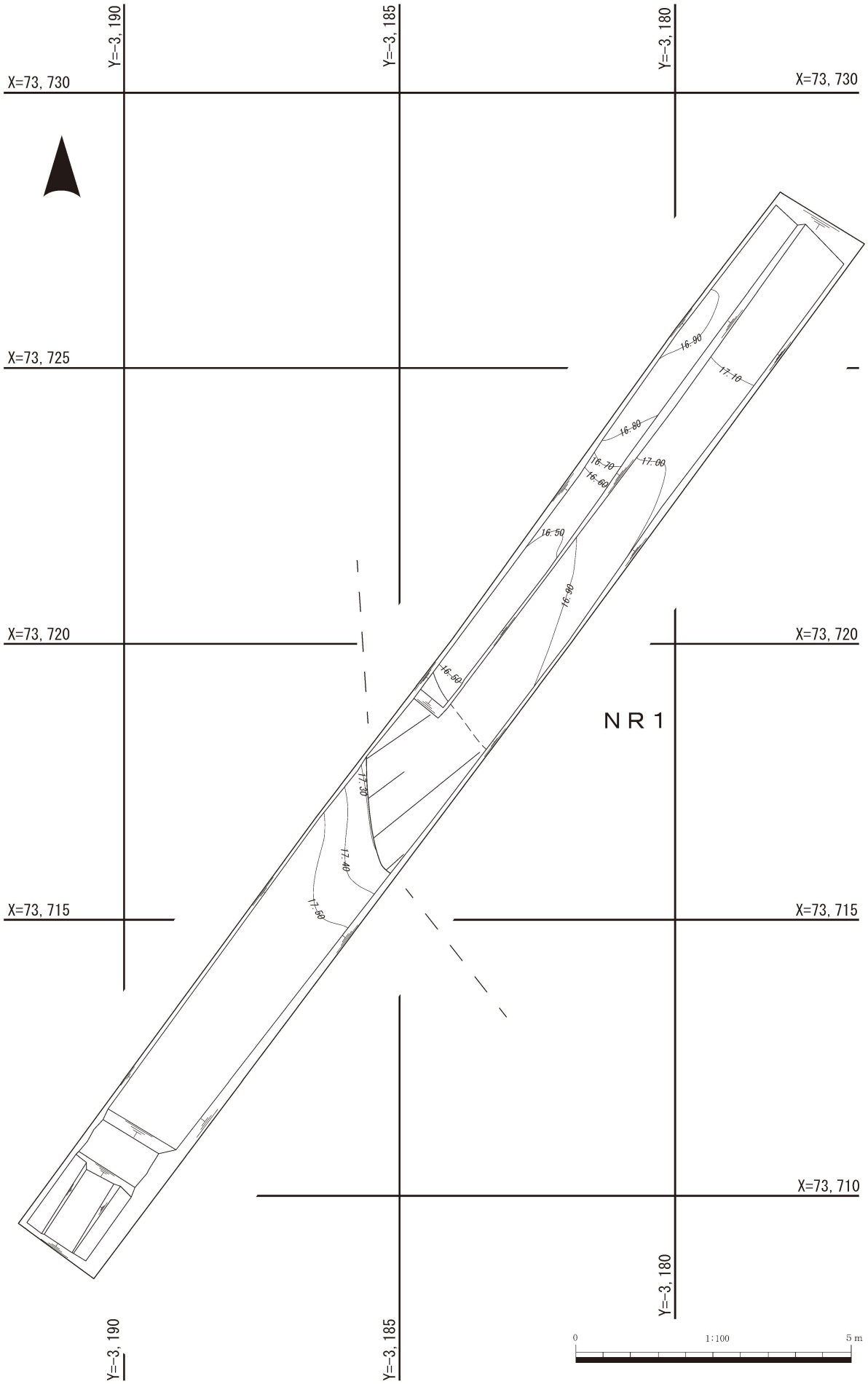
ルト）が堆積する部分と北側にも 10 層（オリーブ黒色シルト）が堆積する部分とがある。つまり、ＮＲ１とした自然流路は、元々南側と北側の２本からなり、いつかの時点で１本となって中位・上位層が堆積したと考えられる。なお、調査区内で北側の肩を検出できなかったが、北に向かって地山が高くなっていることを考えると、それほど遠くはないと考えられる。自然流路の埋没時期は、遺物が出土していないのではっきりしない。このため、流路埋土から土壌サンプルを採取し、環境復元のために花粉分析と年代推定にＡＭＳ年代測定を行った。その結果、湿地性の堆積環境と10 世紀を中心とする年代を得た。

## 4　遺物　（第 28 図、図版 15、第 17 表）

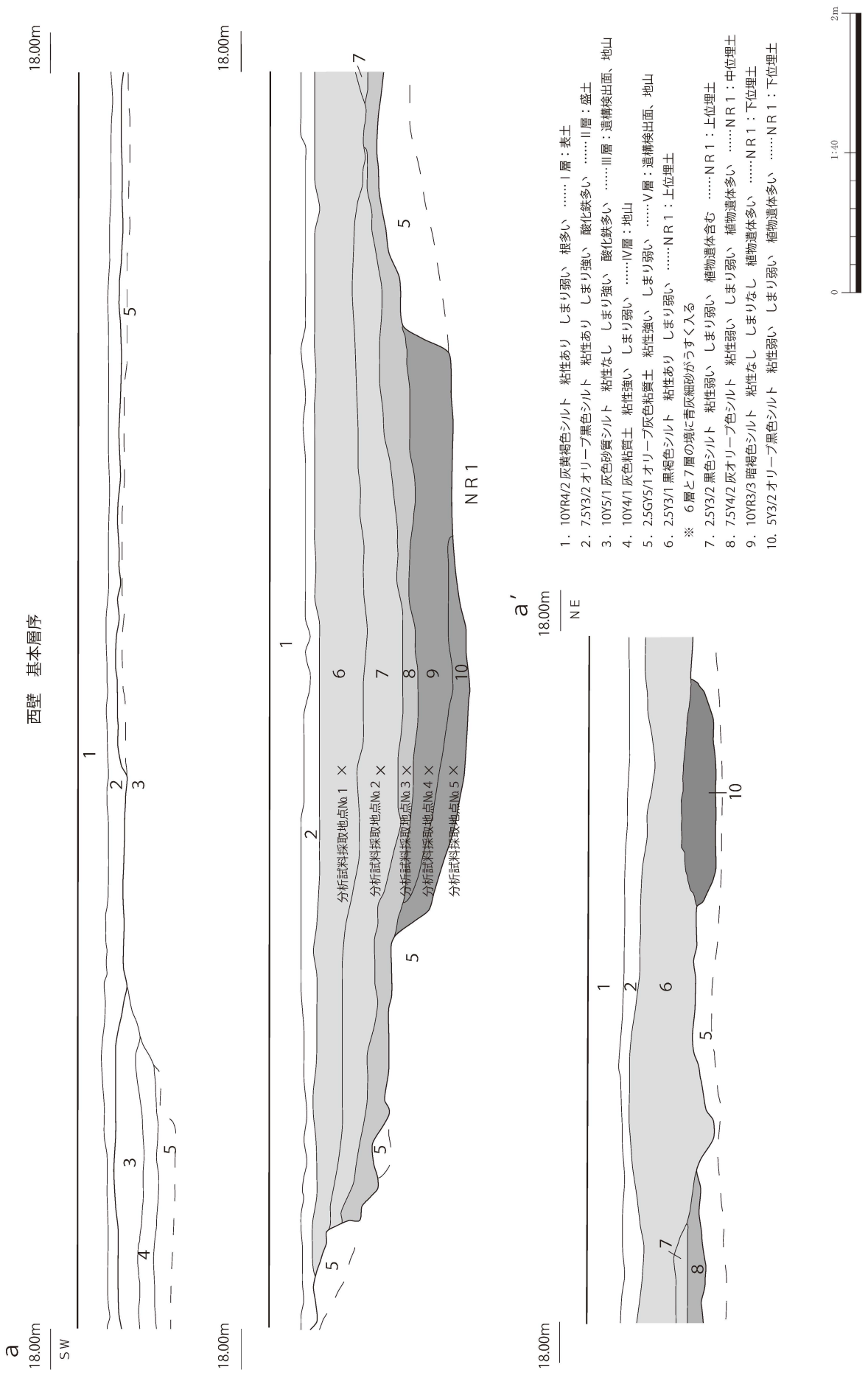
遺物は土師器２、越中瀬戸１、肥前系陶磁器５点の計８点（66.70ｇ）である。いずれも表土からの出土で、原位置を保っているとは言い難い。32・33 は土師器の小片。32 は胴部、33 は底部か。時期は不明。34 は越中瀬戸の擂鉢。内面にわずかに卸目と錆釉が残る。35～39 は肥前系陶磁器。35 は唐津の京焼風とみられる小片。36～39 は染付で伊万里とみられる。36 は内面に草花文を描く皿。37 は外面に草花文を描く碗。38 は波状の文様を重ねる波貝文とみられる碗。39 は鮮やかな色彩で草花文を描く碗。このほかに遺物はなかった。

## 5　小括

今回の調査では、自然流路とわずかな遺物の出土にとどまった。自然流路ＮＲ１の埋土より遺物の出土がなかったため、時期比定は難しかった。このため、埋土土壌の年代測定とあわせて花粉分析を行った。その結果、埋土下層の年代が 10 世紀を中心とする値を示し、自然流路ＮＲ１は平安時代以降に堆積したと考えられる。ただし、年代測定からは、埋土上位と下位とで大きな時期差はみられなかった。また、花粉分析からは湿地性の堆積が想定される。このことから、自然流路ＮＲ１は山田川の支流の一部とみられ、埋没後に水田となり今に至る様相が考えられる。遺跡の本体は、丘陵に近い西側か調査区南側の遺跡範囲２か所となるのだろう。　（町田賢一）

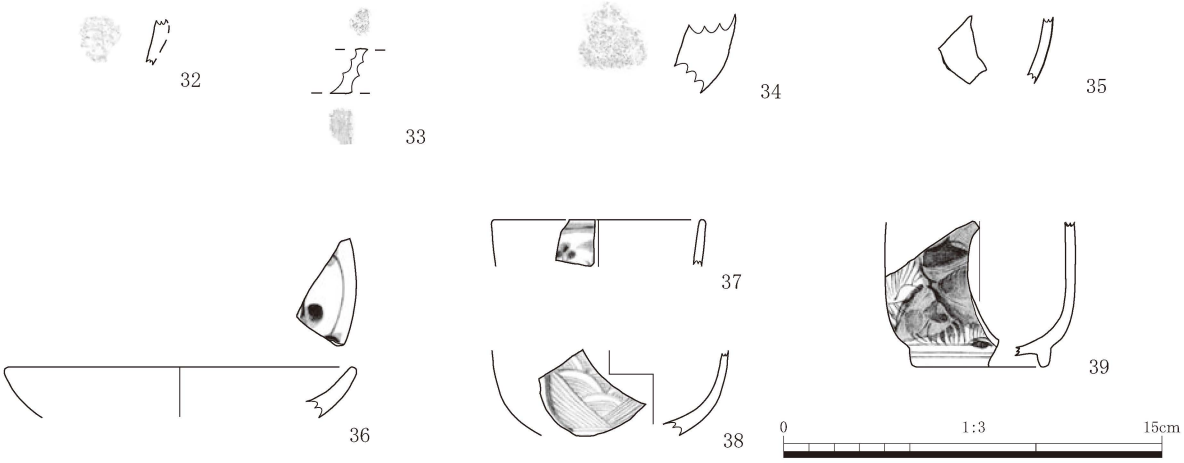



**第 26 図　小長沢鎌蓋遺跡　遺構全体図**（1：100）




**第 27 図　小長沢鎌蓋遺跡　基本層序・遺構断面図**（1：40）
基本層序　ＮＲ１

遺構外




**第 28 図　小長沢鎌蓋遺跡　遺物実測図（１：３）**
遺構外（32～39）

## 第 16 表　小長沢鎌蓋遺跡　遺構一覧

| 遺構番号 | 種類 | 規模（cm） | | | 時期 | 遺物 | 備考 | 挿図 | 写真 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | 長さ | 幅 | 深さ | | | | | |
| ＮＲ１ | 自然流路 | (200) | (1,400) | 108 | 古代以降 | - | 花粉分析・ＡＭＳ年代測定を実施 | 27 | 14 |

## 第 17 表　小長沢鎌蓋遺跡　遺物一覧

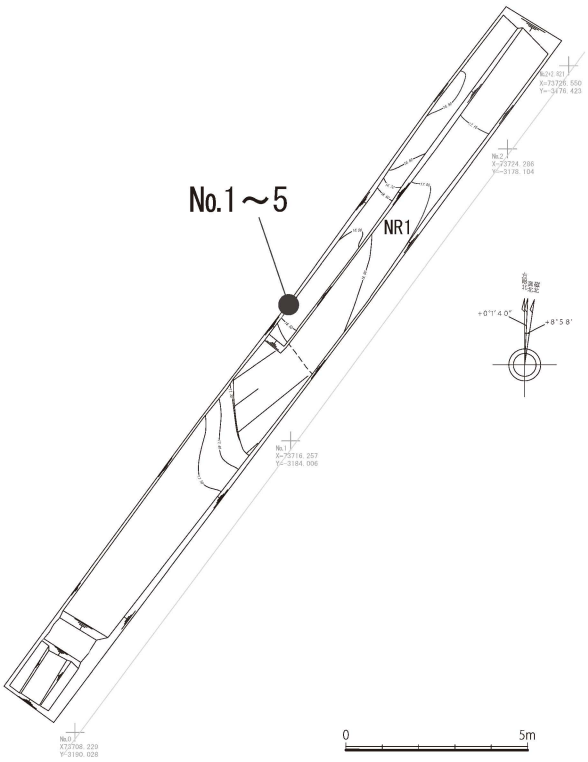
| 挿図 | 遺物番号 | 写真 | 出土地点 | | | 種類 | 器種 | | 法量（cm） | | | | 重さ（g） | 時期 | 調整 | | 色調 | | 胎土 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | グリッド | 遺構 | 層位 | | | | 口径 | 器高 | 底径 | 厚さ | | | 外面 | 内面 | 外面 | 内面 | | |
| 28 | 32 | 15 | №.1～2 | 遺構外 | 表土 | 土師器 | 不明 | 胴部 | - | - | - | 0.5 | 1.90 | 古墳～古代 | 剥離 | ナデ→摩耗 | 7.5YR7/4 にぶい橙色 | | 赤色粒、白色粒、海綿骨針 | |
| | 33 | | №.0～1 | | | | | 底部 | - | - | - | 0.4 | 5.15 | | ナデ | | 10YR7/2 にぶい黄橙色 | | 白色粒 | |
| | 34 | | | | | 越中瀬戸 | 擂鉢 | 底部 | - | - | - | 1.8 | 19.80 | 近世 | ナデ→摩耗 | 卸目→鉄釉→摩耗 | 5YR3/3 暗赤褐色 | | 赤色粒、白色粒 | |
| | 35 | | №.1～2 | | | 唐津 | 碗 | 胴部 | - | - | - | 0.5 | 1.74 | | 透明釉 | | 5Y6/2 灰オリーブ色 | | | |
| | 36 | | №.0～1 | | | 伊万里 | 皿 | 口縁部 | 14.0 | - | - | 0.6 | 7.15 | | 透明釉 | 染付（草花文）→透明釉 | 10YR7/2 にぶい黄橙色 | | | |
| | 37 | | | | | | 碗 | 口縁部 | 8.3 | - | - | 0.4 | 1.53 | | 染付（草花文）→透明釉 | 透明釉 | 2.5Y7/2 灰黄色 | | | |
| | 38 | | №.0～1 | | | | | 胴部 | - | - | - | 0.5 | 9.61 | | 染付（波貝文？）→透明釉 | 染付→透明釉 | 7.5YR6/4 にぶい橙色 | | | |
| | 39 | | №.1～2 | | | | | 底部 | - | - | | 0.4 | 19.82 | | 染付（草花文？）→透明釉 | 透明釉 | 7.5YR7/3 にぶい橙色 | | | |

# 6　自然科学分析

## はじめに

小長沢鎌蓋遺跡は富山市西部（旧婦負郡婦中町小長沢地区）に位置し、井田川流域平野（深井，1979）西部の後背湿地上に立地する。

公益財団法人富山県文化振興財団（以下、財団と略称）が小長沢鎌蓋遺跡の発掘調査で検出した自然流路（ＮＲ１）を対象にＮＲ１の機能していた時期を推定し、当時の遺跡内及び周辺地域での古植生の変遷を明らかにする目的で委託し、文化財調査コンサルタント株式会社が受託・実施した。




第 29 図　試料採取地点（ＮＲ１）

## （1）　分析試料について

調査区平面図（第 29 図）中に試料採取地点を北西壁断面図（第 30 図）中に各試料の採取層準を示す。図中の①～⑤がおおよその試料採取位置で、①～⑤で花粉分析試料、①、③、⑤で年代測定試料が採取されていた。第 18 表に年代測定試料一覧を、第 31 図に試料の状況写真を示す（試料一覧には、年代測定前処理法、年代測定結果も併記した）。

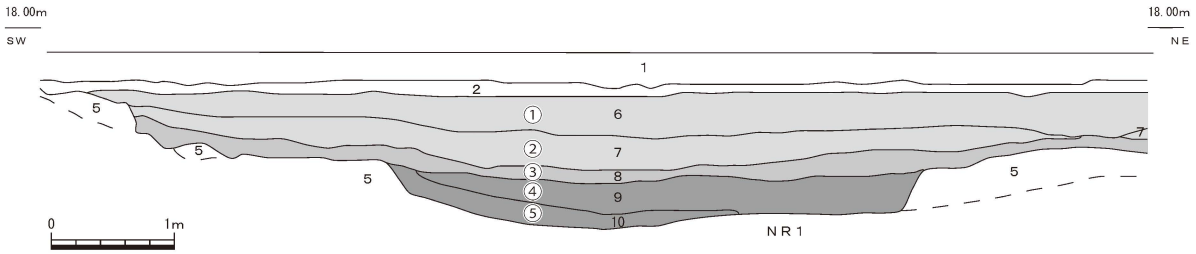
## （2）　分析方法

### A　微化石概査方法

花粉分析用プレパラート及び珪藻分析用プレパラートを観察し、花粉（胞子）、植物片、炭片、珪藻、火山ガラス、植物珪酸体の含有状況を概観し、５段階で示した。

### B　花粉分析方法

渡辺（2010）に従って実施した。花粉化石の観察・同定は、光学顕微鏡により通常 400 倍で、必要に応じ 600 倍あるいは 1000 倍を用いて実施した。原則的に木本花粉総数が 200 粒以上になるまで同



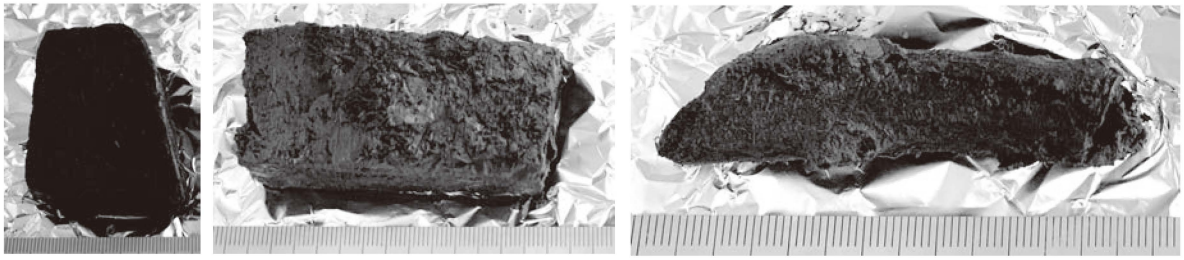

1．10YR4/2 灰黄褐色シルト　粘性あり　しまり弱い　根多い　……Ⅰ層：表土
2．7.5Y3/2 オリーブ黒色シルト　粘性あり　しまり強い　酸化鉄多い　……Ⅱ層：盛土
5．2.5GY5/1 オリーブ灰色粘質土　粘性強い　しまり弱い　……Ⅴ層：遺構検出面、地山
6．2.5Y3/1 黒褐色シルト　粘性あり　しまり弱い　……ＮＲ１：上位埋土
※　６層と７層の境に青灰細砂がうすく入る
7．2.5Y3/2 黒色シルト　粘性弱い　しまり弱い　植物遺体含む　……ＮＲ１：上位埋土
8．7.5Y4/2 灰オリーブ色シルト　粘性弱い　しまり弱い　植物遺体多い　……ＮＲ１：中位埋土
9．10YR3/3 暗褐色シルト　粘性なし　しまりなし　植物遺体多い　……ＮＲ１：下位埋土
10．5Y3/2 オリーブ黒色シルト　粘性弱い　しまり弱い　植物遺体多い　……ＮＲ１：下位埋土

第 30 図　試料採取位置（ＮＲ１）

**第 18 表　年代測定試料一覧**

| 試料 | | | | | | 前処理 | 測定番号 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 試料No. | 遺跡名 | 出土位置<br>(遺構ほか) | 状況 | 重量(g) | 推定時期 | | |
| 1 | 小長沢鎌蓋 | NR1<br>6 層 | 泥炭 | 87.869 | － | 湿式篩分：106 μm 以下<br>酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸:1.2mol/L,<br>水酸化ナトリウム:1.0mol/L,塩酸:1.2mol/L) | PLD-50587 |
| 3 | 小長沢鎌蓋 | NR1<br>8 層 | 泥炭 | 62.6 | － | 湿式篩分：106 μm 以下<br>酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸:1.2mol/L,<br>水酸化ナトリウム:1.0mol/L,塩酸:1.2mol/L) | PLD-50588 |
| 5 | 小長沢鎌蓋 | NR1<br>10 層 | 木片(枝片？) | 9.144 | － | 湿式篩分：106 μm 以下<br>酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸:1.2mol/L,<br>水酸化ナトリウム:1.0mol/L,塩酸:1.2mol/L) | PLD-50589 |

| 試料No. | δ $^{13}$C<br>(‰) | δ $^{13}$C 補正無年代<br>(yrBP±1σ) | 暦年較正用年代<br>(yrBP±1σ) | $^{14}$C 年代<br>(yrBP±1σ) | $^{14}$C 年代を暦年代に較正した年代範囲 | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | | | 1σ 暦年代範囲 | 2σ 暦年代範囲 |
| 1 | -27.20±0.39 | 1181±20 | 1144±20 | 1145±20 | 883- 900 cal AD (18.0%)<br>918- 960 cal AD (46.1%)<br>966- 972 cal AD ( 4.1%) | 773- 786 cal AD ( 4.7%)<br>831- 852 cal AD ( 4.8%)<br>874- 980 cal AD (86.0%) |
| 3 | -25.91±0.18 | 1415±20 | 1399±20 | 1400±20 | 610- 617 cal AD (10.5%)<br>640- 659 cal AD (57.8%) | 605- 663 cal AD (95.4%) |
| 5 | -29.48±0.20 | 1210±20 | 1136±20 | 1135±20 | 887- 900 cal AD (12.7%)<br>918- 973 cal AD (55.6%) | 774- 784 cal AD ( 2.3%)<br>878- 990 cal AD (93.2%) |



試料No.1　　試料No.3　　試料No.5

**第 31 図　年代測定試料**

定を行い、同時に検出される草本・胞子化石の同定も行った。また中村（1974）に従ってイネ科花粉を、イネを含む可能性が高い大型のイネ科（40 ミクロン以上）と、イネを含む可能性が低い小型のイネ科（40 ミクロン未満）に細分した。

### C　AMS年代測定方法

塩酸による酸洗浄の後に水酸化ナトリウムによるアルカリ処理、更に再度酸洗浄を行った。この後、二酸化炭素を生成・精製し、グラファイトに調整した。$^{14}$C濃度の測定にはタンデム型イオン加速器を用い、半減期：5,568年で年代計算を行った。暦年代較正にはOxCal ver. 4.4（Bronk Ramsey, 2009）を利用し、INTCAL20（Reymer et al., 2020）を用いた。

## （3）分析結果

### A　微化石概査結果

花粉分析用プレパラート及び花粉分析処理残渣を用いた微化石の概査結果は、第 19 表のとおりである（植物片、微粒炭は花粉分析用プレパラートを観察した。珪藻、植物珪酸体、火山ガラスは、花

**第 19 表　微化石概査結果**

| 試料 No. | 遺跡 | 遺構 | 地層 | 花粉 | 微粒炭 | 植物片 | 珪藻 | 植物珪酸体 | 火山ガラス |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 小長沢鎌蓋 | NR1 | 6 層 | ◎ | ○ | ○ | △×片 | ○ | △ |
| 2 | | | 7 層 | ○ | ○ | ◎ | △×片 | ○ | △ |
| 3 | | | 8 層 | ◎ | ◎ | ○ | ◎ | △ | △× |
| 4 | | | 9 層 | ○ | △ | ○ | ○片 | △× | △× |
| 5 | | | 10 層 | ◎ | △ | ○ | ◎ | △ | △× |

凡例 ◎　：十分な数量が検出できる　○　：少ないが検出できる　△　：非常に少ない
△×　：極めてまれに検出できる　×　：検出できない

粉分析処理の残渣を観察した)。

全ての試料から統計処理に十分な量が検出された。微粒炭、植物珪酸体は下位の試料でやや少なく、珪藻は下位の試料で多い傾向にあった。植物片は押しなべてやや多かった。また、火山ガラスはやや少なかった。

**B　花粉分析結果**

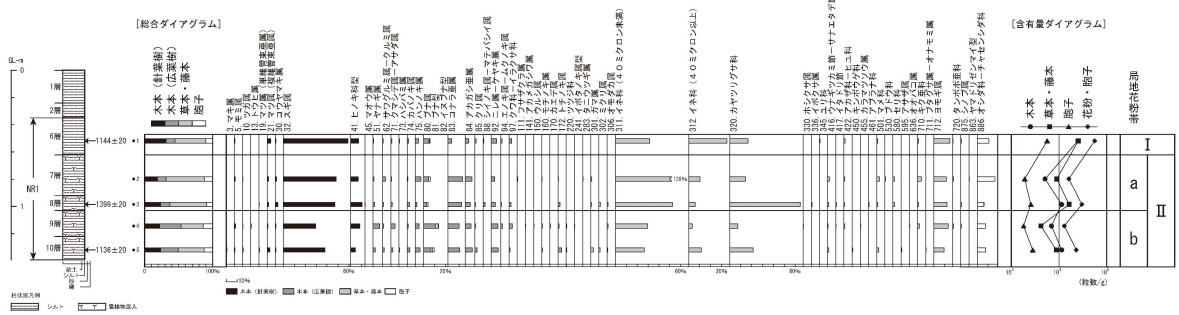
分析結果を第 32 図の花粉ダイアグラム及び、第 20 表の花粉化石組成表に示す。

花粉粒数ダイアグラムでは、分類ごとに百分率（百分率の算出には、木本花粉総数を基数にしている。）を、分類群ごとに異なるハッチのスペクトルで表している。このほか、[総合ダイアグラム]として分類群ごとの割合を示したほか、[含有量ダイアグラム]として分類群ごとに含有量（湿潤試料 1 g 中の粒数）の変化を示している。また中村（1974）に従ってイネ科花粉を、イネを含む可能性が高い大型のイネ科（40 ミクロン以上）とイネを含む可能性が低い小型のイネ科（40 ミクロン未満）に細分した。

得られた花粉・胞子群集の特徴は、下記の通りであった。

木本花粉ではスギ属が高率を占め、更に増加傾向を示す。これに対しブナ属（ブナ型、イヌブナ型を含む)、コナラ亜属は下部では 10%程度とスギ属に次ぐが、減少傾向を示し、最上部では数%まで減少する。

草本花粉はバラツキが多いが、イネ科（40 ミクロン未満）が高率を示す。また、最上部ではイネ科（40 ミクロン以上）が急増している。




**第 32 図　ＮＲ１の花粉ダイアグラム**

## C　AMS年代測定結果

年代測定結果を第18表に示す。また、OxCal ver. 4.4（Ramsey, 2009）による各試料の暦年較正図を第33図に示す。

第18表には、$\delta^{13}$C値と４種類の年代を示している。

$\delta^{13}$C補正無年代は、従来は実年代として用いられてきた値である。$^{14}$C濃度が環境、時代にかかわらず常に一定であるという仮定の下にリビーの半減期（5,568年）を用いて計算した値で、西暦1950年からさかのぼった年代値で示してある（$\delta^{13}$C補正を行っていない値であり、通常算出値を５年単位で丸めて示される。ここでは算出値をそのまま示す）。

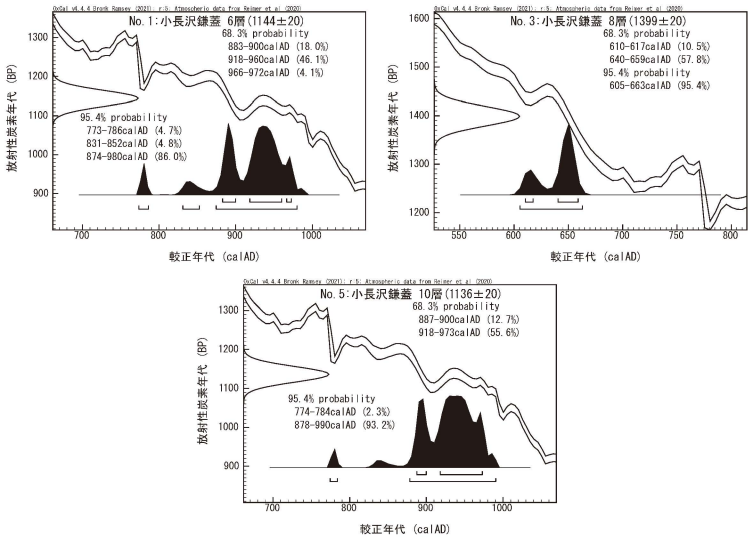
$^{14}$C年代は、$^{14}$C濃度が環境により変動することから$\delta^{13}$Cを測定し、$\delta^{13}$C＝-25‰に規格化した$^{14}$C濃度を求め、リビーの半減期（5568年）を用いて年代値を算出したもの（暦年較正用年代）を５年単位で丸めた値で、西暦1950年からさかのぼった年代値で示してある。

一方暦年較正年代は、時代（時間）とともにランダムに変化している大気中二酸化炭素の$^{14}$C濃度を、樹木の年輪や海底堆積物のしま状粘土、サンゴの年輪から明ら

### 第20表　花粉化石組成表

| 遺跡 | | | 小長沢鎌蓋遺跡 | | | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 遺構 | | | NR1 | | | | | | | | | |
| 地層 | | | 6層 | | 7層 | | 8層 | | 9層 | | 10層 | |
| | | 試料No. | 1 | | 2 | | 3 | | 4 | | 5 | |
| 3 | *Podocarpus* | マキ属 | | | 1 | 0.4% | | | | | 1 | 0.5% |
| 5 | *Abies* | モミ属 | 1 | 0.5% | 2 | 0.9% | | | 2 | 0.9% | 1 | 0.5% |
| 10 | *Tsuga* | ツガ属 | | | 1 | 0.4% | | | 1 | 0.4% | 1 | 0.5% |
| 13 | *Picea* | トウヒ属 | | | | | | | 1 | 0.4% | | |
| 19 | *Pinus (Haploxylon)* | マツ属（単維管束亜属） | | | | | 1 | 0.4% | | | 1 | 0.5% |
| 21 | *Pinus (Diploxylon)* | マツ属（複維管束亜属） | 7 | 3.4% | 3 | 1.3% | 3 | 1.3% | 2 | 0.9% | 5 | 2.4% |
| 30 | *Sciadopitys* | コウヤマキ属 | 1 | 0.5% | 3 | 1.3% | 5 | 2.2% | 1 | 0.4% | 1 | 0.5% |
| 32 | *Cryptomeria* | スギ属 | 120 | 59.1% | 112 | 48.3% | 106 | 47.1% | 67 | 29.5% | 79 | 38.2% |
| 41 | *Cupressaceae* type | ヒノキ科型 | 15 | 7.4% | 16 | 6.9% | 24 | 10.7% | 19 | 8.4% | 9 | 4.3% |
| 45 | *Ephedra* | マオウ属 | | | | | 1 | 0.4% | | | | |
| 51 | *Salix* | ヤナギ属 | 1 | 0.5% | 2 | 0.9% | 3 | 1.3% | 14 | 6.2% | 4 | 1.9% |
| 62 | *Pterocarya-Juglans* | サワグルミ属－クルミ属 | 1 | 0.5% | 6 | 2.6% | 2 | 0.9% | 2 | 0.9% | 3 | 1.4% |
| 71 | *Carpinus-Ostrya* | クマシデ属－アサダ属 | 2 | 1.0% | 2 | 0.9% | 3 | 1.3% | 9 | 4.0% | 4 | 1.9% |
| 73 | *Corylus* | ハシバミ属 | 1 | 0.5% | | | | | | | 1 | 0.5% |
| 74 | *Betula* | カバノキ属 | 3 | 1.5% | 2 | 0.9% | 5 | 2.2% | 2 | 0.9% | 5 | 2.4% |
| 75 | *Alnus* | ハンノキ属 | 6 | 3.0% | 12 | 5.2% | 3 | 1.3% | 8 | 3.5% | 9 | 4.3% |
| 80 | *Fagus* | ブナ属 | 10 | 4.9% | 11 | 4.7% | 6 | 2.7% | 25 | 11.0% | 14 | 6.8% |
| 81 | *Fagus crenata* type | ブナ型 | 1 | 0.5% | 3 | 1.3% | 3 | 1.3% | 5 | 2.2% | 3 | 1.4% |
| 82 | *Fagus japonica* type | イヌブナ型 | 1 | 0.5% | | | | | 1 | 0.4% | 3 | 1.4% |
| 83 | *Quercus* | コナラ亜属 | 7 | 3.4% | 31 | 13.4% | 28 | 12.4% | 23 | 10.1% | 22 | 10.6% |
| 84 | *Cyclobalanopsis* | アカガシ亜属 | 6 | 3.0% | 14 | 6.0% | 10 | 4.4% | 12 | 5.3% | 13 | 6.3% |
| 85 | *Castanea* | クリ属 | 2 | 1.0% | | | 1 | 0.4% | 1 | 0.4% | 4 | 1.9% |
| 88 | *Castanopsis-Pasania* | シイノキ属－マテバシイ属 | 1 | 0.5% | | | 4 | 1.8% | | | | |
| 92 | *Ulmus-Zelkova* | ニレ属－ケヤキ属 | 10 | 4.9% | 7 | 3.0% | 8 | 3.6% | 14 | 6.2% | 13 | 6.3% |
| 94 | *Celtis-Aphananthe* | エノキ属－ムクノキ属 | 2 | 1.0% | | | 1 | 0.4% | 3 | 1.3% | | |
| 97 | Moraceae-Urticaceae | クワ科－イラクサ科 | 5 | 2.5% | | | 4 | 1.8% | 7 | 3.1% | 2 | 1.0% |
| 111 | *Euptelea* | フサザクラ属 | | | 1 | 0.4% | | | | | | |
| 141 | *Mallotus* | アカメガシワ属 | | | | | | | 1 | 0.4% | | |
| 150 | *Rhus* | ウルシ属 | | | | | | | 1 | 0.4% | | |
| 160 | *Ilex* | モチノキ属 | | | 1 | 0.4% | | | 1 | 0.4% | 1 | 0.5% |
| 170 | *Acer* | カエデ属 | | | | | | | 1 | 0.4% | | |
| 172 | *Aesculus* | トチノキ属 | | | 1 | 0.4% | 4 | 1.8% | 2 | 0.9% | 7 | 3.4% |
| 220 | Ericaceae | ツツジ科 | | | | | | | 1 | 0.4% | 1 | 0.5% |
| 241 | *Ligustrum* type | イボタノキ属型 | | | | | | | 1 | 0.4% | | |
| 283 | *Weigela* | タニウツギ属 | | | 1 | 0.4% | | | | | | |
| 301 | *Typha* | ガマ属 | | | 2 | 0.9% | 1 | 0.4% | | | 5 | 2.4% |
| 302 | *Sparganium* | ミクリ属 | | | | | 3 | 1.3% | | | 2 | 1.0% |
| 306 | *Sagittaria* | オモダカ属 | | | | | 2 | 0.9% | 2 | 0.9% | 1 | 0.5% |
| 311 | Gramineae(<40) | イネ科（40ミクロン未満） | 64 | 31.5% | 298 | 128.4% | 118 | 52.4% | 67 | 29.5% | 55 | 26.6% |
| 312 | Gramineae(>40) | イネ科（40ミクロン以上） | 71 | 35.0% | 24 | 10.3% | 13 | 5.8% | 7 | 3.1% | 24 | 11.6% |
| 320 | Cyperaceae | カヤツリグサ科 | 34 | 16.7% | 34 | 14.7% | 146 | 64.9% | 17 | 7.5% | 45 | 21.7% |
| 330 | Eriocaulon | ホシクサ属 | | | | | | | 1 | 0.4% | | |
| 336 | *Aneilema* | イボクサ属 | | | | | 2 | 0.9% | | | | |
| 345 | Liliaceae | ユリ科 | 1 | 0.5% | | | | | | | | |
| 416 | *Echinocaulon-Persicaria* | ウナギツカミ節－サナエタデ節 | | | 4 | 1.7% | 2 | 0.9% | 1 | 0.4% | 2 | 1.0% |
| 417 | *Reynoutria* | イタドリ節 | | | | | 1 | 0.4% | 1 | 0.4% | | |
| 422 | Chenopodiaceae-Amaranthaceae | アカザ科－ヒユ科 | 2 | 1.0% | 2 | 0.9% | 1 | 0.4% | 2 | 0.9% | | |
| 450 | Ranunculaceae | キンポウゲ科 | | | | | | | | | 1 | 0.5% |
| 455 | *Thalectrum* | カラマツソウ属 | | | | | | | 1 | 0.4% | | |
| 461 | Cruciferae | アブラナ科 | | | | | 1 | 0.4% | | | | |
| 501 | Leguminosae | マメ科 | 2 | 1.0% | 6 | 2.6% | 2 | 0.9% | | | 4 | 1.9% |
| 530 | Vitaceae | ブドウ科 | | | 1 | 0.4% | | | | | | |
| 580 | Umbelliferae | セリ科 | | | 3 | 1.3% | 3 | 1.3% | | | | |
| 595 | *Nymphoides* | アサザ属 | | | | | | | | | 1 | 0.5% |
| 636 | *Plantago* | オオバコ属 | | | | | | | 1 | 0.4% | | |
| 710 | *Carduoideae* | キク亜科 | 2 | 1.0% | 8 | 3.4% | 2 | 0.9% | 4 | 1.8% | | |
| 711 | *Ambrosia-Xanthium* | ブタクサ属－オナモミ属 | | | | | | | | | 1 | 0.5% |
| 712 | *Artemisia* | ヨモギ属 | 30 | 14.8% | 27 | 11.6% | 27 | 12.0% | 30 | 13.2% | 19 | 9.2% |
| 720 | Cichorioideae | タンポポ亜科 | 1 | 0.5% | 2 | 0.9% | | | 2 | 0.9% | | |
| 863 | *Osmunda Cinnamomea* type | ヤマドリゼンマイ型 | | | 1 | 0.4% | | | | | | |
| 875 | *Davallia* | シノブ属 | 1 | 0.5% | | | 2 | 0.9% | 1 | 0.4% | | |
| 886 | Aspid.-Asple. | オシダ科－チャセンシダ科 | 22 | 10.8% | 38 | 16.4% | 14 | 6.2% | 17 | 7.5% | 16 | 7.7% |
| 898 | MONOLATE-TYPE-SPORE | 単条溝胞子 | 12 | 5.9% | 29 | 12.5% | 16 | 7.1% | 19 | 8.4% | 10 | 4.8% |
| 899 | TRILATE-TYPE-SPORE | 三条溝胞子 | 11 | 5.4% | 19 | 8.2% | 19 | 8.4% | 22 | 9.7% | 25 | 12.1% |
| 木本（針葉樹） | | | 144 | 31.6% | 138 | 18.9% | 140 | 23.3% | 93 | 22.0% | 98 | 23.4% |
| 木本（広葉樹） | | | 59 | 12.9% | 94 | 12.9% | 85 | 14.2% | 134 | 31.8% | 109 | 26.1% |
| 草本・藤本 | | | 207 | 45.4% | 411 | 56.3% | 324 | 54.0% | 136 | 32.2% | 160 | 38.3% |
| 胞子 | | | 46 | 10.1% | 87 | 11.9% | 51 | 8.5% | 59 | 14.0% | 51 | 12.2% |
| 総数 | | | 456 | | 730 | | 600 | | 422 | | 418 | |
| 含有量(粒数/g) | | | 55,724 | | 15,994 | | 30,124 | | 12,891 | | 22,962 | |

左よりカウント粒数、百分率




第33図　暦年較正結果

かにして得られた暦年代較正データ IntCal20 (Reimer et al., 2020)を用いて較正したものである。較正には OxCal ver. 4.4 (Ramsey, 2009)を用いている。また、OxCal での較正計算には暦年較正用年代を用いている。

### （４）局地花粉帯の設定

花粉分析結果を基にⅠ、Ⅱ帯の局地花粉帯を設定した。以下に各花粉帯の特徴を下位から示す。

**Ⅱ帯（試料№５～２）**

スギ属が 30～50％程度と高率で、増加傾向を示す。下部（試料№５、４）では木本花粉の割合が 50％と高く、検出分類群も多い。上部（試料№３、２）では木本花粉の割合が 40～30％程度へ下がり、草本・藤本花粉が 50％を超えるようになる。木本花粉の検出分類群が下位に比べ減少し、多くの分類群で出現率も低下する。草本・藤本花粉では、イネ科（40 ミクロン未満）、カヤツリグサ科が著しく増加する。このようなことから、下部をｂ亜帯、上部をａ亜帯とした。

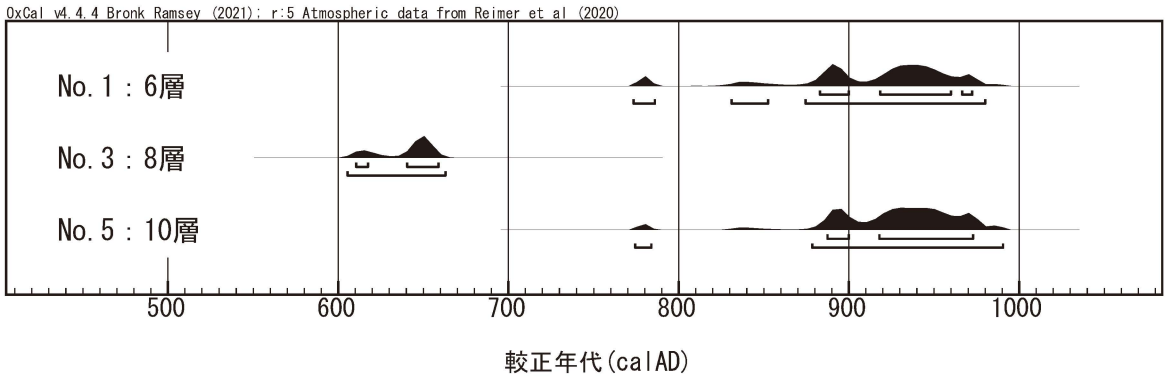
**Ⅰ帯（試料№１）**

試料№１では、スギ属が更に増加し 59％となる。伴ってその他の分類群の出現率は低下するが、例外的にマツ属（複維管束亜属）は増加する。草本・藤本花粉ではイネ科（40 ミクロン以上）の増加が特徴的である。

### （５）年代測定結果と局地花粉帯、既知の花粉分析結果との関係

第 34 図に、年代測定結果をまとめた。この図から明らかなように、８層（試料№３）で年代値の逆転が認められる。３試料の内、10 層（試料№５）は小径の「枝」であり、年代測定試料としては条件の良いものであった。一方、他の２試料は「泥炭」であった。「泥炭」を対象とした年代測定では、生物擾乱などのため実年代より古い年代値が得られることがあることから、10 層の年代値が真の値であり、少なくとも８層（試料№３）では実施より古い年代値が得られたと考えられる。したがって、10 層（試料№５）が平安時代に堆積したもので、上位の２層はこれ以降に堆積したと考えられる。

射水丘陵性山地（深井，1978）を挟んで、小長沢鎌蓋遺跡の北西６km に位置する南太閤山Ⅰ遺跡では、弥生時代後期～古墳時代中期の年代がえられた堆積物（ただし、1.6m 下位からもほぼ同年代の年代測定値が得られている）。また、昭和 59（1984）年富山県教育委員会調査時には、同層準と考えられる層から古墳時代中期～奈良時代の遺物が出土（岸本他 1985）し、令和２（2020）年財団調査時には花粉分析が実施されている（渡辺 2023）。ここではスギ属の増加傾向とコナラ亜属、ブナ属（ブナ型、イヌブナ型含む）の安定した出現で特徴付けられた局地花粉帯（Ⅰ帯）が設定されていた。一方、南太閤山Ⅰ遺跡では今回の分析結果に比べスギ属が低率で、コナラ亜属、ブナ属は高率を示している。両遺跡は丘陵を挟んだ地点であるが、南太閤山Ⅰ遺跡のⅠ帯と小長沢鎌蓋遺跡のⅡ帯が連続しているように観える。ただし、後述のようにスギが局所的に生育していた可能性も指摘され、前述のような現象が見かけ上の現象である可能性も否定できない。南太閤山Ⅰ遺跡との比較からは、10 層で得られた平安時代の年代値が真の年代値に近く、今回の分析結果は平安時代以降の植生を反映したものと考えられる。




**第34図　暦年較正年代一覧**

## （6）植生復元

花粉分析結果を基に局地花粉帯ごとに植生復元を行う。

**Ⅱ帯（試料№.5～2）**

遺跡近辺には湿地が広がり、アシやマコモなどのイネ科草本やハリイ類、ホタルイ類などのカヤツリグサ科、ガマ類、ミクリ類、オモダカ類、ホシクサ類、イボクサ類、セリ類などが生育していたと考えられる。また、やや乾燥した場所にはヨモギ類などのキク類も生育していたと考えられる。

また、高率で出現するスギ属は、遺跡近辺に生育していたものと考えられ、射水丘陵性山地斜面の谷沿いや遺跡の立地する氾濫原の内部にまでスギ林が広がっていた可能性が指摘できる。また、射水丘陵性山地から南に続く山地の低所では照葉樹林が広がる一方、山地高所にはブナ林が分布し、更に高所にはトウヒやコメツガなどが亜高山帯林を成していたものと考えられる。また、コナラ亜属の代表的な種には冷温帯に分布するミズナラと温帯に広く分布するコナラがある。ｂ亜帯～ａ亜帯でのブナ属減少と相関を示さないことから、ａ亜帯で検出されたコナラ亜属の多くは射水丘陵性山地に分布した薪炭林を構成したコナラに由来した可能性が指摘できる。

**Ⅰ帯（試料№.1）**

イネ科（40ミクロン以上）が急増することから、周辺地域の開墾が始まり稲作が行われたと考えられる。一方スギ属はⅡ帯から更に増加する。引き続き遺跡近辺に生育していたものと考えられ、Ⅱ帯同様に射水丘陵性山地斜面の谷沿いや遺跡の立地する氾濫原の内部にまでスギ林が広がっていた可能性が指摘できる。

## まとめ

令和５（2023）年度に行った小長沢鎌蓋遺跡の発掘調査において採取された試料の花粉分析及びＡＭＳ年代測定を行った結果、以下の事柄が明らかになった。

① ＡＭＳ年代測定値として、10層（試料№.5）から1,135±20yrBP（暦年較正年代：774～990 calAD：2σ　奈良～平安時代）、８層（試料№.3）から1,400±20yrBP（暦年較正年代：605～663 calAD：2σ　飛鳥時代）、６層（試料№.1）から1,145±20yrBP（暦年較正年代：773～980 calAD：2σ　奈良～平安時代）の年代値を得た。試料間で逆転が認められたが、試料の性質から10層（試料№.5）がより正確な値であり、８層（試料№.3）では、生物擾乱などにより古い年代値が得られたものと考えられる。

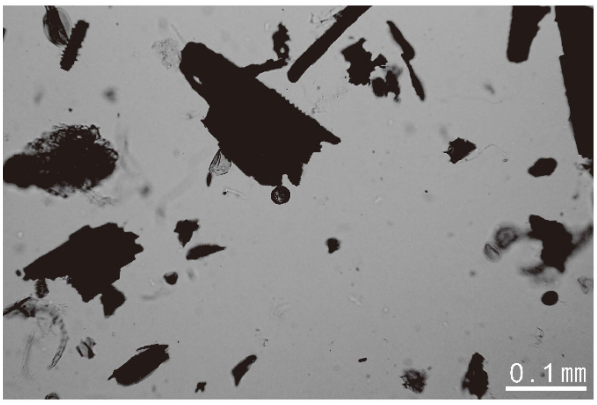
② 花粉分析結果を基に、Ⅰ、Ⅱ帯の局地花粉帯を設定した。更にⅡ帯をａ、ｂ亜帯に細分した。

③ 花粉分析を基に、遺跡近辺から周辺の山地での古植生を推定した。特筆すべき事柄を以下に示す。

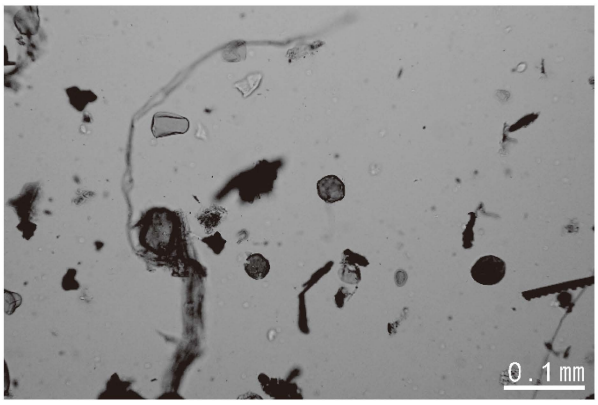
・Ⅱ帯の時期（奈良～平安時代）には湿地環境であったが、Ⅰ帯の時期には開墾が進み稲作が行われた。

・Ⅱ帯の時期以降、山地斜面の谷沿いや遺跡の立地する氾濫原の内部にまでスギ林が広がっていたと考えられる。

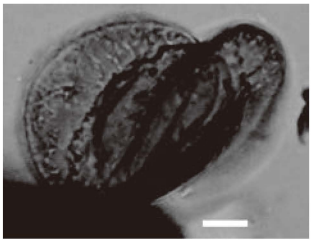
（文化財調査コンサルタント株式会社　渡辺正巳）



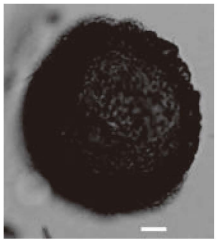

検出状況：No.3（ＮＲ１　8層）



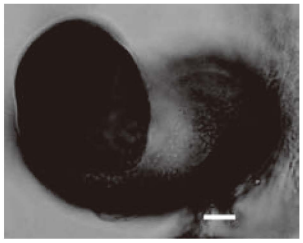

検出状況：No.5（ＮＲ１　10層）



マキ属

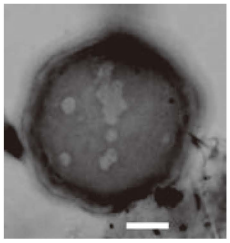


ツガ属

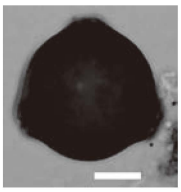


マツ属（複維管束亜属）

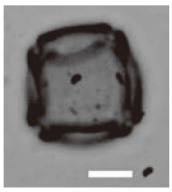
マオウ属



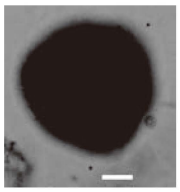
サワグルミ属
－クルミ属



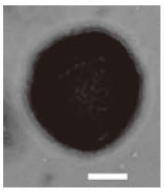
カバノキ属



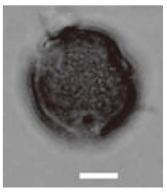
ハンノキ属



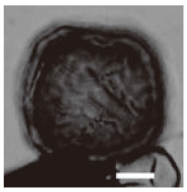
ブナ属



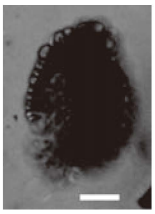
イヌブナ型



コナラ亜属

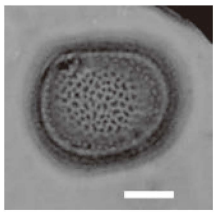


ニレ属
－ケヤキ属

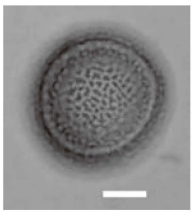


モチノキ属

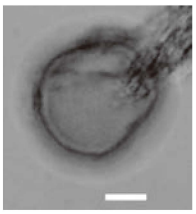
トチノキ属



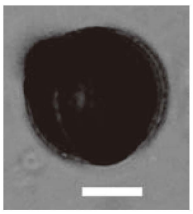
ガマ属



ミクリ属

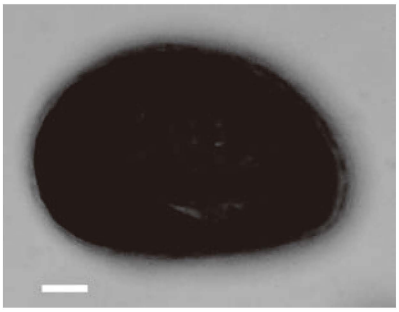


イネ科
（40ﾐｸﾛﾝ未満）

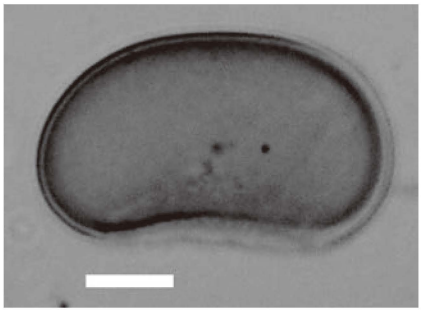


ヨモギ属

カヤツリグサ科



シノブ属



オシダ科
－チャセンシダ科

記述のあるもの以外、スケールバーは0.01mm

**第35図　花粉分析写真**

# 第Ⅵ章　総括

ほ場整備事業に伴う令和４（2022）年度の下邑遺跡と小長沢Ⅱ遺跡、令和５（2023）年度の小長沢鎌蓋遺跡の発掘調査では遺構は少なく、溝や自然流路の検出にとどまった。これは調査対象地が排水路部分という狭小であったというだけではなく、富山市教育委員会が大規模な試掘調査を行い、その結果、令和３（2021）年度に遺跡の範囲の大幅な変更まで行われ、遺跡が点在していることにもつながる。“小長沢”の地名の由来が長沢川（現、山田川）の河原であったというように、調査地のある小長沢地区は蛇行する河川のなかにあったのだろう。はからずも今回の調査で検出した自然流路はその一部といえ、それを証明するようである。富山市教育委員会の試掘調査では、縄文時代から中世の遺構・遺物がみつかっている。しかし、今回の調査区はきわめて限られた地点であり、遺跡範囲は広いが、集落は蛇行した河川で残った島状の安定した部分を利用していたのではないだろうか。

小長沢地区ではこれまでに何度か発掘調査は行われていたが、自然科学分析は実施されていなかった。最後に、花粉分析を行った近隣の遺跡（第 36 図）と比較してみよう。

今回の調査地の西側で丘陵上にある二本榎遺跡では、７世紀初頭の横穴式石室をもつ円墳堆積土で花粉分析が行われている。花粉は僅かな産出にとどまるが、木本ではコナラ属コナラ亜属、ニレ属ーケヤキ属、スギ属、マツ属など、草本ではイネ科、ヨモギ属などがみつかっている（パリノ 2012）。

北方にある友坂遺跡では、13 世紀を主とする区画溝と廃棄土坑の埋土、古代の地山で花粉分析が行われている。花粉は二本榎遺跡同様に僅かな産出にとどまるが、木本ではスギ属、マツ属、コナラ属コナラ亜属など、草本ではイネ科、アカザ科、カヤツリグサ科、ソバ属などがみつかっている（パリノ 2020）。

南方にある富崎遺跡では、弥生時代終末から中世以降の凹地堆積土で花粉分析が行われている。花粉は木本ではスギが他を圧倒し、イチイ科ーイヌガヤ科ーヒノキ科、コナラ属コナラ亜属、ブナ属、ニレ属ーケヤキ属などが続く。草本ではイネ科が他を圧倒し、カヤツリグサ科、アブラナ科、ヨモギ属、アカザ科ーヒユ科などが続く。また、あわせて行われたプラント・オパール分析ではプラント・オパールが多産しており、弥生時代終末期以降に稲作が行われていたと推定している（パレオ 2008）。

今回の小長沢Ⅱ遺跡と小長沢鎌蓋遺跡の花粉分析では、木本ではスギ属が圧倒し、コナラ亜属などが続き、草本ではイネ科が圧倒し、ヨモギ属などが続く。これらから考えてみると、小長沢地区とその周辺ではスギ林が広がり、丘陵地にはコナラ属コナラ亜属などの広葉樹も生育していたことが想定できる。イネ科については水田の存在が考えられる。

富崎遺跡では弥生時代終末期から稲作を想定しているが、小長沢Ⅱ遺跡と小長沢鎌蓋遺跡の分析結果では古代以降からの想定となっている。友坂遺跡も古代以降で同様である。これについては、参考になるデータとして友坂遺跡の別地点で行われた地山の分析（パリノ 2019）がある。この分析では古代の遺構検出面である地山について観察を行い、洪水等で運ばれてきた土壌が堆積した氾濫堆積物との見解を示している。小長沢Ⅱ遺跡と小長沢鎌蓋遺跡は、友坂遺跡と同じ井田川や山田川と丘陵地に挟まれた平野に位置する。このことから小長沢Ⅱ遺跡と小長沢鎌蓋遺跡の遺構検出面である地山は、年代測定結果からみても友坂遺跡と同じ古代であったのではないだろうか。このため、地山の成因も同じで、稲作についても古代以降となったのだろう。

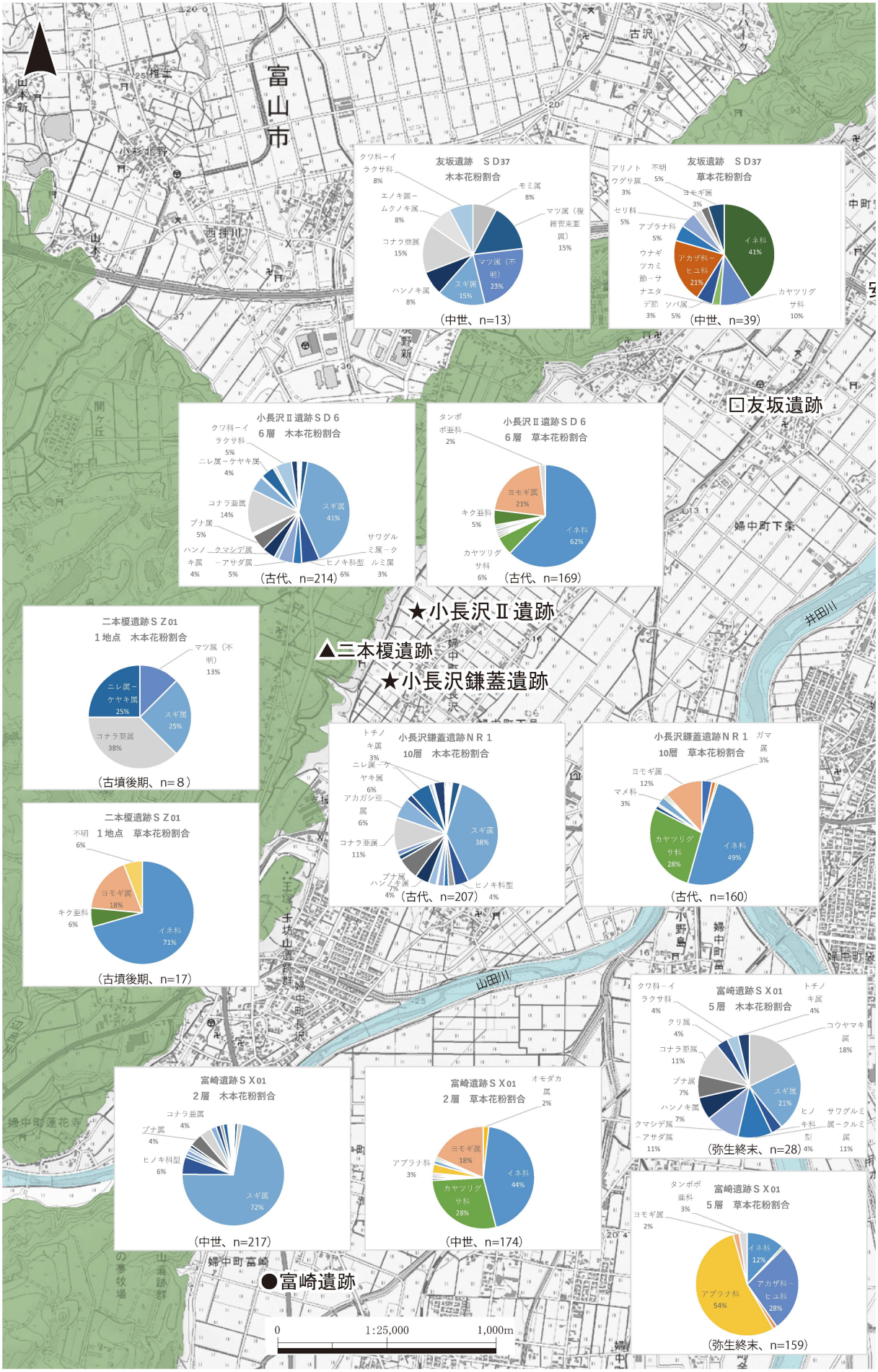
一方、富崎遺跡は山田川の南側にあり、弥生時代終末期の遺構が多く見つかり、遺構検出面である

地山は弥生時代と考えられ、イネ科の花粉とともにプラント・オパールが多く産出している。こちらは弥生時代終末期には稲作が行われていたと考えられており、山田川をはさんで南の富崎遺跡と北の友坂遺跡、小長沢Ⅱ遺跡、小長沢鎌蓋遺跡で様相が大きく異なることが明らかになった。

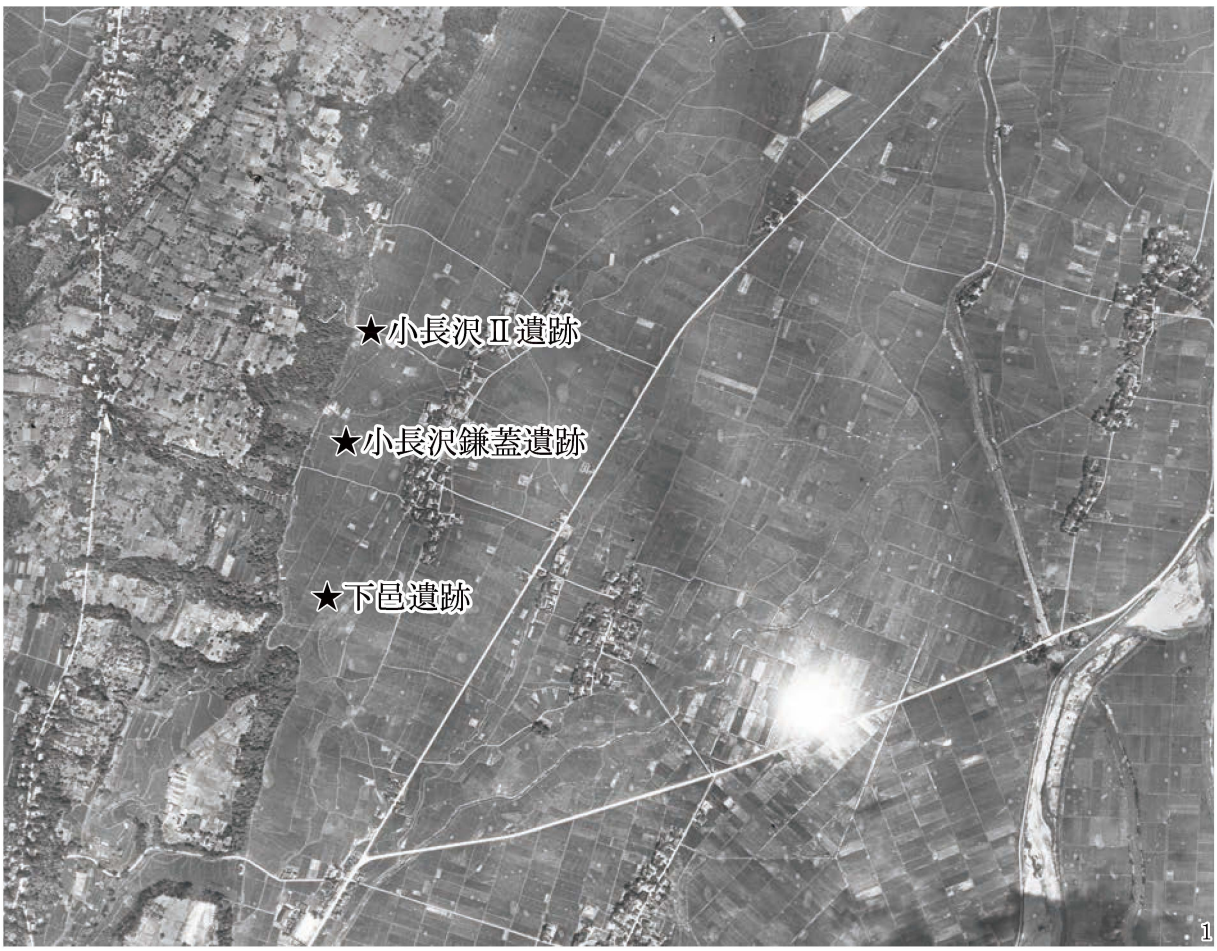
今回の下邑遺跡、小長沢Ⅱ遺跡、小長沢鎌蓋遺跡の調査では、いずれの遺跡でも建物などの居住を示す遺構はなく、集落の存在をみつけることはできなかった。けれども、溝や自然流路の土壌の自然科学分析を行ったことで、河川にはさまれた平野部における遺跡のあり方について考えられる成果を得た。今後、小長沢地区の歴史と環境の変遷を解き明かす上で貴重な資料となるだろう。（町田賢一）

**引用・参考文献**

株式会社パレオ・ラボ 2008「平成 19 年度調査の理化学分析」『富山市富崎遺跡発掘調査報告書』富山市教育委員会
岸本雅敏・関清・山本正敏 1985『都市計画街路　七美・太閤山・高岡線内遺跡群　発掘調査概要（３）南太閤山Ⅰ遺跡』富山県教育委員会
小長沢公民館建設委員会 2006『小長澤公民館　新築記念記録誌』
島田亮仁 2023「小長沢Ⅱ遺跡・下邑遺跡」『令和４年度　埋蔵文化財年報』公益財団法人富山県文化振興財団埋蔵文化財調査課
富山県婦負郡役所 1909『越中　婦負郡志』
中村純 1974「イネ科花粉について、特にイネを中心として」『第四紀研究』13　日本第四紀学会
パリノ・サーヴェイ株式会社 2012「二本榎遺跡の年代測定・微化石分析・石材鑑定」『富山市二本榎遺跡確認調査報告書』富山市教育委員会
パリノ・サーヴェイ株式会社 2019「地山の土壌観察」『富山市内遺跡発掘調査概要 21　－友坂遺跡－』富山市教育委員会
パリノ・サーヴェイ株式会社 2020「放射性炭素年代測定・珪藻分析・花粉分析」『富山市友坂遺跡発掘調査報告書』富山市教育委員会
平凡社 1994『日本歴史地名大系　第 16 巻　富山県の地名』
深井三郎 1978『地形分類図．土地分類基本調査　富山』富山県
深井三郎 1979『地形分類図．土地分類基本調査　八尾』富山県
婦中土地改良区編纂委員会 1983『婦中土地改良区史』婦中土地改良区
婦中町史編纂委員会 1996『婦中町史　通史編』婦中町
婦中町史編纂委員会 1997『婦中町史　資料編』婦中町
婦中町農協史編纂委員会 1975『婦中農協史』婦中町農業協同組合
婦中町古里公民館 1994『ふるさと　郷土の歴史と文化・再発見』
山本正敏・島田美佐子・横山和美・中川道子・越前慎子 1996『梅原胡摩堂遺跡発掘調査報告（遺物編）』財団法人富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所
渡辺正巳 2010「花粉分析法」『必携 考古資料の自然科学調査法』ニュー・サイエンス社.
渡辺正巳 2023「微化石分析」『南太閤山Ⅰ遺跡発掘調査報告　－主要地方道高岡小杉線道路改良事業に伴う埋蔵文化財発掘報告－』公益財団法人富山県文化振興財団埋蔵文化財調査課




**第 36 図　周辺の遺跡における花粉分析結果（１：25,000）**



**航空写真**

1．1946 年 7 月 22 日撮影（国土地理院　USA-M203-A-7-123）
2．2021 年 8 月 2 日撮影（国土地理院　CCB20211-C10-30）

図版 2

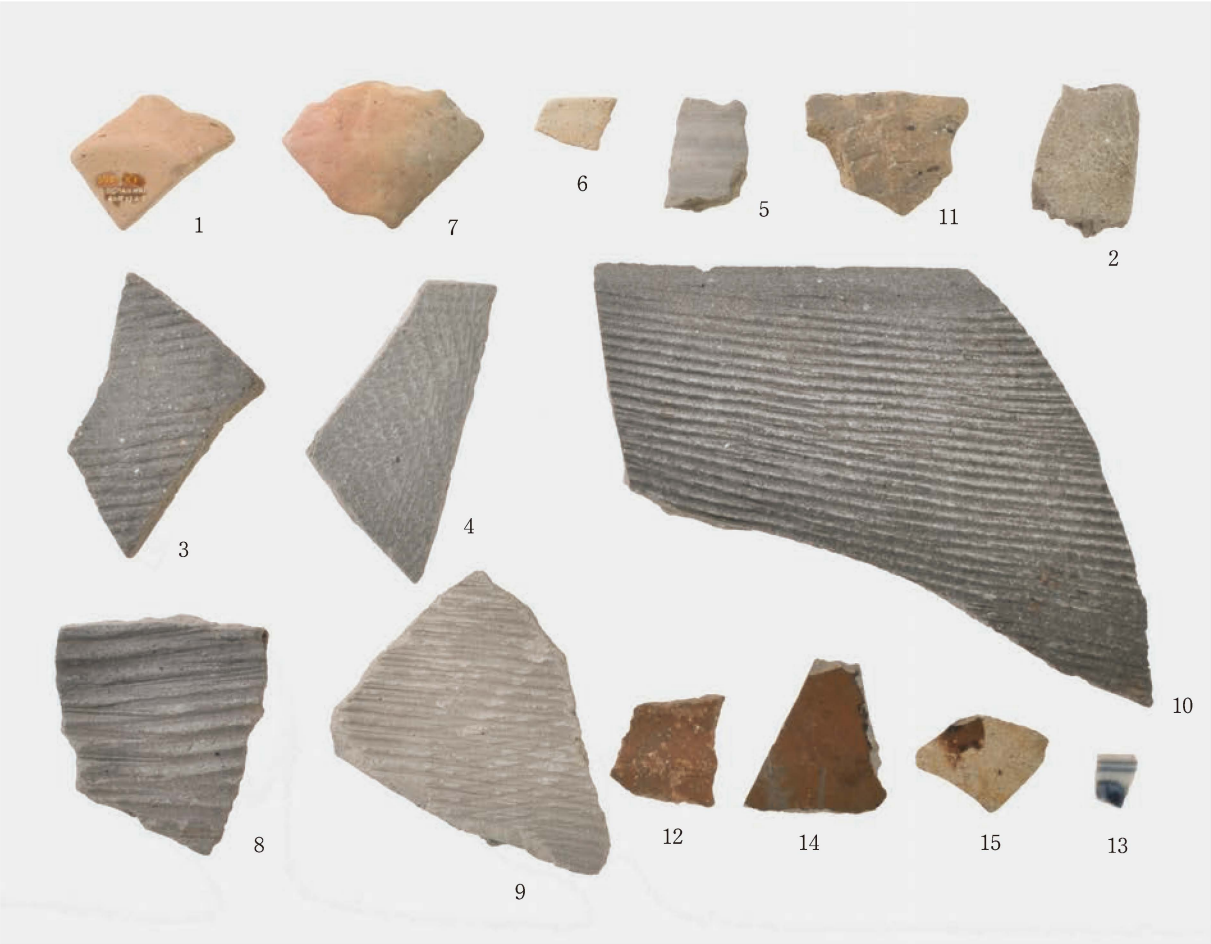
**下邑遺跡　遠景**

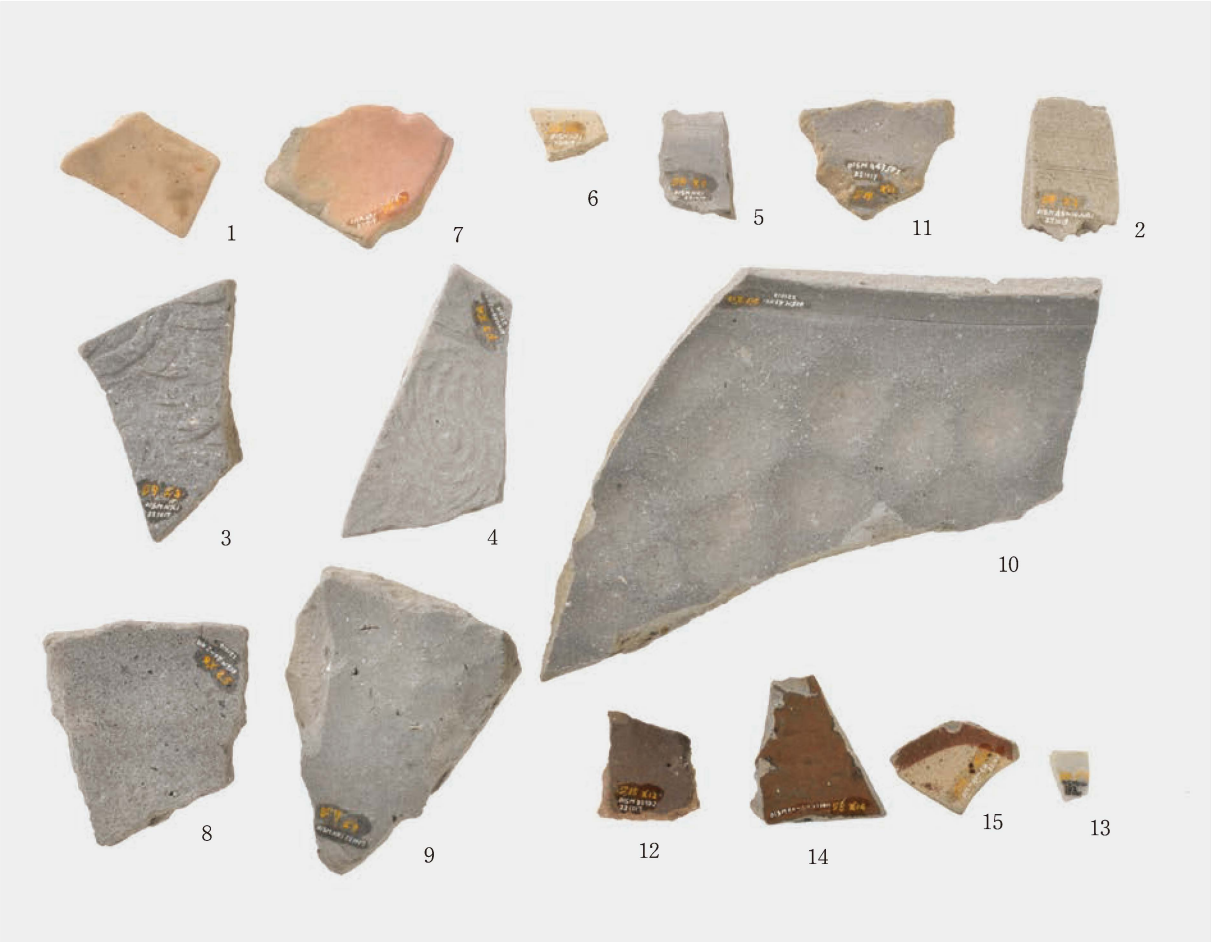
1．西から　2．南から

**下邑遺跡　全景・遺構**

1．全景　2．ＮＲ１（東から）　3．ＮＲ１断面（東から）　4．ＳＤ２（南から）　5．ＳＤ２断面（南から）

図版 4



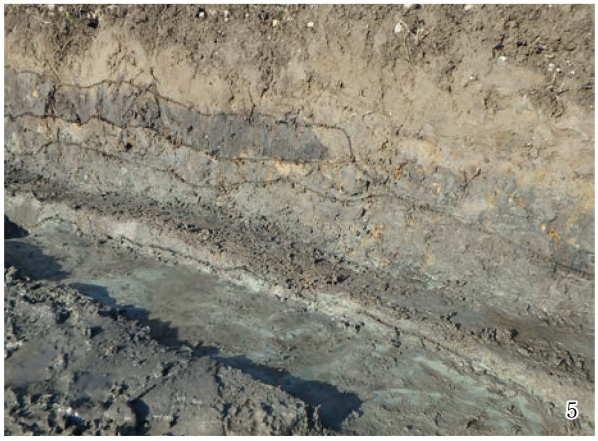




下邑遺跡　土器・陶磁器

下邑遺跡　木製品

**小長沢Ⅱ遺跡　遠景**

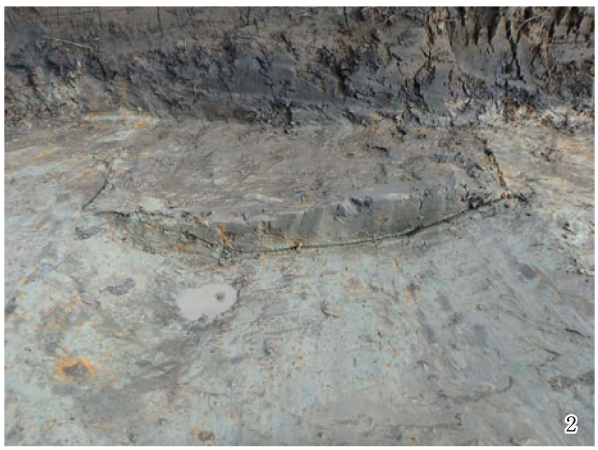
1．西から　2．北から

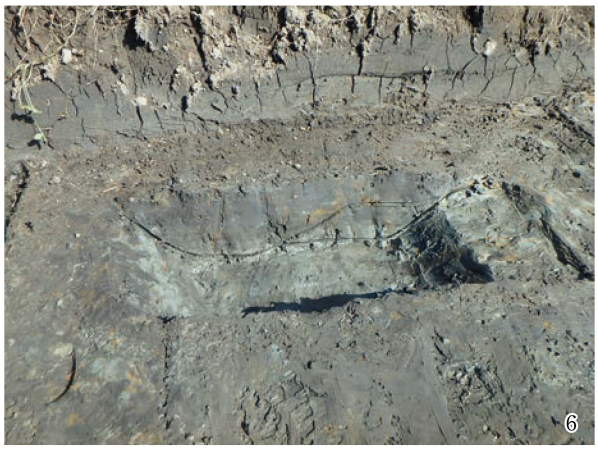


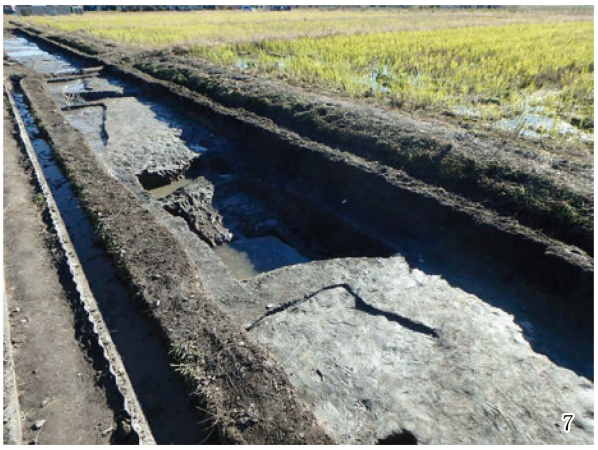

**小長沢Ⅱ遺跡　全景・遺構（1）**

1．全景　2．遺構検出作業（西から）　3．ＳＸ１（北から）　4．ＳＤ２（南東から）　5．ＳＤ２断面（南から）

図版 8

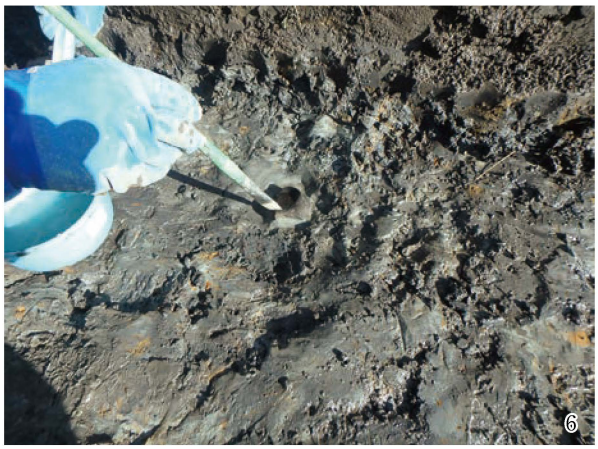




**小長沢Ⅱ遺跡　遺構（2）**

１．ＳＤ３（南西から）　２．ＳＤ３断面（南から）　３．ＳＤ４（北から）　４．ＳＤ４断面（南から）
５．ＳＤ５（南西から）　６．ＳＤ５断面（北西から）　７．ＳＤ６（北西から）　８．ＳＤ６断面（南から）



**小長沢Ⅱ遺跡　遺構（3）**

1．ＳＤ６作業状況（南から）　2．ＳＤ６木製品出土状況（南から）　3．ＳＤ７・８（北東から）　4．ＳＤ７断面（南から）
5．ＳＸ９作業状況（南から）　6．ＳＸ13 作業状況（南から）　7．ＳＸ13 土器出土状況（南から）　8．遺構発掘作業（西から）

図版 10

小長沢Ⅱ遺跡　土器・陶磁器

小長沢Ⅱ遺跡　木製品（1）

図版 12

28

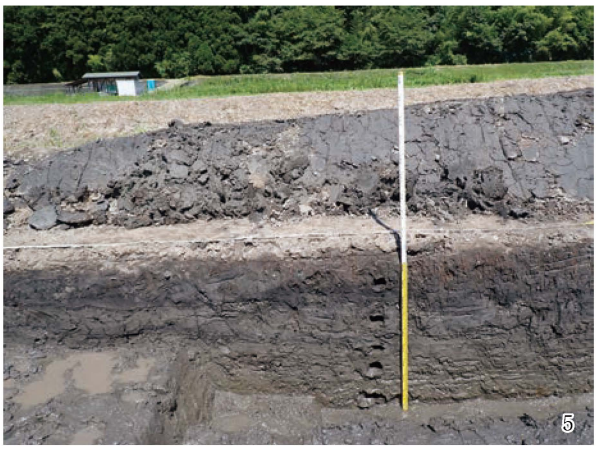
30

31

小長沢Ⅱ遺跡　木製品（2）

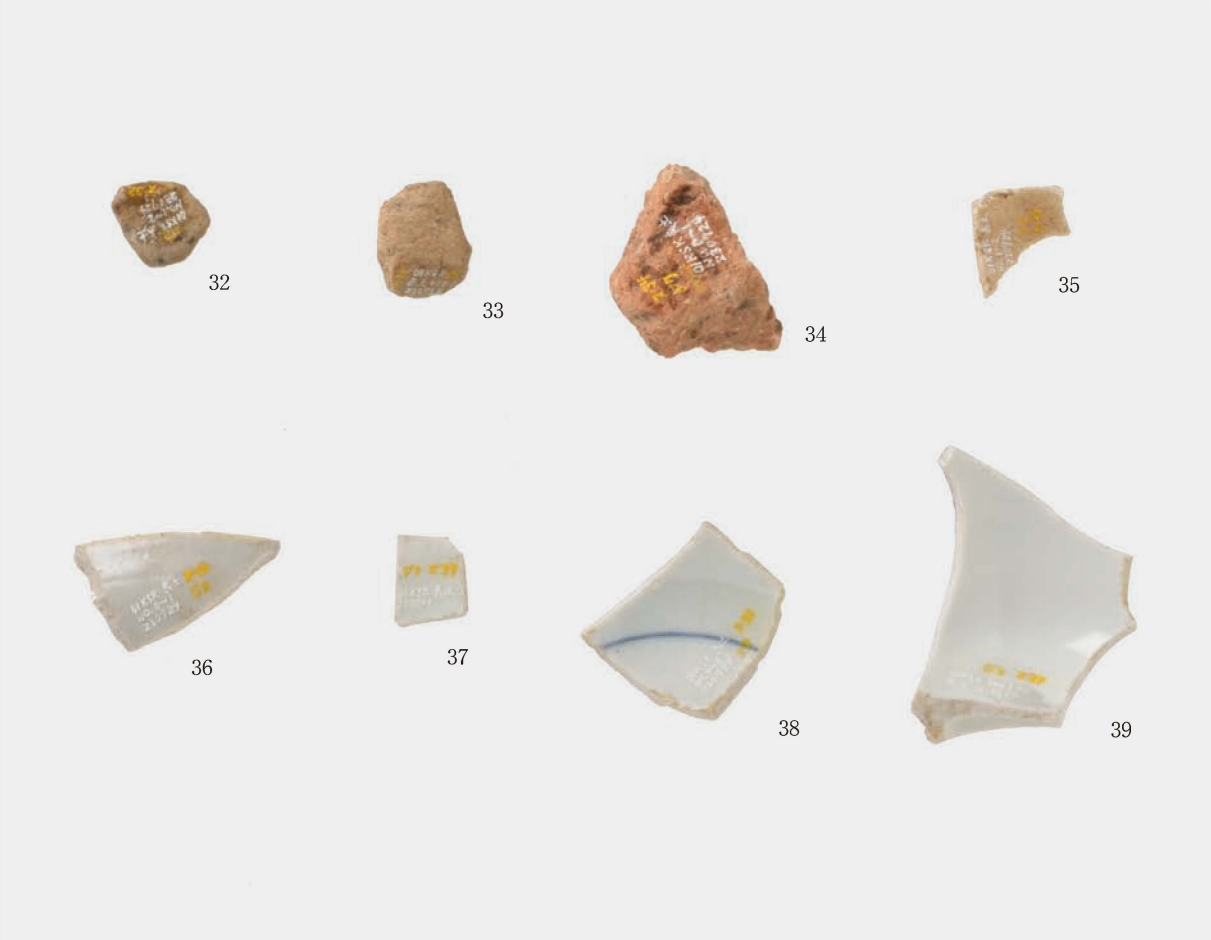
**小長沢鎌蓋遺跡　遠景**

1．東から　2．南から



**小長沢鎌蓋遺跡　遺構**

１．調査前（北から）　２．機械掘削状況（南から）　３．南側基本層序（東から）　４．中央基本層序（南東から）
５．分析試料採取地点（東から）　６．ＮＲ１（南から）　７．ＮＲ１水没状況（南から）　８．現地調査終了後遠景（西から）




小長沢鎌蓋遺跡　土器・陶磁器

# 報告書抄録

| | |
|---|---|
| ふりがな | しもむらいせき　こながさわにいせき　こながさわかまぶたいせき　はっくつちょうさほうこく |
| 書名 | 下邑遺跡　小長沢Ⅱ遺跡　小長沢鎌蓋遺跡　発掘調査報告 |
| 副書名 | 県営農地整備事業小長沢地区に伴う埋蔵文化財発掘報告 |
| 巻次 | |
| シリーズ名 | 富山県文化振興財団埋蔵文化財発掘調査報告 |
| シリーズ番号 | 第80集 |
| 編著者名 | 町田賢一 |
| 編集機関 | 公益財団法人富山県文化振興財団　埋蔵文化財調査課 |
| 所在地 | 〒930-0887　富山県富山市五福4384番1号　TEL　076-442-4229 |
| 発行年月日 | 西暦2024年3月15日 |

| ふりがな<br>所収遺跡名 | ふりがな<br>所在地 | コード<br>市町村 | コード<br>遺跡番号 | 北緯<br>°′″ | 東経<br>°′″ | 調査期間 | 調査面積<br>㎡ | 調査原因 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 下邑遺跡（しもむらいせき） | 富山市（とやまし）<br>婦中町（ふちゅうまち）<br>小長沢（こながさわ） | 16201 | 362027 | 36度<br>39分<br>41秒 | 137度<br>7分<br>49秒 | 20221007～20221026 | 158.0 | 県営農地整備事業<br>小長沢地区<br>に伴う事前調査 |
| 小長沢Ⅱ遺跡（こながさわいせき） | 富山市（とやまし）<br>婦中町（ふちゅうまち）<br>小長沢（こながさわ） | 16201 | 362146 | 36度<br>39分<br>59秒 | 137度<br>7分<br>55秒 | 20221027～20221128 | 281.0 | |
| 小長沢鎌蓋遺跡（こながさわかまぶたいせき） | 富山市（とやまし）<br>婦中町（ふちゅうまち）<br>小長沢（こながさわ） | 16201 | 362180 | 36度<br>39分<br>52秒 | 137度<br>7分<br>51秒 | 20230724～20230801 | 56.0 | |

| 所収遺跡名 | 種別 | 時代 | 遺構 | 遺物 | 特記事項 |
|---|---|---|---|---|---|
| 下邑<br>遺跡 | 集落 | 古代～近世、近代 | 溝　1<br>自然流路　1 | 土師器、須恵器、中世土師器、珠洲、越中瀬戸、肥前系陶磁器、木製品 | 古代以降の自然流路と近代の溝を検出した。 |
| 小長沢Ⅱ<br>遺跡 | 集落 | 古代～近世、近代 | 溝　7<br>落ち込み　6 | 縄文土器、弥生土器、土師器、珠洲、青磁、白磁、肥前系陶磁器、木製品 | 古代以降の溝群と落ち込みを検出した。 |
| 小長沢鎌蓋<br>遺跡 | 集落 | 古代～近世 | 自然流路　1 | 土師器、越中瀬戸、肥前系陶磁器 | 古代以降の自然流路を検出した。 |


要約

下邑遺跡・小長沢Ⅱ遺跡・小長沢鎌蓋遺跡は、井田川や山田川と羽根丘陵とにはさまれた平野部西端に位置する。現況はいずれも水田である。今回の３遺跡の調査では建物などの遺構はみつからず、自然流路や溝などの検出にとどまった。このことから、集落の端で山田川の支流とみられる自然流路やそこから人為的に作り出した水路の一部を検出したと考えられる。出土遺物は縄文時代から近世まであり、居住はないにせよ長期間にわたる土地の利用がうかがえる。また、小長沢地区ではじめて行った自然科学分析の結果、湿地環境の復元や年代値を得ることができたのは大きな成果である。



2024（令和６）年３月５日　印刷
2024（令和６）年３月15日　発行

富山県文化振興財団埋蔵文化財発掘調査報告第80集

下　邑　遺　跡
小長沢Ⅱ遺跡　発掘調査報告
小長沢鎌蓋遺跡

― 県営農地整備事業小長沢地区に伴う埋蔵文化財発掘報告 ―

編集・発行　公益財団法人富山県文化振興財団
埋　蔵　文　化　財　調　査　課
〒930-0887　富山市五福4384番１号
TEL　076－442－4229

印　　刷　キ　ク　ラ　印　刷　株　式　会　社
〒933-0322　高　岡　市　樋　詰　48－2
TEL　0766－31－2794